

新駅前広場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 太田下・須川遺跡

## (第5次調査)

2021年3月

高松市教育委員会

## 例 言

1. 本報告書は、新駅駅前広場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松市太田下町に所在する太田下・須川遺跡第5次調査の報告を収録した。
2. 発掘調査地及び調査期間、調査面積は下記のとおりである。  
調 査 地：高松市太田下町字須川 2473 番 1、2481 番 1  
調査期間：令和元年7月26日～令和2年1月31日  
調査面積：約 2,650 m<sup>2</sup>
3. 発掘調査は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 梶原慎司及び同課非常勤嘱託職員（令和2年度から会計年度任用職員（文化財専門員））三輪望、有岡 京香が担当し、整理作業は梶原、有岡が担当した。
4. 本報告書の執筆及び編集は梶原、有岡が担当した。古墳時代の遺構・遺物については有岡が、その他は梶原が執筆した。
5. 本報告書の標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中の方位は座標北を表す。
6. 遺構断面の注記の色調及び土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 36 版』を参照した。
7. 本報告書の挿図として、高松市都市計画図 10,000 分の 1「No. 5」及び 2,500 分の 1「No. 54」を一部改変して使用した。
8. 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会にて保管している。
9. 調査及び整理作業に際し、以下の方々・関係機関の協力を得た。  
松田朝由、香川県埋蔵文化財センター

# 目 次

<b>第 I 章 調査の経緯と経過</b>	
第 1 節 調査の経緯	1
第 2 節 試掘調査の結果	2
第 3 節 調査の経過	3
<b>第 II 章 地理的・歴史的環境</b>	
第 1 節 地理的環境	6
第 2 節 歴史的環境	6
<b>第 III 章 調査の成果</b>	
第 1 節 調査方法	12
第 2 節 基本層序	12
第 3 節 遺構・遺物	25
第 4 節 自然科学分析	95
<b>第 IV 章 まとめ</b>	101

# 挿 図 目 次

第 1 図 調査区位置図 (S=1/2, 500)	1
第 2 図 試掘調査トレンチ配置図 (S=1/2, 000)	2
第 3 図 調査区割り図 (S=1/400)	5
第 4 図 高松平野と遺跡の位置	6
第 5 図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/12, 500)	7
第 6 図 遺構分布図 (S=1/250)	10 ~ 11
第 7 図 基本層序模式図	12
第 8 図 壁面①土層図 (S=1/40)	13 ~ 14
第 9 図 壁面②土層図 (S=1/40)	15 ~ 16
第 10 図 壁面③土層図 (S=1/40)	17 ~ 18
第 11 図 壁面④土層図 (S=1/40)	19
第 12 図 壁面⑤・⑥土層図 (S=1/40)	20
第 13 図 高松平野微地形模式断面図 (香東川～太田地区) (高橋 1992)	21
第 14 図 遺構検出面レベル (S=1/400)	23
第 15 図 遺構検出面土層別図 (S=1/400)	24
第 16 図 流路平・断面図 (S=1/400, 1/40)	26
第 17 図 弥生時代前期前半～前期後半遺構分布図 (S=1/200)	28 ~ 29
第 18 図 SD01 平・断面図 (S=1/100, 1/40)・出土遺物 (S=1/4, 1/2)	30
第 19 図 SD02 ~ 04 平面図 (S=1/150)	31

第 20 図	SD02 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	32
第 21 図	SD03 平・断面図 (S=1/40)	33
第 22 図	SD04 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	33
第 23 図	SK01～03 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	34
第 24 図	SK04 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	35
第 25 図	SK05 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4, 1/2)	35
第 26 図	包含層出土遺物 (弥生時代前期) (S=1/4)	36
第 27 図	包含層の遺物 (弥生時代前期) 出土範囲 (S=1/400)	37
第 28 図	弥生時代後期～古墳時代前期遺構分布図 (S=1/200)	38～39
第 29 図	SH01 平・断面図 (S=1/40)	41
第 30 図	SH01 平・断面図 (S=1/20)・出土遺物 (S=1/4)	42
第 31 図	SH02 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	43
第 32 図	SH03 平・断面図 (S=1/40)	44
第 33 図	SH04 平・断面図 (S=1/40)	45
第 34 図	SH04 平・断面図 (S=1/20)・出土遺物 (S=1/4, 1/2)	46
第 35 図	SH05 平・断面図 (S=1/40)	47
第 36 図	SH05 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	48
第 37 図	SH06 平・断面図 (S=1/40)	50～51
第 38 図	SH06 外側主柱穴断面図 (S=1/40)	52
第 39 図	SH06 内側主柱穴等断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4, 1/2)	53
第 40 図	SD05 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	55
第 41 図	SX01・SX02 平・断面図 (S=1/40)	56
第 42 図	SX01・SX02 断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	57
第 43 図	SK06 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	58
第 44 図	SK07～09 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	59
第 45 図	包含層出土遺物 (弥生時代後期～古墳時代前期) (S=1/4, 1/2)	60
第 46 図	包含層の遺物 (弥生時代後期～古墳時代前期) 出土範囲 (S=1/400)	61
第 47 図	古墳時代中期後半～後期初頭遺構分布図 (S=1/200)	62～63
第 48 図	SH07 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	64
第 49 図	SH08 平・断面図 (S=1/40)	66
第 50 図	SH08 出土遺物 (S=1/4, 1/2)	67
第 51 図	SH09 平・断面図 (S=1/40, 1/20)	68
第 52 図	SH09 出土遺物 (S=1/4)	69
第 53 図	SH10 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	70
第 54 図	SH11 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	71
第 55 図	SH12 平・断面図 (S=1/40)	72
第 56 図	SH12 断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	73
第 57 図	SB01 平・断面図 (S=1/40)	74
第 58 図	SB02 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)	75

第 59 図	SB03 平・断面図 (S=1/40) . . . . .	76
第 60 図	SK10 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4) . . . . .	77
第 61 図	包含層出土遺物 (古墳時代中期後半) (S=1/4) . . . . .	78
第 62 図	包含層の遺物 (古墳時代中期後半) 出土範囲 (S=1/400) . . . . .	80
第 63 図	SH13 平・断面図 (S=1/40) . . . . .	81
第 64 図	時期不明遺構分布図 (S=1/200) . . . . .	82 ~ 83
第 65 図	SH14・15 平・断面図 (S=1/40) . . . . .	84
第 66 図	SB04 平・断面図 (S=1/40) . . . . .	85
第 67 図	SD06 ~ 09 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4) . . . . .	86
第 68 図	SX03 平・断面図 (S=1/40) . . . . .	87
第 69 図	SK11 ~ 18 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4) . . . . .	90
第 70 図	SK19 ~ 23 平・断面図 (S=1/40) . . . . .	92
第 71 図	SK24・25 平・断面図 (S=1/40) . . . . .	93
第 72 図	包含層の遺物 (古代~中世) 出土範囲 (S=1/400)・出土遺物 (S=1/4) . . . . .	94
第 73 図	弥生時代前期前半~前期後半遺構分布図 (S=1/500) . . . . .	102
第 74 図	弥生時代後期~古墳時代前期遺構分布図 (S=1/500) . . . . .	102
第 75 図	古墳時代中期後半~後期初頭遺構分布図 (S=1/500) . . . . .	104
第 76 図	時期不明遺構分布図 (S=1/500) . . . . .	104
第 77 図	古墳時代中期後半~後期前半の遺構主軸方位 . . . . .	105

## 挿 表 目 次

第 1 表	自然科学分析対応表 . . . . .	95
第 2 表	測定試料及び処理 . . . . .	96
第 3 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 . . . . .	97
第 4 表	高松市太田下・須川遺跡出土木製品同定表 . . . . .	99
第 5 表	土器観察表 (1) . . . . .	106
第 6 表	土器観察表 (2) . . . . .	107
第 7 表	土器観察表 (3) . . . . .	108
第 8 表	土器観察表 (4) . . . . .	109
第 9 表	土器観察表 (5) . . . . .	110
第 10 表	木製品観察表 . . . . .	110
第 11 表	石製品観察表 . . . . .	110

# 写真図版目次

- |       |                      |       |                  |
|-------|----------------------|-------|------------------|
| 図版 1  | SH09-SK01 遺物出土状況①    | 図版 18 | 古墳時代中期後半～後期初頭の遺構 |
| 図版 2  | 調査区全景                | 図版 19 | 古墳時代中期後半～後期初頭の遺構 |
| 図版 3  | A 1 工区全景             | 図版 20 | 古墳時代中期後半～後期初頭の遺構 |
| 図版 4  | A 2 工区全景             | 図版 21 | 古墳時代中期後半～後期初頭の遺構 |
| 図版 5  | B 工区全景               | 図版 22 | 古墳時代中期後半～古代以降の遺構 |
| 図版 6  | C 工区全景               | 図版 23 | 弥生時代前期前半の遺物      |
| 図版 7  | D 1 工区全景             | 図版 24 | 弥生時代前期後半の遺物      |
| 図版 8  | D 2 工区全景             | 図版 25 | 弥生時代前期後半～後期前半の遺物 |
| 図版 9  | 基本層序・壁面              | 図版 26 | 弥生時代後期の遺物        |
| 図版 10 | 弥生時代以前～前期前半の遺構       | 図版 27 | 弥生時代後期前半～後期後半の遺物 |
| 図版 11 | 弥生時代前期後半の遺構          | 図版 28 | 弥生時代後期の遺物        |
| 図版 12 | 弥生時代後期前半～後期後半の遺構     | 図版 29 | 古墳時代中期後半～後期初頭の遺物 |
| 図版 13 | 弥生時代後期前半～後期後半の遺構     | 図版 30 | 古墳時代中期後半～後期初頭の遺物 |
| 図版 14 | 弥生時代後期前半～後期後半の遺構     | 図版 31 | 弥生時代後期～古代以降の遺物   |
| 図版 15 | 弥生時代後期中葉～古墳時代前期後半の遺構 | 図版 32 | 石器               |
| 図版 16 | 弥生時代後期前半～古墳時代中期後半の遺構 |       |                  |
| 図版 17 | 古墳時代中期後半～後期初頭の遺構     |       |                  |

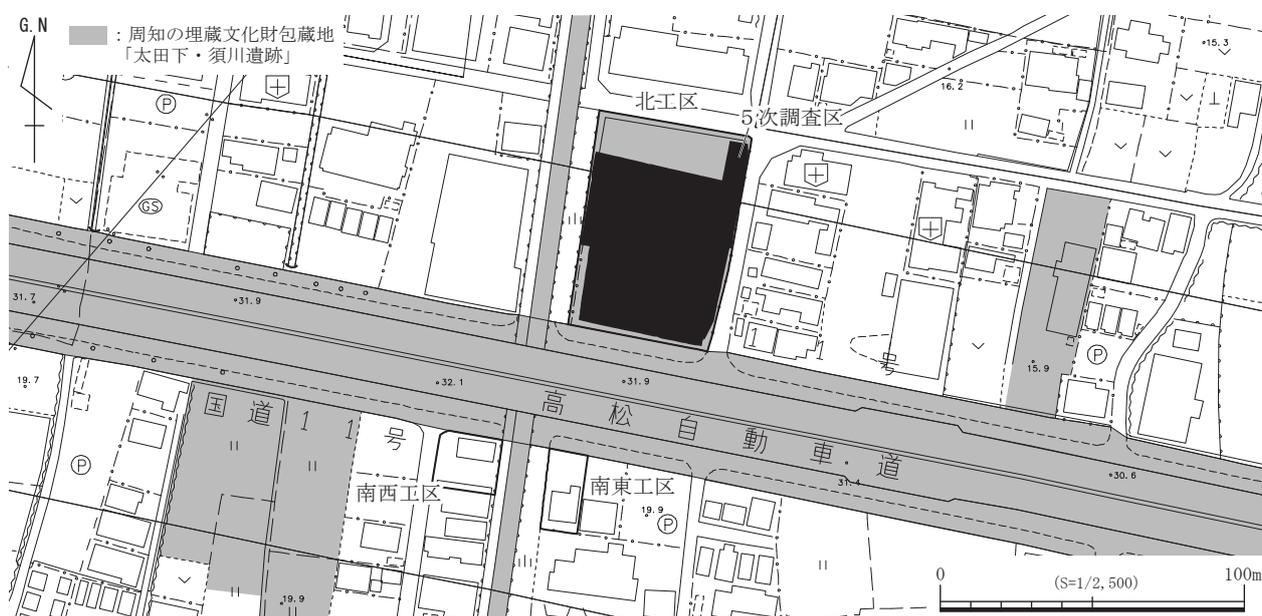
# 第 I 章 調査の経緯と経過

## 第 1 節 調査の経緯

本発掘調査報告書は、高松市都市整備局交通政策課（以下、事業課とする）が事業主体である、ことぞん新駅（伏石駅）駅前広場整備事業を調査原因としたものである。

工事に先立ち事業課と高松市教育委員会（以下、市教委とする）との協議の結果、事業地を対象として試掘調査を実施し埋蔵文化財の存在を確認することとなった。事業地は北工区・南西工区・南東工区の 3 工区に分かれており、南西工区は平成 30 年 4 月 16 日、23 日の実働 2 日間で、北工区・南東工区は令和元年 5 月 7 日から 11 日の実働 5 日間で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、北工区で遺構を確認したことから、北工区の範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地「太田下・須川遺跡」の範囲に追加登録された。

その後、事業課と市教委との協議の上、工事計画に合わせて高松市長から香川県教育委員会（以下、県教委とする）へ文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財の発掘通知を令和元年 5 月 16 日付けで提出したところ、同年 5 月 17 日付けで県教委から工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて市教委は事業課と協議を行い、令和元年 7 月 26 日付けで文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による報告を県教委に提出し、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。



第 1 図 調査区位置図 (S=1/2, 500)

## 第2節 試掘調査の結果

事業課から依頼を受け、南西工区は平成30年4月16日、23日の実働2日間で、北工区・南東工区は令和元年5月7日から11日の実働5日間で試掘調査を実施した。

調査では、計9本のトレンチを設定した(第2図)。各工区のトレンチ数は、北工区が6本、南西工区が2本、南東工区が1本である。

### 北工区北半部(1～4トレンチ)

旧店舗の基礎が布目状に残存しており、基礎の間に遺構面が残っていた。層序は地表面から順に、アスファルト・花崗土が約0.4m堆積し、床土が約0.1m、その下層が明オリーブ灰色シルト層の地山である。全てのト

レンチで竪穴建物跡と想定される遺構を検出した。2トレンチで竪穴建物跡と想定される遺構から、古墳時代中期後半～後期前半の須恵器杯身が出土した。

### 北工区南半部(5・6トレンチ)

層序は地表面から順に、アスファルト・花崗土が約1.5m堆積し、床土が約0.1m、その下層が黒褐色シルト層の地山で、北側は灰褐色粗砂層の地山に変わっていく。全てのトレンチで竪穴建物跡と想定される遺構を検出した。遺構検出のみに留めたため遺物は出土せず時期は不明だが、断割りを入れたところ遺構の深さは約0.1mと残存状況は良くなかった。

### 南東工区(7トレンチ)

地表面から0.6～1.0mの深さでコンクリートのスロープがトレンチ全面に検出された。スロープは北から南へ傾斜しており南側の須川出水に接続するものと考えられ、南東工区全体に広がっていると予想される。また、スロープの構造を考慮すると、少なく見積もっても北工区南側の遺構面より0.3m以上削平を受けていると想定できる。

### 南西工区(8・9トレンチ)

層序は地表面から順に、花崗土・造成土が約1.3m堆積し、近世遺物を含む黒褐色細粒砂層が約0.08m、その下層が黒褐色シルト層の地山である。遺構は確認できず、遺物は石器や須恵器等が少量出土した。



第2図 試掘調査トレンチ配置図 (S=1/2,000)

試掘調査の結果、北工区で埋蔵文化財の存在が確認できたことから北工区の範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地「太田下・須川遺跡」の範囲に追加登録された。

### 第3節 調査の経過

発掘調査は新駅建設工事と併行して行われたため、調査当初は北工区南西部に新駅建設工事用重機が設置されていた。そのため、北半部から発掘調査を開始した。調査はA～D工区に分割して行った。土砂置場の関係上、A工区とD工区は2工区に細分した。また、北半部は既存建物の布目状基礎が残存していたため、遺構面の地山が島状に多数残存する状況となった。そのため、地山が残存した箇所について調査順に番号をつけ工区名（A1-1等）とした（第3図）。

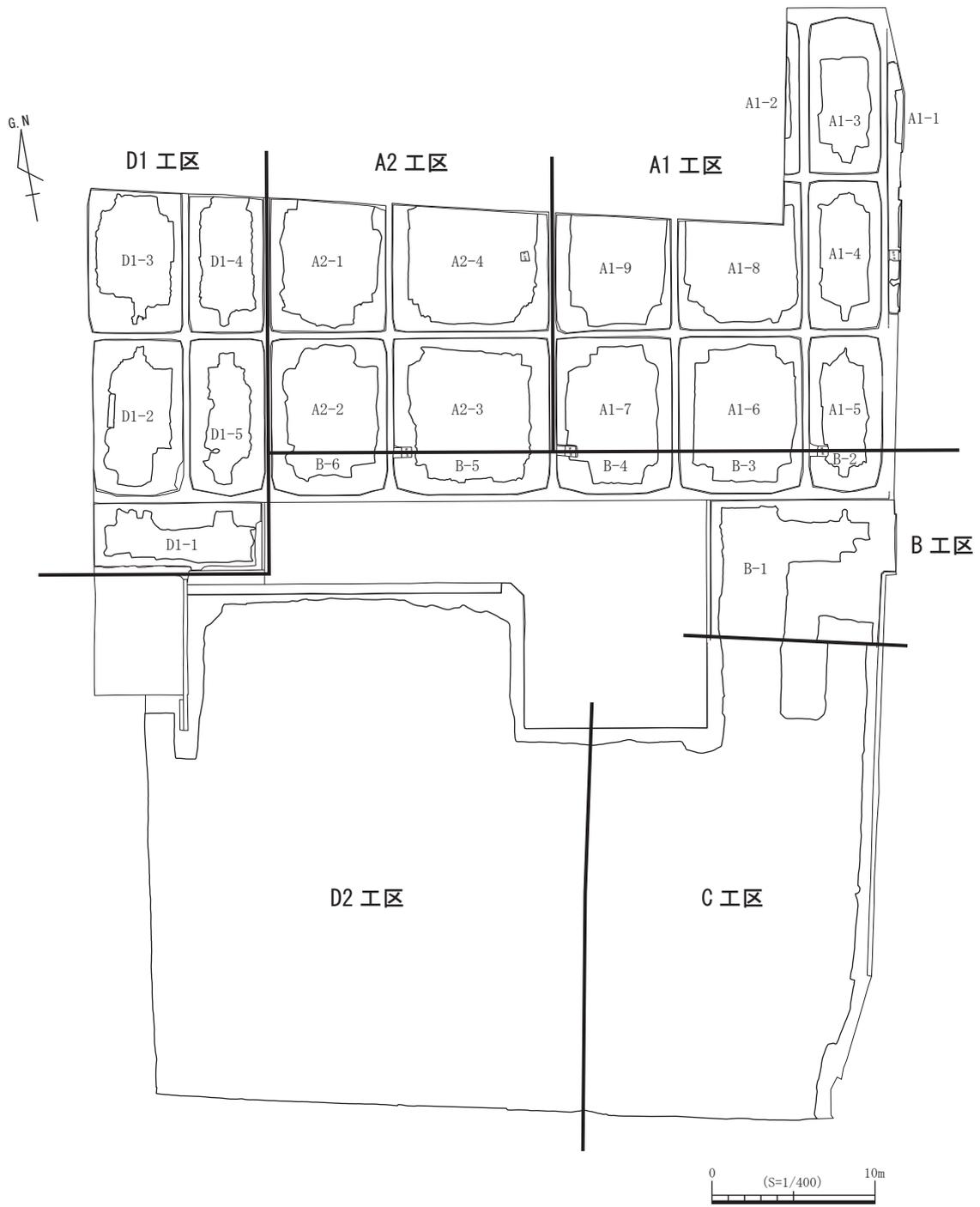
発掘調査は令和元年7月26日に開始し、令和2年1月31日に終了した。調査期間はA工区が令和元年7月26日～9月13日、B工区が9月18～25日、C工区が10月18日～11月14日、D工区が12月6日～令和2年1月30日である。調査の主な工程は以下の通りである。

<令和元年>

7月26～31日	A1-1～A1-7工区の重機掘削及び遺構検出
8月1～9日	A1-1～A1-7工区の遺構掘削及び図化作業
8月16日	A1-8工区の重機掘削及び遺構検出
8月17～20日	A1-8工区の遺構掘削及び図化作業
8月20日	A1-9工区の重機掘削及び遺構検出
8月21～23日	A1-9工区の遺構掘削及び図化作業
8月26日	A1工区の写真撮影
8月27～30日	埋め戻し、図面整理
9月2～3日	A2-1、A2-2工区の重機掘削及び遺構検出
9月4～6日	A2-1、A2-2工区の遺構掘削及び図化作業
9月5日	A2-3工区の重機掘削及び遺構検出
9月9日	A2-4工区の重機掘削及び遺構検出
9月9～11日	A2-3工区の遺構掘削及び図化作業
9月12日	A2-4工区の遺構掘削及び図化作業
9月13日	A2工区の写真撮影
9月14～17日	埋め戻し、図面整理
9月18～19日	B工区の重機掘削及び遺構検出
9月20～24日	B工区の遺構掘削及び図化作業
9月25日	B工区の写真撮影
9月26～27日	埋め戻し、図面整理
10月1～17日	新駅建設工事の都合上、C工区が掘削できないため図面整理
10月18～21日	C工区の重機掘削
10月23～29日	C工区南半部の遺構検出及び包含層掘削
10月26日～11月6日	C工区南半部の遺構掘削及び図化作業

11月6～8日	C工区北半部の遺構検出及び包含層掘削
11月7～12日	C工区北半部の遺構掘削及び図化作業
11月14日	C工区の写真撮影
11月15～18日	埋め戻し、図面整理
11月18日～12月5日	新駅建設工事の都合上、D工区が掘削できないため図面整理
12月6～9日	D1工区の重機掘削及び遺構検出
12月9～13日	D1工区の遺構掘削及び図化作業
12月16日	D1工区の写真撮影
12月17～20日	D2工区の重機掘削
12月23～27日	D2工区南東部の遺構検出、遺構掘削及び図化作業
<令和2年>	
1月6～9日	D2工区南東部の遺構掘削及び図化作業 D2工区南西部の遺構検出及び包含層掘削
1月10～20日	D2工区南西部の遺構掘削及び図化作業
1月21日	D2工区北半部の遺構検出及び包含層掘削
1月22～29日	D2工区北半部の遺構掘削及び図化作業
1月30日	D2工区の写真撮影
1月31日	撤収作業

整理作業は令和2年4月1日から開始し、令和3年3月10日に終了した。



第3図 調査区割り図 (S=1/400)

## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。現在高松平野には、東から新川、春日川、詰田川、御坊川、石清尾山山塊を挟み香東川、本津川が北流しているが、中でも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしている。現在の香東川は近世初頭に生駒家の家臣西嶋八兵衛によって改修されたものであり、かつては石清尾山山塊の南麓から平野中央部を東北流する主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、

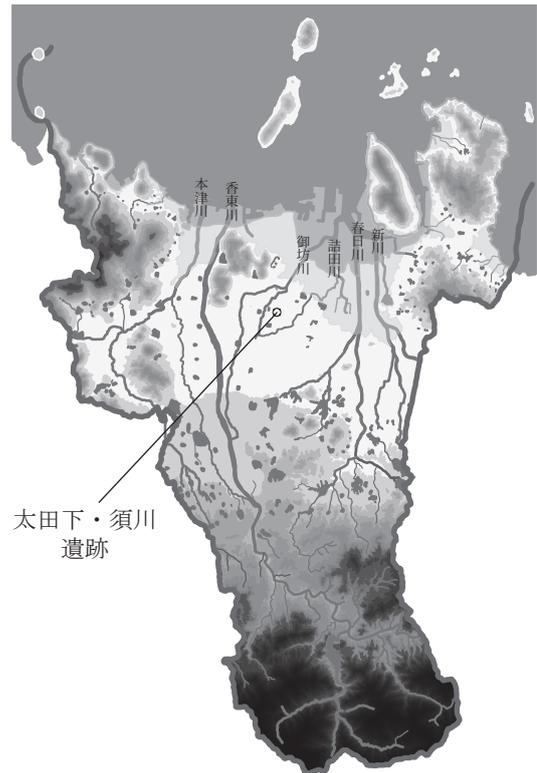
大池、旧ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りを留めている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野への流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くからため池を築造して水不足を解消してきた。これらのため池は、年間1,000ミリ前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。

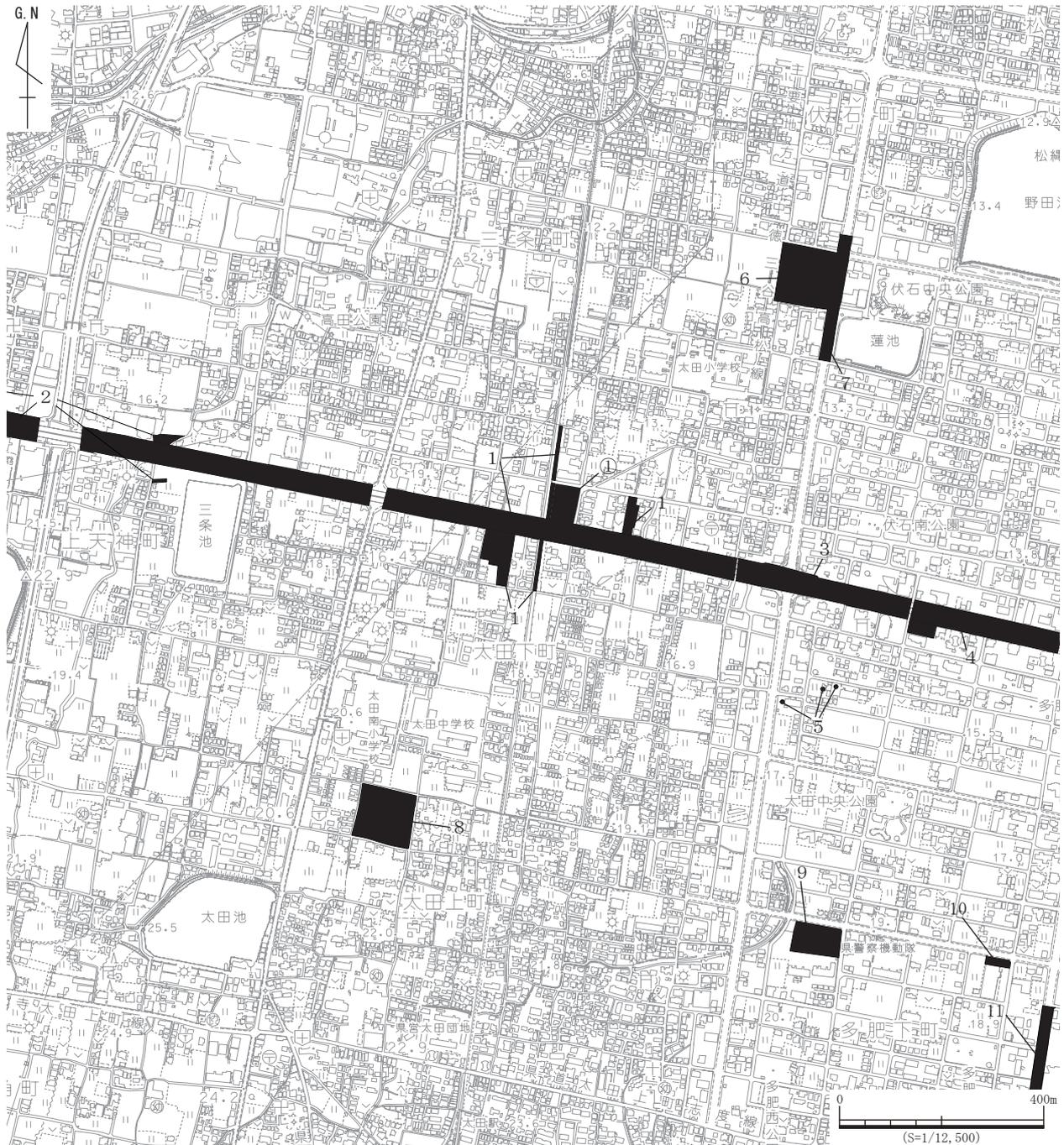
今回発掘調査を行った太田下・須川遺跡は、これまで4次の発掘調査が行われている。その中でも、香川県教委が行った高松東道路建設に伴う発掘調査では、東西に広範囲にわたって調査がなされており、地形や層序等に関する情報が得られている（香川県教委編1995）。また、波多野篤氏が太田下・須川遺跡周辺の地形についてまとめており（波多野2014）、周辺の地形についてはそちらを御参照願いたい。東西630m・南北320mと広範囲に及ぶ太田下・須川遺跡の中で本調査区は微高地にあたり、弥生時代及び古墳時代の集落がみられる。東へいくと低地になり旧河道がみられる。

### 第2節 歴史的環境

高松平野では大規模開発事業の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増加した。特に、今回の調査区周辺域においては、高松東道路建設に伴う発掘調査により得られた成果は大きい。ここ



第4図 高松平野と遺跡の位置



①：太田下・須川遺跡第5次調査区 1：太田下・須川遺跡 2：上天神遺跡 3：蛙股遺跡 4：居石遺跡 5：(塚)  
 6：佐藤城跡 7：キモンドー遺跡 8：太田城跡 9：汲仏遺跡 10：津以口遺跡 11：凹原遺跡

第5図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/12,500)

では、本遺跡周辺域の動態について述べる。なお、太田下・須川遺跡の過去の調査に関しては、高松東道路建設に伴い香川県教委が行った調査を1次調査（香川県教委編1995）、国道11号高松東道路関連整備事業に伴い高松市教委が行った調査を2次調査（高松市教委編2009）、商業施設新築工事に伴い高松市教委が行った調査を3次調査（高松市教委編2014）、眼科新築工事に伴い高松市教委が行った調査を4次調査（高松市教委編2018）とし、本調査を5次調査

とする。

旧石器時代及び縄文時代の遺構は本遺跡周辺ではほとんどみられない。居石遺跡(4)で自然流路から縄文時代晩期前半の土器がまとまって出土している程度である。

弥生時代に入ると、前期後半から遺構がみられるようになる。汲仏遺跡(9)では前期後半の二重環濠や土坑、竪穴建物跡の可能性のある遺構が検出されている。凹原遺跡(11)では前期末～中期初頭の環濠とみられる溝や竪穴建物跡が検出されている。中期に入ると遺構はほとんどみられなくなり、後期に再び集落が営まれるようになる。後期前半に上天神遺跡(2)や太田下・須川遺跡(1)、蛙股遺跡(3)で、後期中葉に汲仏遺跡(9)、後期後半には凹原遺跡(11)で竪穴建物跡等がみられるようになる。また、居石遺跡(4)やキモンド一遺跡(7)でも自然流路から多量の土器が出土している。以上のように、後期になると平野低地部の各地で集落が展開するようになる。

弥生時代後期末に出現した集落が古墳時代前期初頭まで継続する様相が認められるが、古墳時代前期後半～中期前半になると遺構がみられなくなる。中期後半になると、太田下・須川遺跡(1)で竪穴建物跡等が認められる。後期後半には、凹原遺跡(11)や居石遺跡(4)で遺構・遺物が散見される。

平安時代には、汲仏遺跡(9)で10世紀の掘立柱建物跡群がみられる。掘立柱建物跡の規模が大きく規則的配置を取るという特徴をもつが、出土遺物の中には官衙的性格を有するものは少ない。蛙股遺跡(3)では11～12世紀の水田跡がみられ、遺跡周辺地が生産域であったことを窺わせる。また、太田下・須川遺跡(1)や居石遺跡(4)では、自然流路から10～11世紀頃の大型加工木や斎串などの祭祀遺物が出土しており、水に関する祭祀が行われたと想定される。近隣の多肥松林遺跡群でも同時期に水路や自然流路で祭祀が行われたことが指摘されており、同様な性格を有するだろう。

中世後半になると、近隣では佐藤城跡(6)や太田城跡(8)など平地の居館が出現する。キモンド一遺跡(7)では、佐藤城の南東隅の堀が検出された。堀の両側には一段ないし二段の石垣が残存しており、東西方向の堀には間仕切りの石垣が二ヶ所確認された。そのほか近世の遺構としては、キモンド一遺跡(7)などで土坑等が散見される。

## 参考文献

香川県教育委員会編 1995『太田下・須川遺跡』, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

香川県教育委員会編 1995『上天神遺跡』, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

香川県埋蔵文化財センター編 2018『汲仏遺跡』, 香川県教育委員会

高松市教育委員会編 1995『蛙股遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第29集

高松市教育委員会編 1995『居石遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第30集

高松市教育委員会編 1999『キモンド一遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第39集

高松市教育委員会編 2000『上西原遺跡 附汲仏遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第47集

高松市教育委員会編 2001『凹原遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第56集

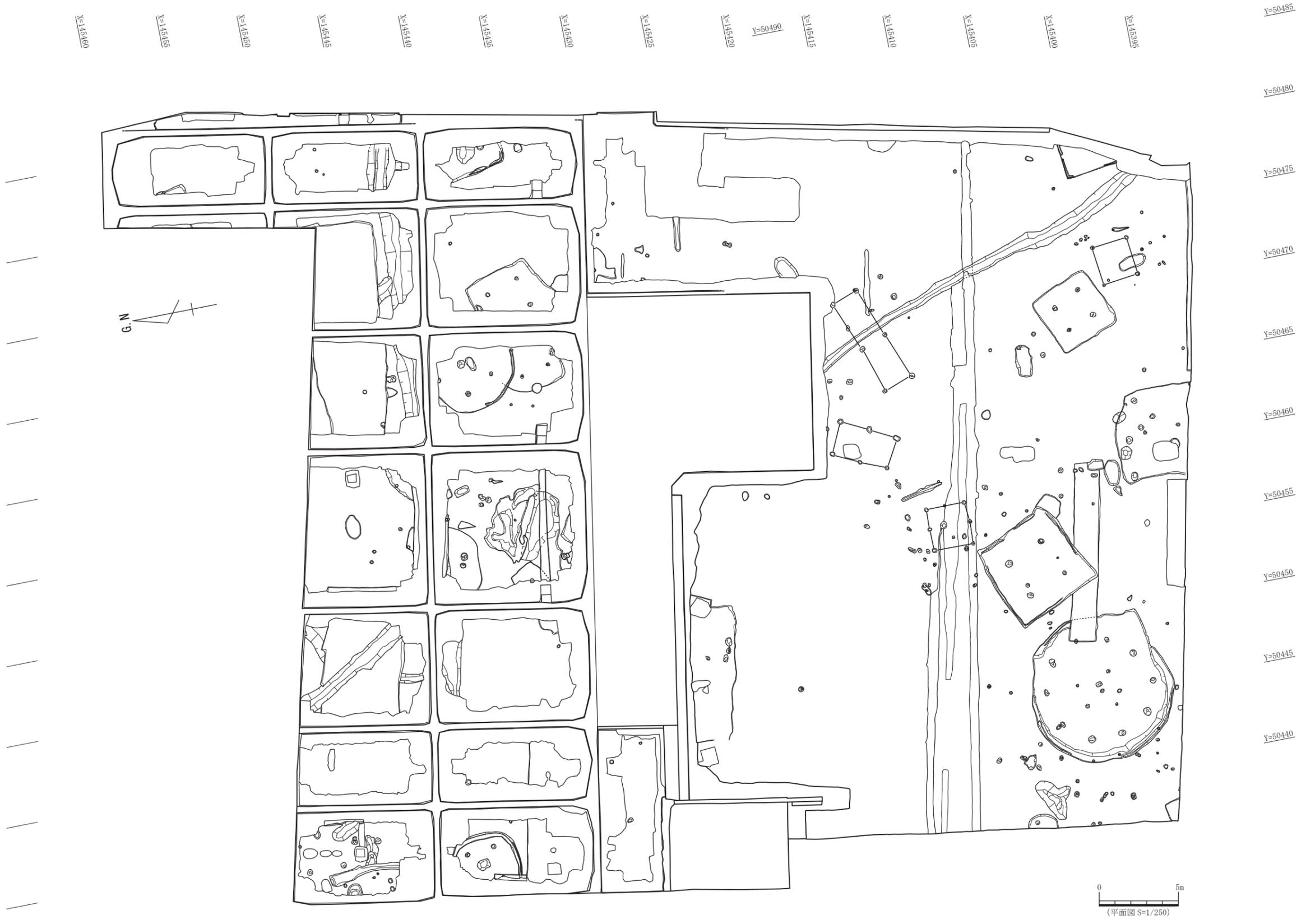
高松市教育委員会編 2009 『太田下・須川遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 124 集

高松市教育委員会編 2014 『太田下・須川遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 151 集

高松市教育委員会編 2018 『太田下・須川遺跡 (第 4 次調査)』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 196 集

波多野篤 2014 「位置と環境」『太田下・須川遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 151 集

渡邊誠 2014 「弥生時代中期から後期における高松平野の集落動態」『東アジア古文化論攷』1, 高倉洋彰先生退職記念論集刊  
行会



第6図 遺構分布図 (S=1/250)

# 第Ⅲ章 調査の成果

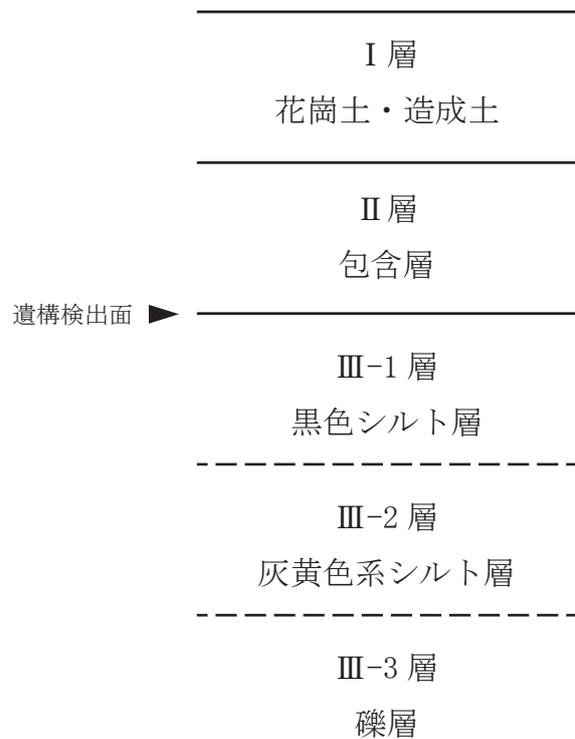
## 第1節 調査方法

調査は、駅前広場のロータリー（車道）部分を対象とした。発掘調査はアスファルトをカッターで除去した後に遺構面までを重機により掘削、その後人力により遺構面を精査し遺構掘削を行った。

図化作業の際に使用する基準点と水準点は、（株）四航コンサルタントに委託し、世界測地系第Ⅳ座標系・4級基準点を設置した。記録に際しては、基準点を基に1/20縮尺で平面図及び断面図を作図した。写真撮影は35mmフィルムカメラを用い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録し、補助的にデジタルカメラも用いた。

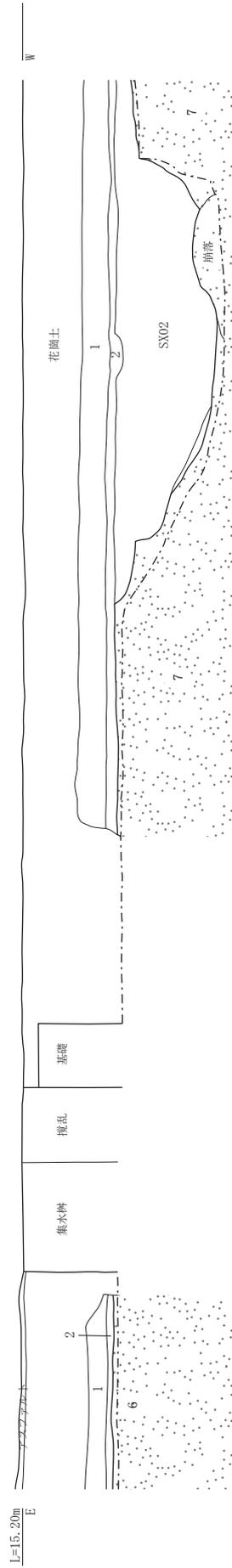
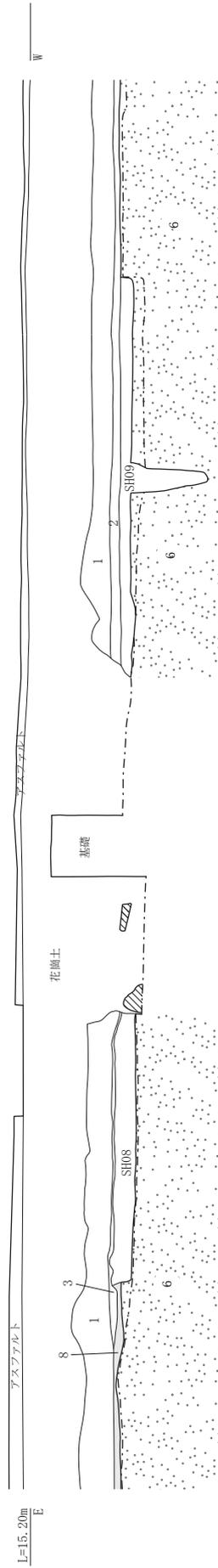
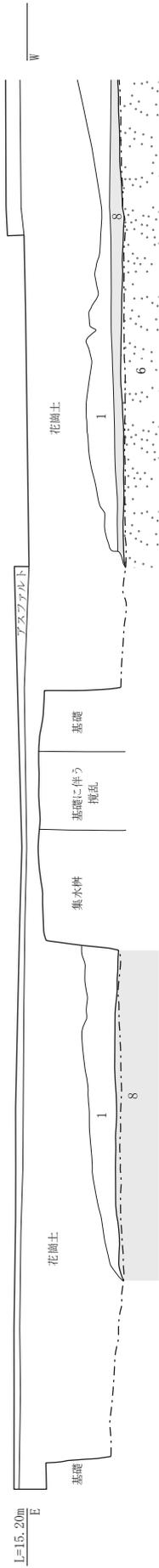
## 第2節 基本層序

基本層序は大きく3つに分けられる（第7図）。第Ⅰ層は花崗土・造成土で、調査区北半部では浅いところで約0.4m堆積しており、調査区南半部では深いところで約1.3m堆積している。第Ⅱ層は遺物包含層で、A1-3、4工区やC工区南半部、D工区北西部などでみられる。遺物包含層からは、弥生時代から近世までの幅広い時期の遺物が出土しており、近世の耕作に伴う造成によるものと考えられる。第Ⅲ層は地山で遺構検出面である。大きく3層に細分できる。Ⅲ-1層は黒色シルト層である。Ⅲ-2層は灰黄色系シルト層で、グライ化した灰オリーブ色シルト層がみられる箇所もある。Ⅲ-3層は直径5～20cm程度の円礫を含む礫層である。壁面①や壁面②をみるとⅢ-2層の上にⅢ-1層があり、Ⅲ-3層→Ⅲ-2層→Ⅲ-1層という順に堆積したことがわかる。香川県教委が行った高松東道路建設に伴う発掘調査で東西に広範囲にわたって調査がなされ、地形や層序等に関する情報が得られている（香川県教委編1995）。その際にも上記のような層序がみられ、Ⅲ-1層については地形が低いところほど厚く堆積しているようである。これらは基本的な層序であるため、壁面④のように場所によって間層として礫層が入る箇所も存在する。また、地点によって堆積の程度が異なるため調査区内の各層を検討する際には注意をする必要がある。

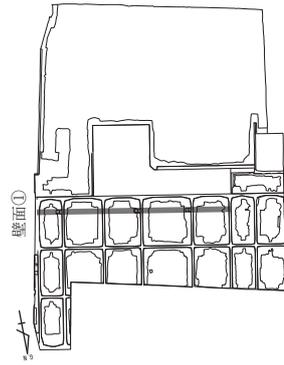
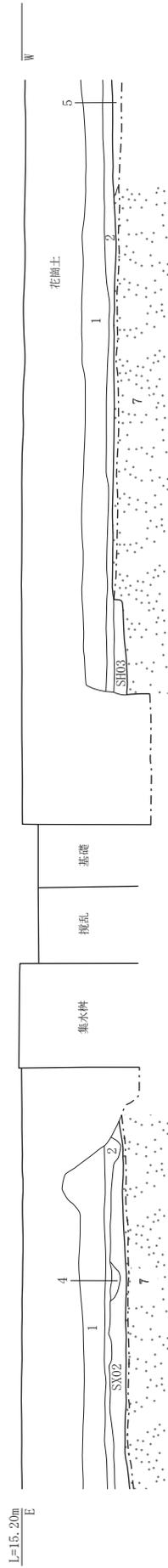


第7図 基本層序模式図

壁面①



壁面①



- III-1層
- III-2層
- III-3層

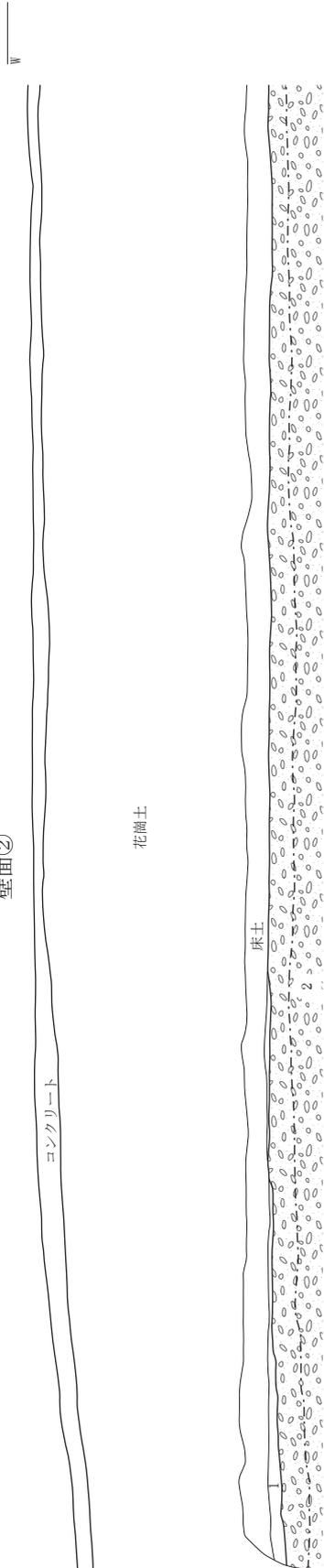


- 1. 7. 5YR2/1 黒細粒砂混じりシルト
  - 2. 10YR2/2 黒褐細粒砂
  - 3. 7. 5Y3/1 オリーブ黒細粒砂混じりシルト
  - 4. 2. 5Y2/1 黒シルト
  - 5. 10YR3/3 暗褐細粒砂混じりシルト (黒ブロックを含む)
  - 6. 10YR2/2 黒褐細粒砂混じりシルト (黒ブロックを含む)
  - 7. 2. 5Y5/2 暗灰黄シルト (黒ブロックを含む)
  - 8. 7. 5Y2/1 黒細粒砂混じりシルト
- } II層
- } 流路
  - } III-2層
  - } III-1層

第 8 図 壁面①土層図 (S=1/40)

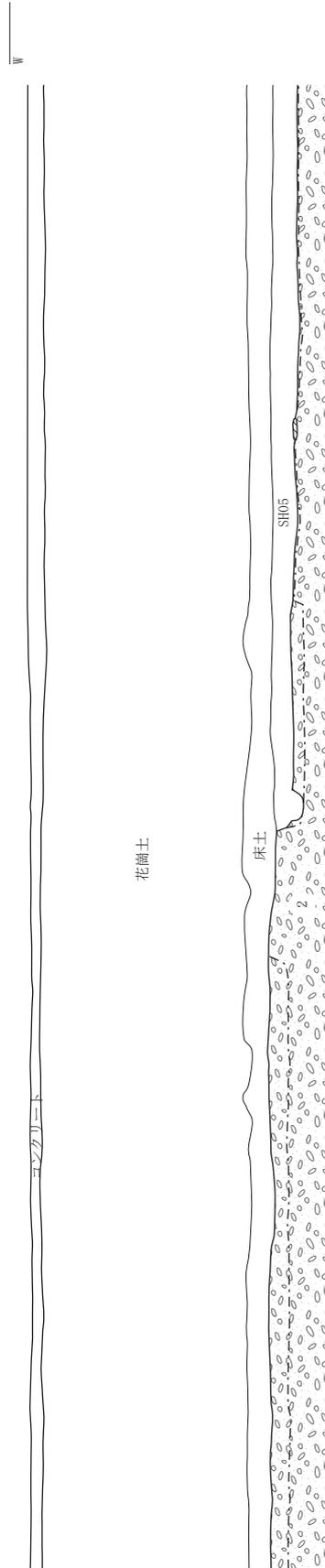
1/16.60m  
E

壁面②



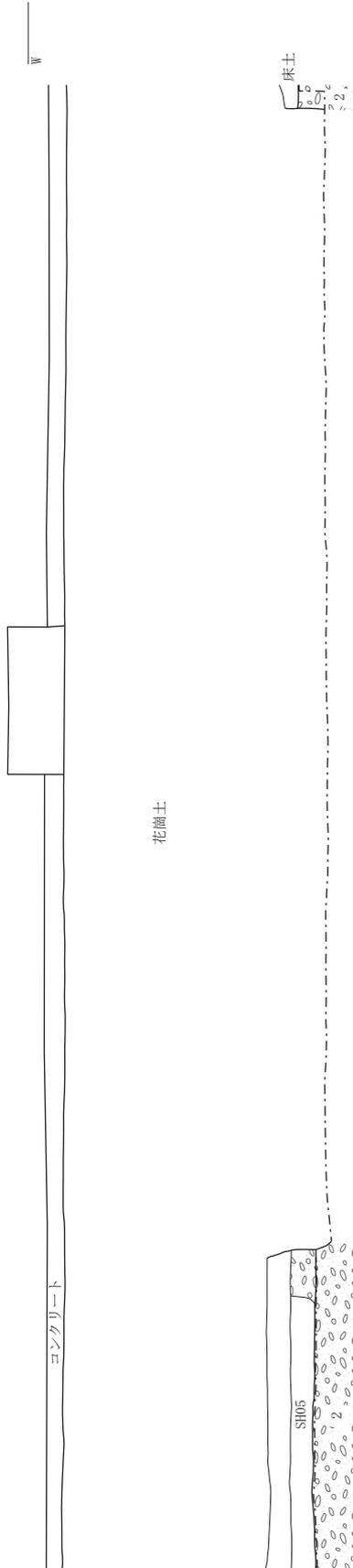
1/16.60m  
E

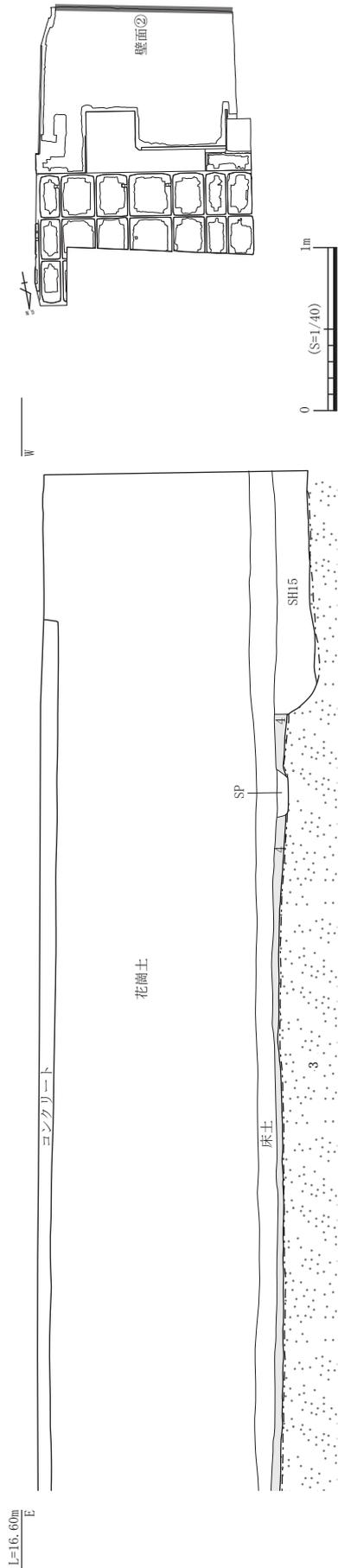
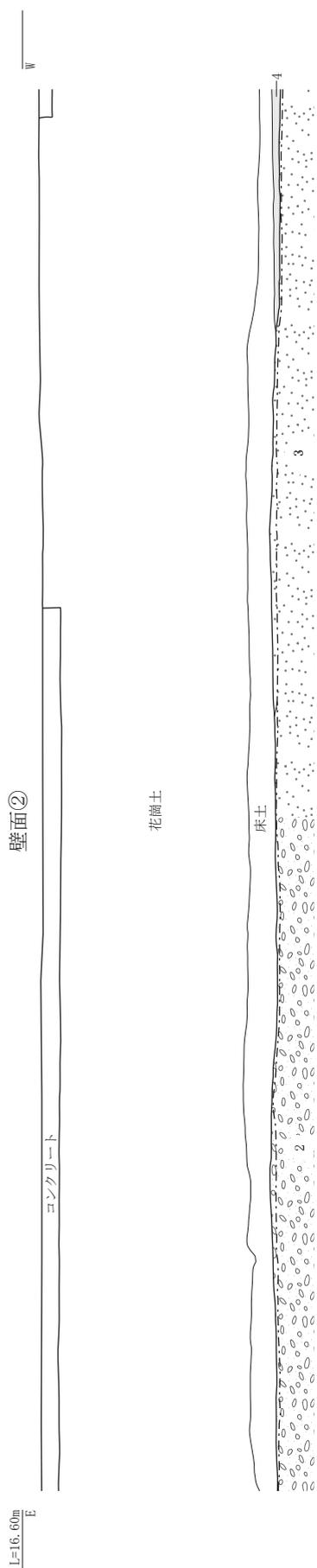
花崗土



1/16.60m  
E

花崗土



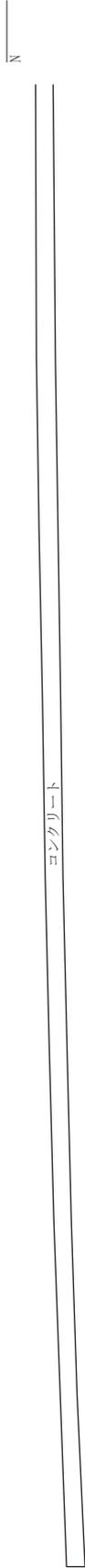


- 1. 5Y4/3 暗オリーブ細粒砂
  - 2. 2.5Y3/1 黒褐細粒砂混じりシルト (φ5~15cm 程度の礫を含む)
  - 3. 10YR3/2 黒褐細粒砂混じりシルト
  - 4. 7.5YR2/2 黒褐細粒砂混じりシルト (白色粘土を含む)
- } II層
  - } III-3層
  - } III-2層
  - } III-1層
- …III-1層
  - …III-2層
  - ▨ …III-3層

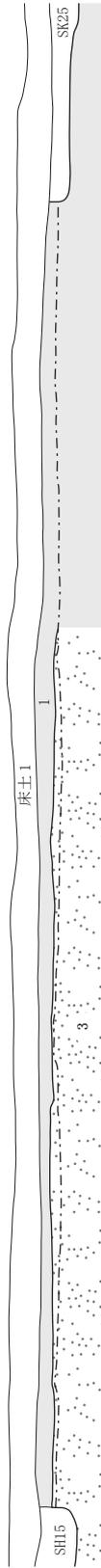
第9図 壁面②土層図 (S=1/40)

壁面③

1/16.80m  
S



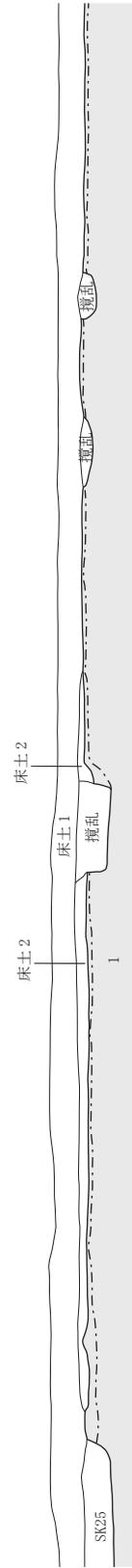
花崗土

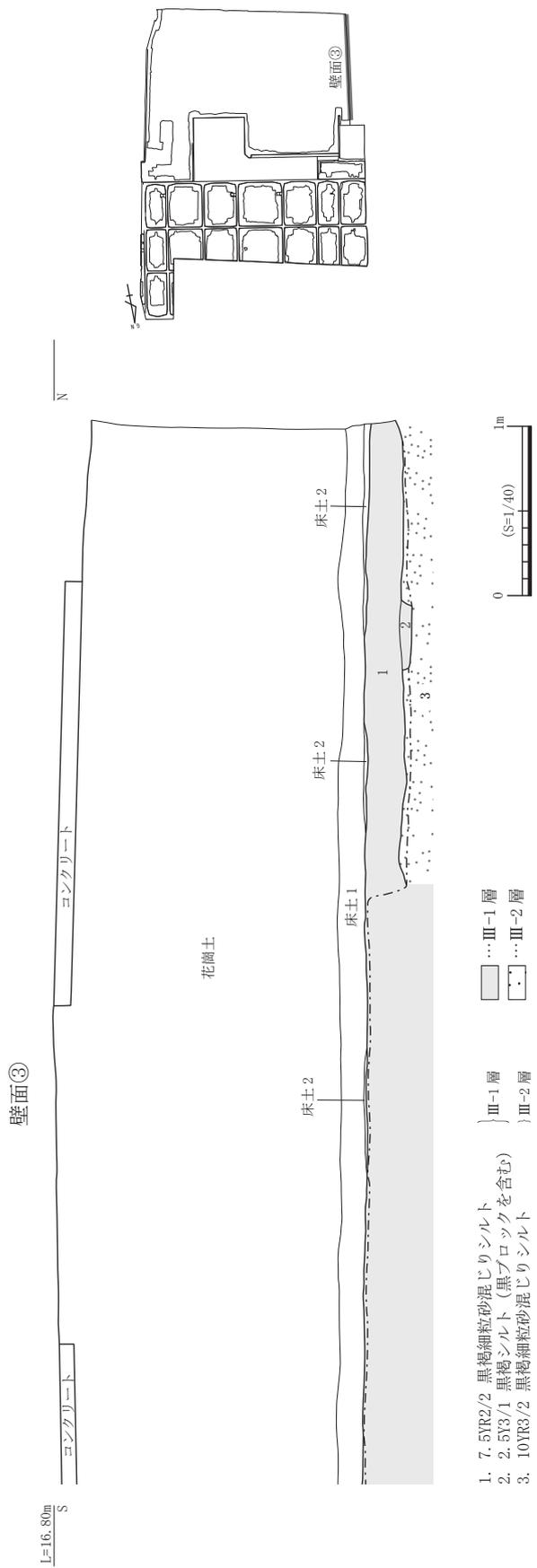


1/16.80m  
S



花崗土

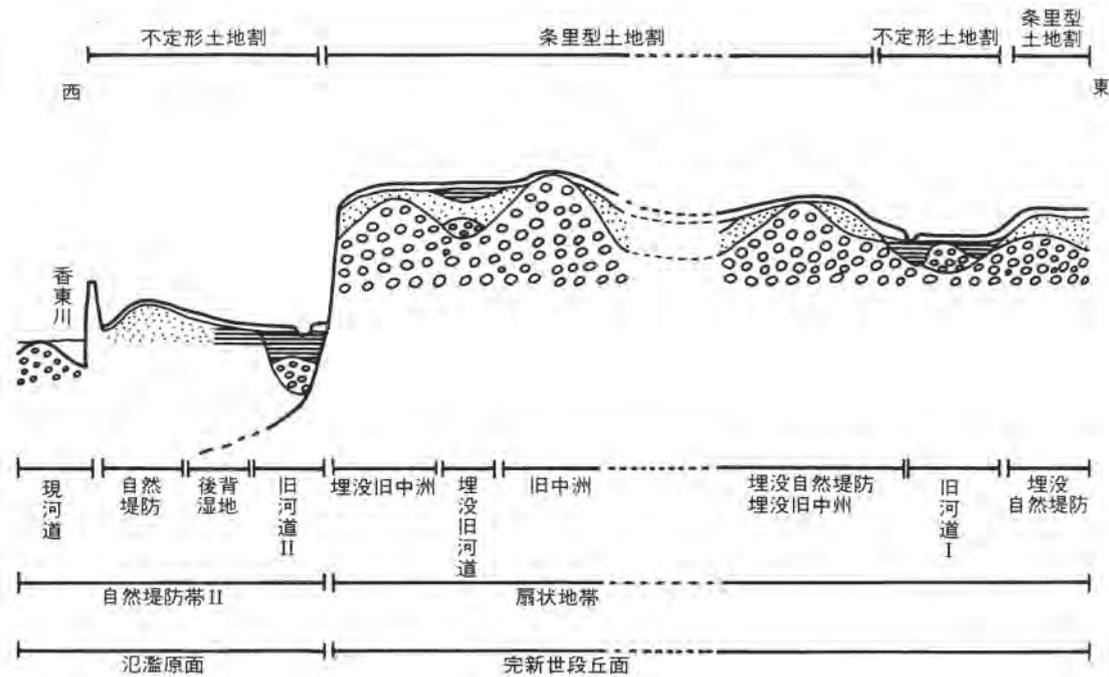




第10図 壁面③土層図 (S=1/40)







第 13 図 高松平野微地形模式断面図（香東川～太田地区）（高橋 1992）

め、少なくとも弥生時代以前にこのような環境変化が起きたことが明らかになっている。現在、扇状地帯及び自然堤防帯には小規模な起伏の存在が認められる。微高地を形成する部分は旧中洲又は旧自然堤防であり、微低地の部分は一時的に流路であった箇所や不完全に埋没した後背湿地であったと考えられる。

以上を考慮すると、Ⅲ-3層（礫層）が扇状地帯を形成する際に堆積した土層で、Ⅲ-2層（灰黄色系シルト層）が礫層の上面を覆った自然堤防帯を形成する際に堆積した土層であると想定される。そして、Ⅲ-1層は微低地の後背湿地に堆積した土層であると考えられる。

では、本発掘調査地点の遺構検出面についてみてみよう。遺構検出レベルをみてみると（第14図）、北半部は14.6 m ± 0.1 mで、南半部は15.0 m ± 0.1 mである。遺構の残存度をみてみると、竪穴建物跡はほとんど床面が残っておらず掘方が約0.1～0.2 m残存している程度である。全体的に大きく削平されていると想定され、削平された時期は田畑に利用されるようになった近世以降と考えられる。

第15図は、遺構検出の際の地山を層別に塗り分けたものである。遺構検出レベルが南北で異なるため注意が必要だが、概ね土層の違いが土地の起伏を表しているといえる。すなわち、Ⅲ-1層（黒色シルト層）が微低地で、Ⅲ-3層（礫層）が微高地となる。流路の部分が最も低く、流路から離れるにしたがって高くなる状況が窺える。Ⅲ-3層（礫層）が露出している部分は遺構がほとんど検出されておらず、掘立柱建物跡のみ検出されている。これは元地形が高い地点ほど大きく削平されたため遺構が残存しなかったと考えられる。また、調査区中央部分でも遺構は検出されておらず、この部分は土地の起伏が激しかったため居住空間として適さなかったのではないかと想定される。

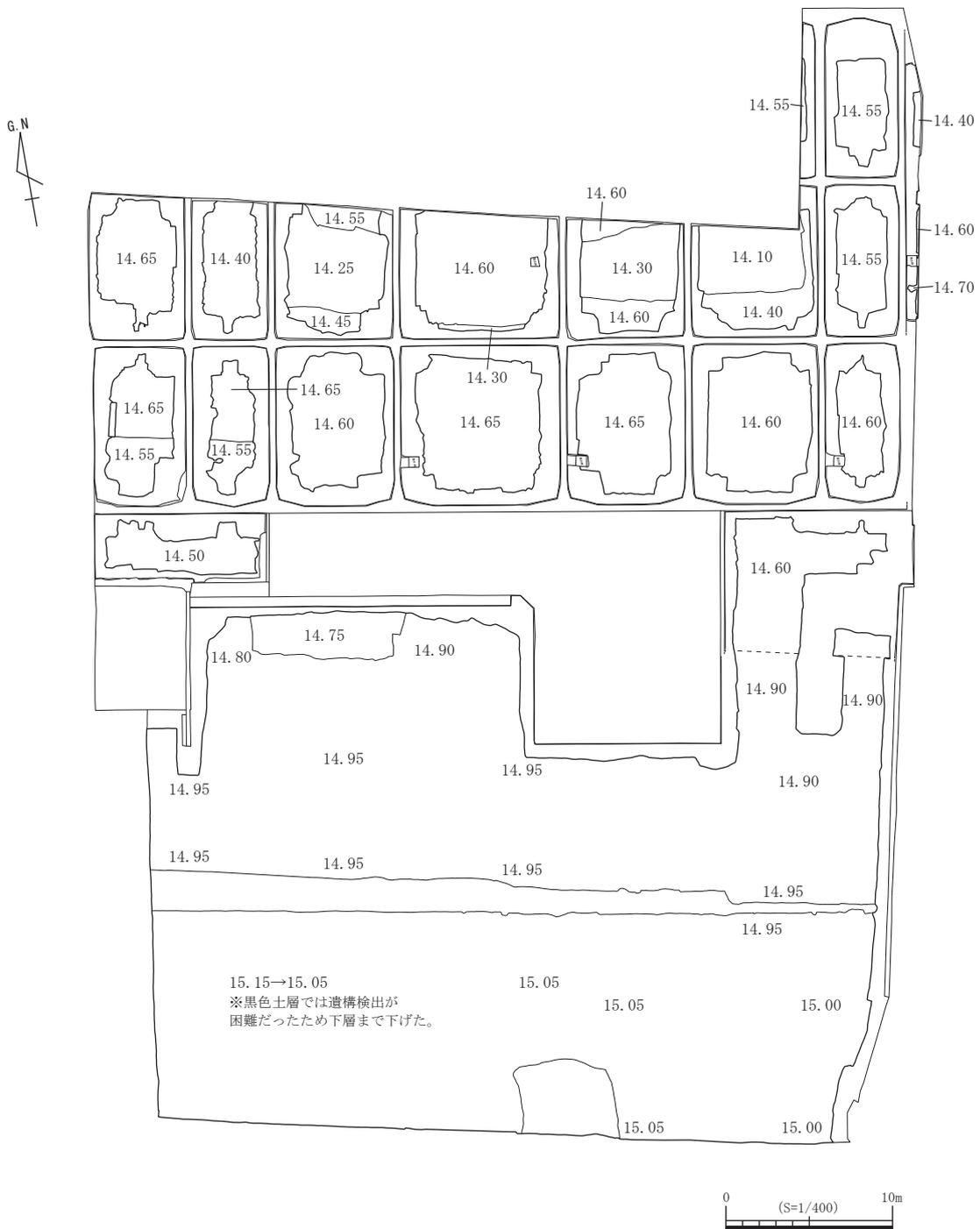
## 参照文献

香川県教育委員会編 1995『太田下・須川遺跡』, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

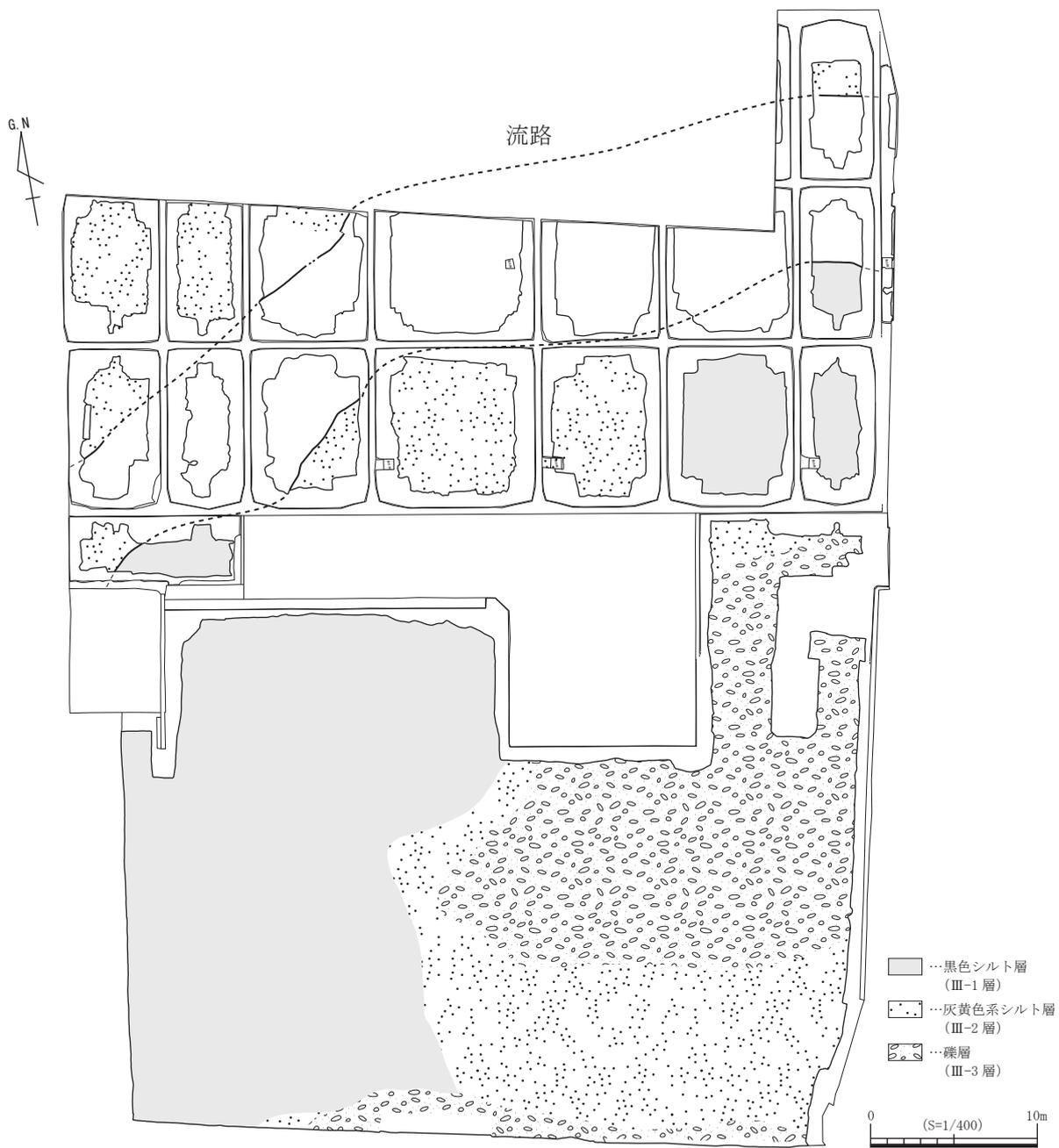
高橋学 1987「高松平野の地形環境分析Ⅰ」『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』, 高松市埋蔵文化財調査報告第12集

高橋学 1988「高松平野の地形環境分析Ⅱ」『弘福寺領讃岐国山田郡田岡比定地域発掘調査概報Ⅰ』, 高松市埋蔵文化財調査報告第13集

高橋学 1992「高松平野の地形環境 —弘福寺領山田郡田岡比定地付近の微地形環境を中心に—」『讃岐国弘福寺領の調査』, 高松市埋蔵文化財調査報告第19集



第 14 図 遺構検出面レベル (S=1/400)



第 15 図 遺構検出面土層別図 (S=1/400)

## 第3節 遺構・遺物

### (1) 弥生時代以前

#### 旧河道 (第16図)

調査区北側で検出した東西方向に流れる旧河道である。他の時代の遺構や現代の攪乱である建物基礎によって切られているため推定になるが、幅は約8.0 m、深さ約0.8 m以上である。遺物は全く含んでおらず、弥生時代前期の遺構に切られているため、旧河道の時期が弥生時代前期以前であることが判明している。現代の攪乱である建物基礎によって切られているため土層断面全体を見ることは困難だったが、A2-2工区(a-a')で断ち割りトレンチを設定した。ただし、湧水が激しいことや壁面が崩落する可能性が高くなったため約0.8 m掘削したところで中断した。埋土は黒褐色中粒砂～細粒砂である。

### (2) 弥生時代前期

本調査において、弥生時代前期の遺構は、調査区北側及び南東側を中心に検出した。遺構は、溝4条、土坑5基を確認した(第17図)。

#### ① 溝

##### SD 01 (第18図)

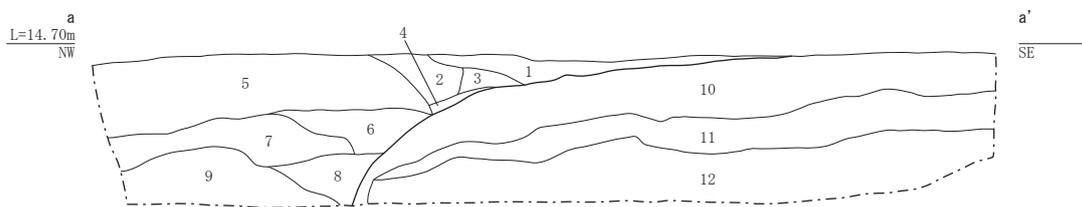
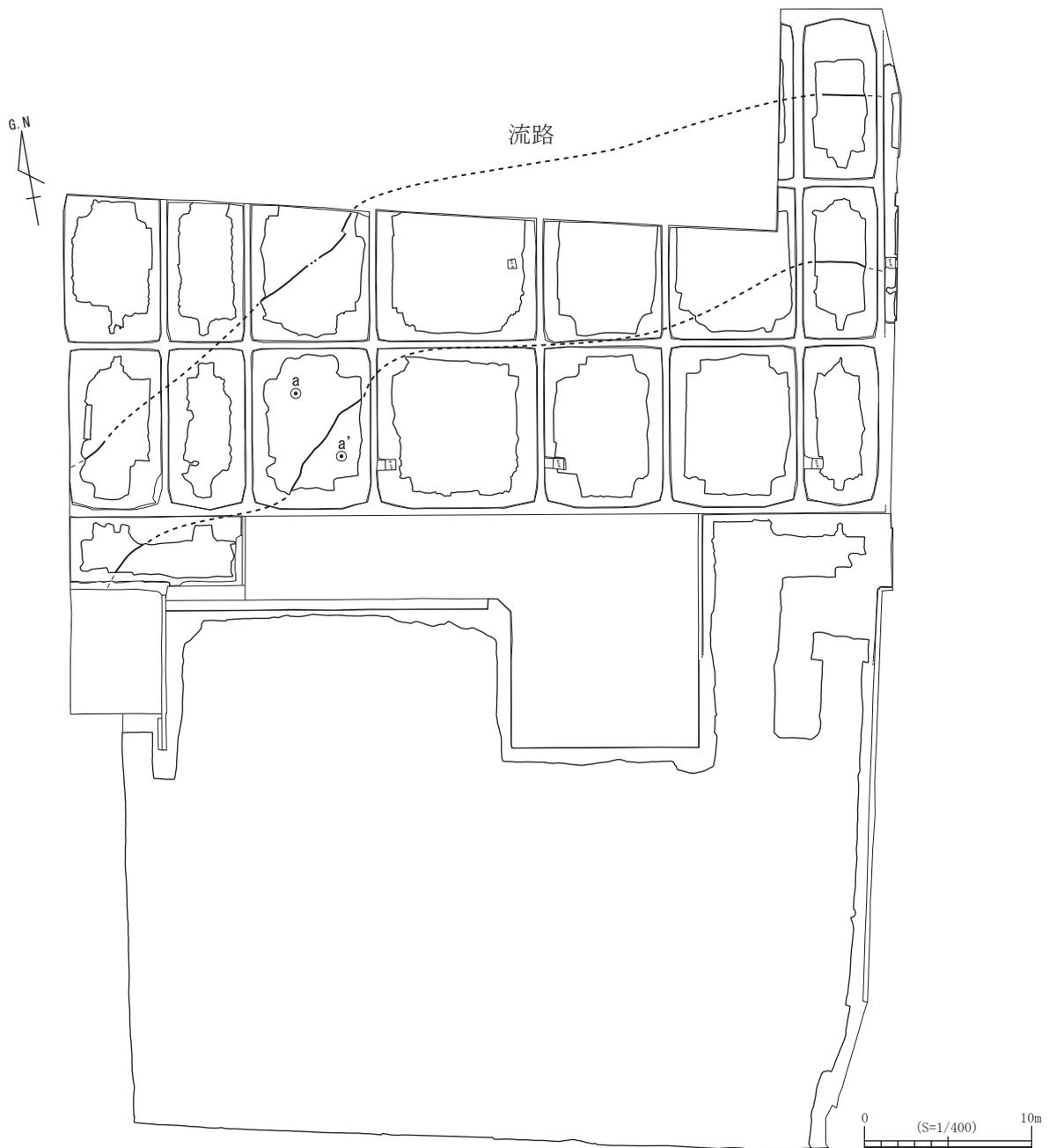
調査区の南東側(C工区)で検出した南東―北西方向の溝で、北側は幅が約0.5 m、深さ約0.18 m、南側は幅が約1.1 m、深さ約0.15 mである。底面の高さは約14.8 mで、場所によって多少の変化はあるが概ね一定である。断面の形態は半円状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルト及び黒褐色シルトである。遺構からは、ビニール袋1袋程度の弥生土器片とサヌカイト製石器及びサヌカイト製剥片が出土した。

**出土遺物** 1は砲弾型深鉢である。外面は条痕後摩滅しているが刻目突帯が口縁部に貼付されていた痕跡は認められないため、刻目突帯をもたない砲弾型深鉢と考えられる。2～5は刻目突帯をもつ屈曲型深鉢である。2は刻目突帯下の頸部に垂直方向に沈線が施される。沈線は幅が約1mmで浅く刻まれる。6は底部片で、端部が外に張り出す平底である。S1はサヌカイト製の打製石斧(石鋏)である。S2はサヌカイト製の石錐である。錐部先端が折れて欠損している。

**所属時期** 突帯文土器(2)の沈線の幅が約1mmで浅く刻まれることから、遠賀川系土器が出現する時期であることがわかる。そのため、遺構の所属時期は弥生時代前期前半である。

##### SD 02 (第19・20図)

調査区北側(A1-4, 8, 9, A2-2, 4工区)で検出した東西方向の溝で、幅は約2.2 m、深さ約0.5 mである。近世の溝であるSD 06、弥生時代後期の竪穴建物跡であるSH 02に切られる。建物基礎による攪乱により大きく削平されているため詳細は不明だが、底面の高さは約14.0～14.1 mで、場所によって多少の変化はあるが概ね一定である。断面形態は台形状で、埋土は



1. 10YR3/3 暗褐細粒砂混じりシルト (黒ブロックを含む)
2. 5Y2/2 オリーブ黒細粒砂
3. 5Y3/1 オリーブ黒細粒砂
4. 2.5Y4/2 暗灰黄細粒砂
5. 2.5Y2/1 黒細粒砂
6. 10YR3/1 黒褐中粒砂混じり細粒砂
7. 2.5Y3/2 黒褐細粒砂
8. 2.5Y4/2 暗灰黄中粒砂混じり細粒砂
9. 10YR3/1 黒褐極細粒砂
10. 5Y5/1 灰シルト混じり細粒砂 (黒ブロックを含む)
11. 5Y3/2 オリーブ黒細粒砂混じりシルト (φ3cm程度の礫を少量含む)
12. 2.5Y4/1 黄灰中粒砂 (φ2~10cm程度の亜円礫を多量含む)

第 16 図 流路平・断面図 (S=1/400, 1/40)

黒色細粒砂～シルト及び黒褐色中粒砂～細粒砂である。遺構からは、ビニール袋1袋程度の弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 7は壺の口縁部で遠賀川系土器特有の段がみられる。8は壺の胴部片である。ヘラ描き沈線が4条みられる。9、10は底部片である。

**所属時期** 出土遺物から弥生時代前期後半である。

#### **S D 03 (第19・21図)**

調査区北東側(A1-8工区)で検出した南東―北西方向の溝で、幅は約0.9m、深さ約0.3mである。攪乱により大きく削平されているためほとんど残存していないが、S D 02に接続する。底面の高さは約14.1mで、S D 02の底面より高い。断面形態は台形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルト～シルト、黒褐色中粒砂混じり細粒砂及び灰色シルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** S D 02と同時期の弥生時代前期後半と考えられる。

#### **S D 04 (第19・22図)**

調査区北側(A2-1工区)で検出した南東―北西方向の溝で、幅は約0.9m、深さ約0.45mである。攪乱により大きく削平されているが、残りの良い箇所で作断面図を作成した。S D 02より南側のA2-3工区ではS D 04の延長部分がみられないこと、出土遺物の所属時期がS D 02と同時期であることから、S D 03と同様にS D 02に接続するものと想定される。溝の方向はS D 03と同一方向である。底面の高さは約15.05mで、断面形態は台形状で、埋土は黒褐色シルトである。遺構からは、ビニール袋1袋程度の弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 11は甕又は鉢の口縁部である。如意形口縁である。口縁端部に刻目を施し、頸部にヘラ描き沈線が4条みられる。12、13は甕の口縁部である。12は如意形口縁で、端部に刻目がみられる。13は逆L字形口縁で、端部に刻目がみられる。口縁部内面には接合痕がある。

**所属時期** 出土遺物から弥生時代前期後半である。

## **② 土坑**

#### **S K 01 (第23図)**

調査区東側(C工区)で検出した土坑である。攪乱により削平されているため全長は不明だが、平面形態は東西に長く延びる楕円形状で、長軸1.48m以上、短軸約1.00m、深さ約0.20mの土坑である。断面は台形状で、埋土は黒色シルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

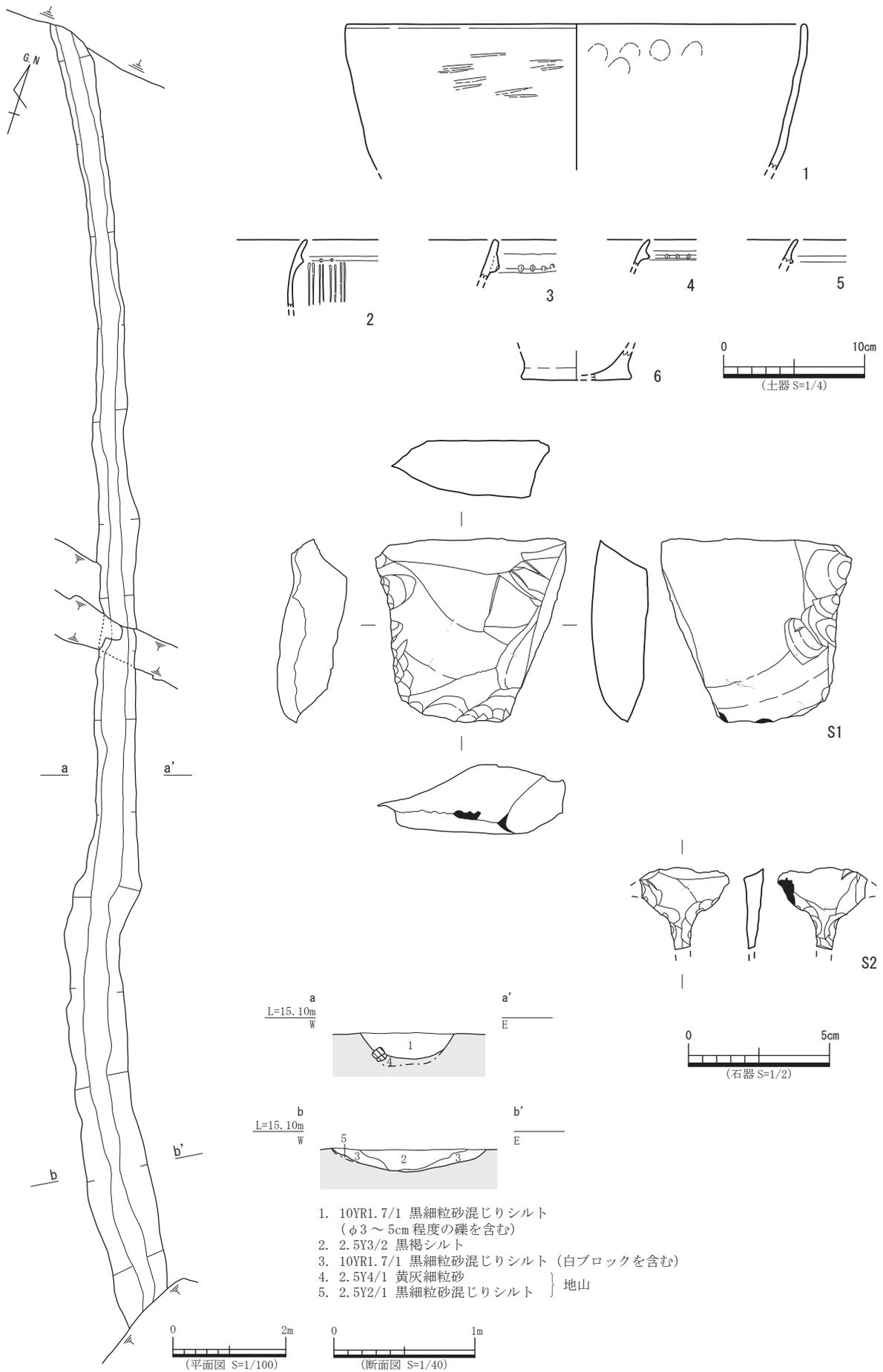
**所属時期** 遺構の平面形態と周辺状況から弥生時代前期後半と考えられる。

#### **S K 02 (第23図)**

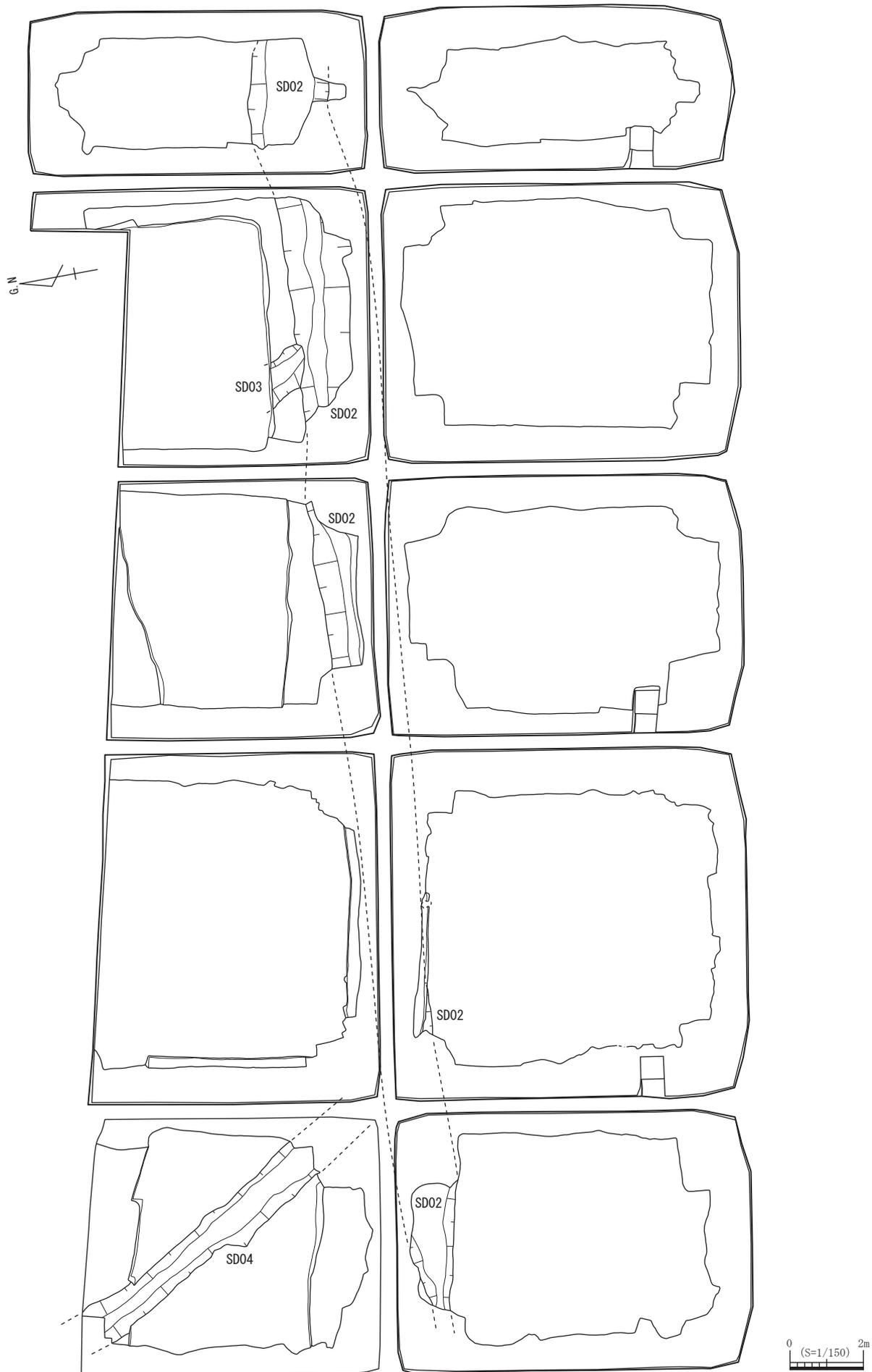
調査区南東側(C工区)で検出した土坑である。平面形態は東西に長く延びる長方形で、長軸約1.96m、短軸約1.00m、深さ約0.16mの土坑である。断面は台形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。遺構からは、ビニール袋1袋程度の弥生土器片とサヌカイト製剥片が出土したが、時期が判別できるものはなかった。



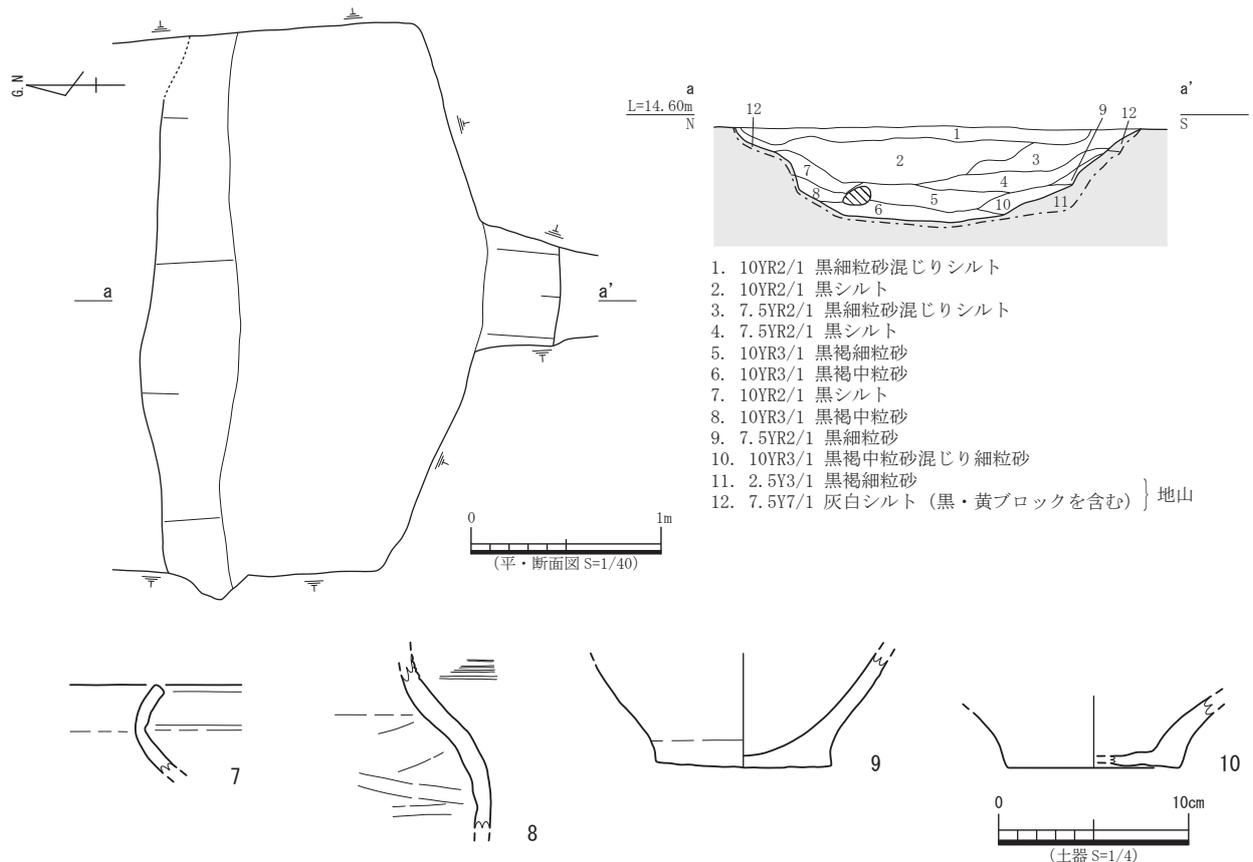
第 17 図 弥生時代前期前半～前期後半遺構分布図 (S=1/200)



第 18 図 SD01 平・断面図 (S=1/100, 1/40)・出土遺物 (S=1/4, 1/2)



第 19 図 SD02 ~ 04 平面図 (S=1/150)



第20図 SD02 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

**所属時期** 遺構の平面形態と周辺状況から弥生時代前期後半と考えられる。

**SK 03 (第23図)**

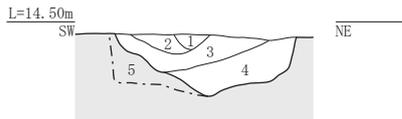
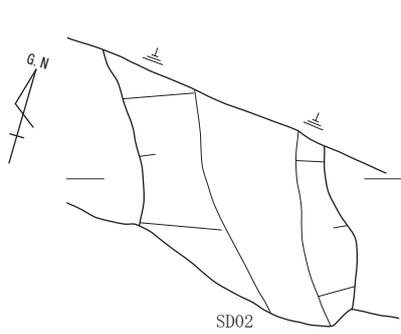
調査区南側 (D2 工区) で検出した土坑である。平面形態は南北に長く延びる長方形で、長軸約 1.00 m、短軸約 0.66 m、深さ約 0.12 m の土坑である。断面は半円状で、埋土は褐灰色シルト及び黒褐色細粒砂混じりシルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 14 は高杯の口縁部である。口縁端部はコ字に整形し、わずかに内側に張り出す。香川県において弥生時代前期の高杯、特に口縁部はほとんど出土しないため、類例が乏しく所属時期を特定することは難しいが、大阪府亀井遺跡や鬼虎川遺跡で出土した弥生Ⅱ～Ⅲ様式の木製高杯 (奈文研編 1993) と形態が類似しており、木製高杯を模倣したものと考えられる。

**所属時期** 出土遺物と周辺状況から弥生時代前期後半～中期初頭と考えられる。

**SK 04 (第24図)**

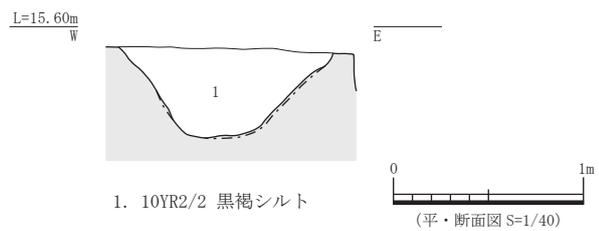
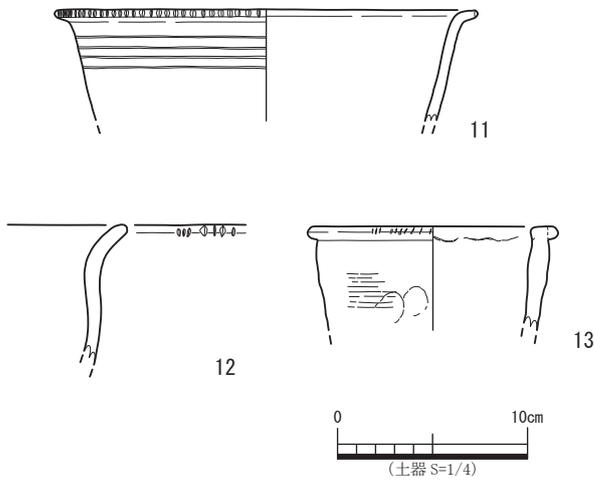
調査区南側 (D2 工区)、SK 03 の南東で検出した土坑である。弥生時代後期の竪穴建物跡 (SH 05) に切られる。平面形態は南北に長く延びる楕円形状で、長軸約 0.80 m、短軸約 0.56 m、深さ約 0.22 m の土坑である。断面は半円状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。遺構



1. 5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト
2. 7.5YR3/2 黒褐中粒砂混じり細粒砂
3. 2.5Y2/1 黒シルト
4. 5Y4/1 灰シルト (粘性が高い)
5. 2.5Y3/2 黒褐中粒砂 (φ3~5cm程度の礫を含む) - 地山

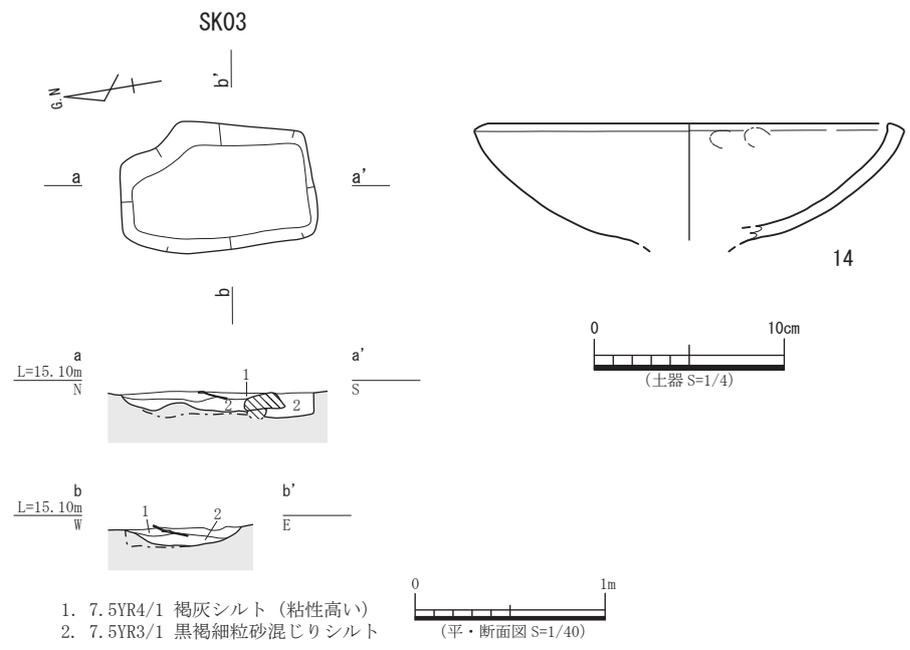
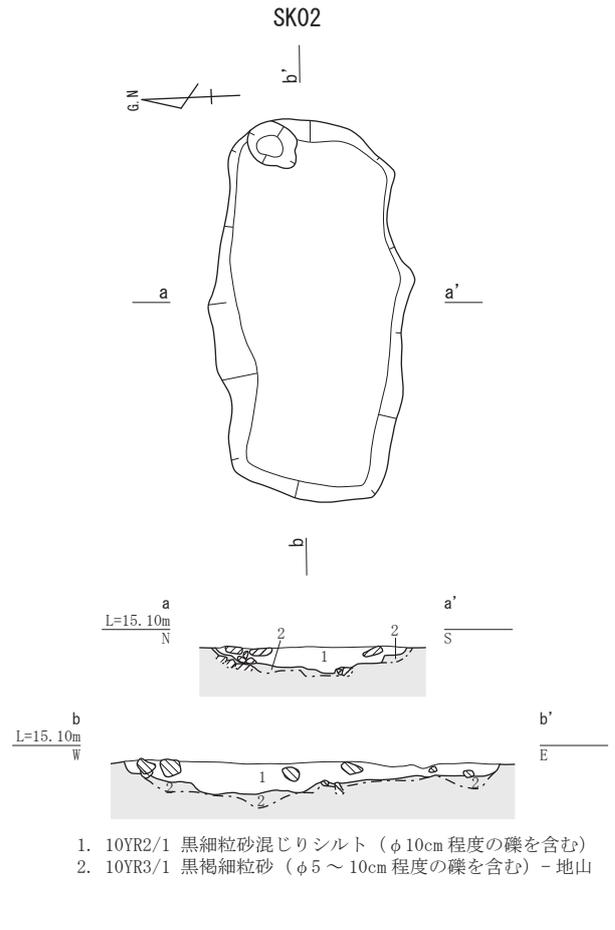
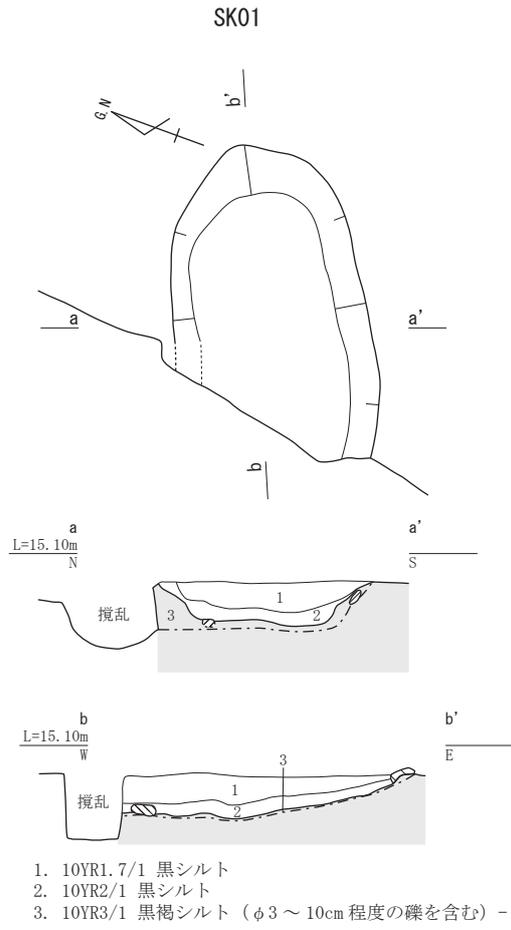


第 21 図 SD03 平・断面図 (S=1/40)

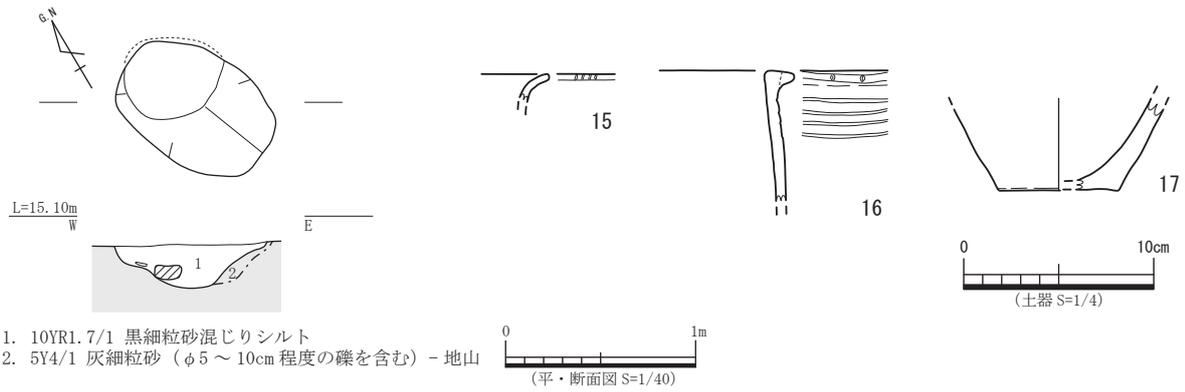


1. 10YR2/2 黒褐シルト

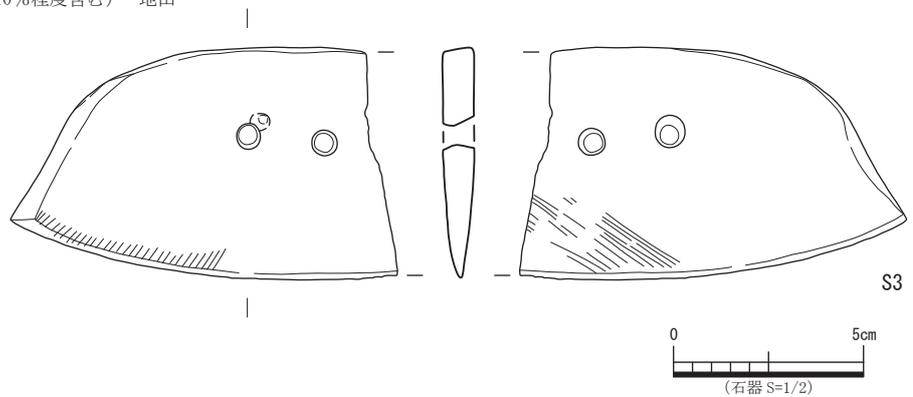
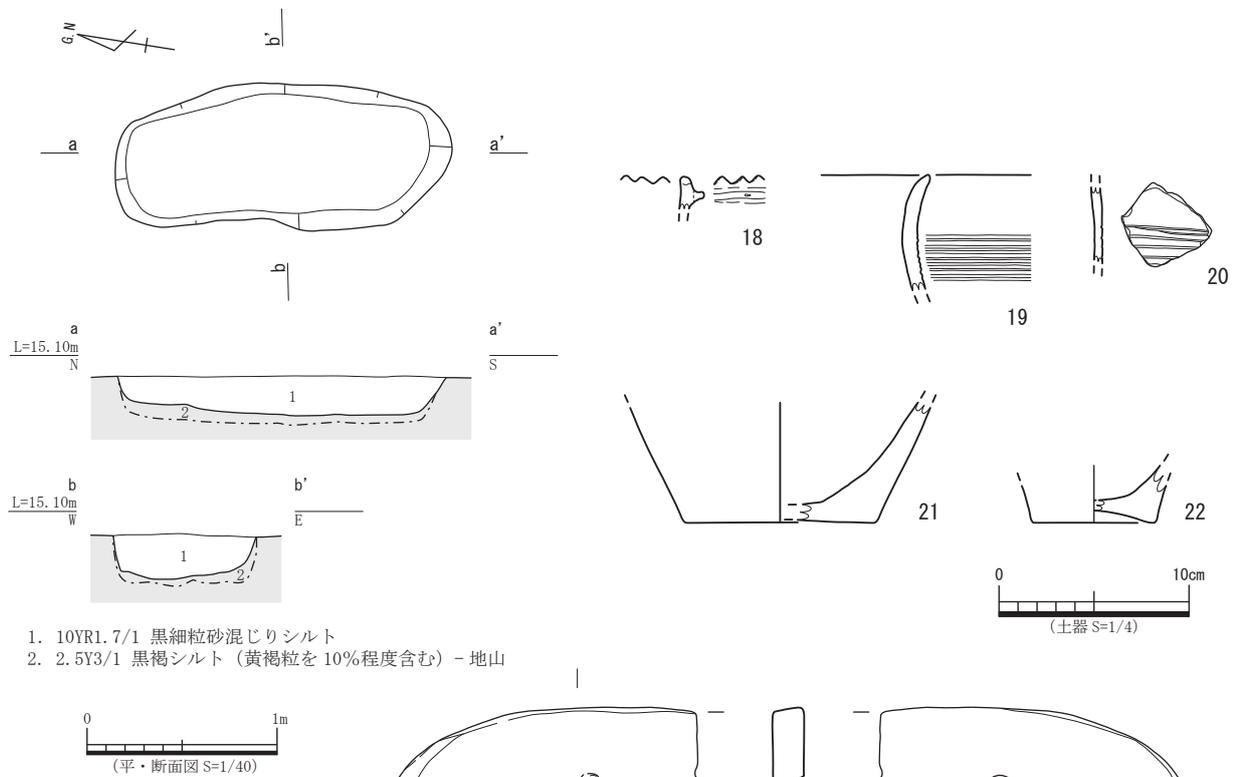
第 22 図 SD04 平・断面図 (S=1/40) ・ 出土遺物 (S=1/4)



第 23 図 SK01 ~ 03 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)



第24図 SK04 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)



第25図 SK05 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4, 1/2)

からは、ビニール袋1袋程度の弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 15、16は甕の口縁部である。15は如意形口縁で、端部に刻目がみられる。16は逆L字形口縁で、端部に刻目を施し、頸部にヘラ描き沈線が4条みられる。17は甕の底部片である。

**所属時期** 出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。

### S K 05 (第25図)

調査区南東側(C工区)で検出した土坑である。平面形態は南北に長く伸びる長方形で、長軸約1.72m、短軸約0.72m、深さ約0.20mの土坑である。断面は台形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。遺構からは、ビニール袋1袋程度の弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 18は甕の口縁部である。波状の口縁部で、口縁下には刻目突帯を貼付する。19は壺の口縁部である。ヘラ描き沈線が8条以上みられる。20は胴部片で、ヘラ描き沈線が5条以上みられる。21、22は甕の底部片である。S3は磨製石包丁である。石材は安山岩と考えられる。孔は、両側から穿孔されている。孔の近くには、敲打痕が認められる。

**所属時期** 出土遺物から弥生時代前期後半である。

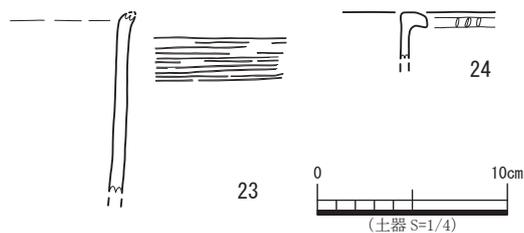
### ③ 包含層 (第26・27図)

包含層から出土した当該期の遺物は、調査区南東側に集中する。包含層から出土した石器は、弥生時代前期又は後期に所属すると想定されるが、どちらの時期か判断できなかったため、弥生時代後期～古墳時代前期前半の包含層の項で一括して提示した。

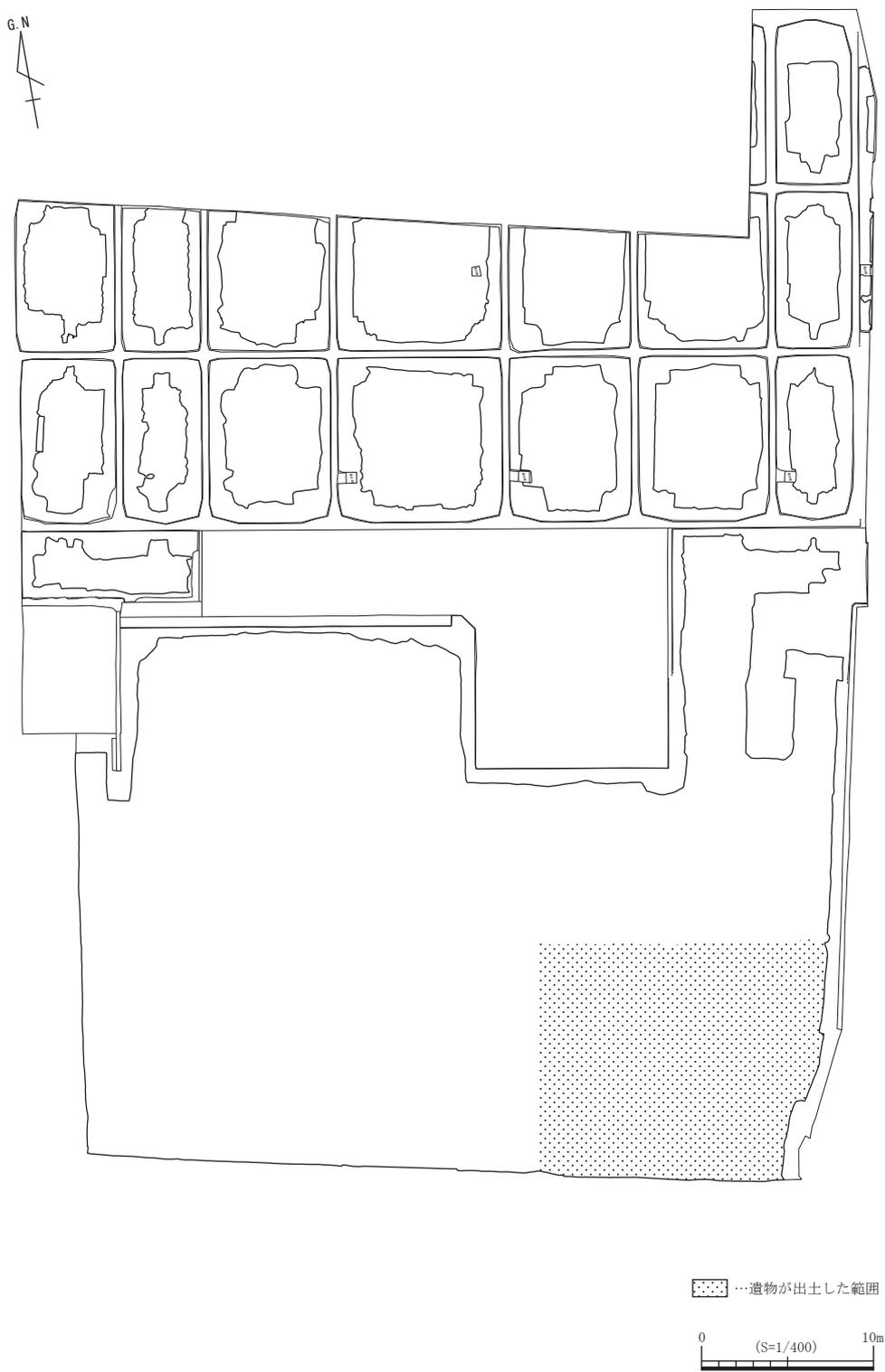
遺物は、弥生時代前期後半～中期初頭の弥生土器が出土した。23、24は甕の口縁部である。23は如意形口縁で、頸部に櫛描文様が見られる。24は逆L字形口縁で、端部に刻目がみられる。

### 参照文献

奈良国立文化財研究所編 1993『木器集成図録 近畿原始篇』, 奈良国立文化財研究所



第26図 包含層出土遺物 (弥生時代前期) (S=1/4)



第 27 図 包含層の遺物（弥生時代前期）出土範囲（S=1/400）



第 28 図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構分布図 (S=1/200)

### (3) 弥生時代後期～古墳時代前期

本調査において、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、調査区全体に分布している。遺構は、竪穴建物跡6棟、溝1条、不明遺構2基、土坑4基を確認した(第28図)。

#### ① 竪穴建物跡

##### SH 01 (第29・30図)

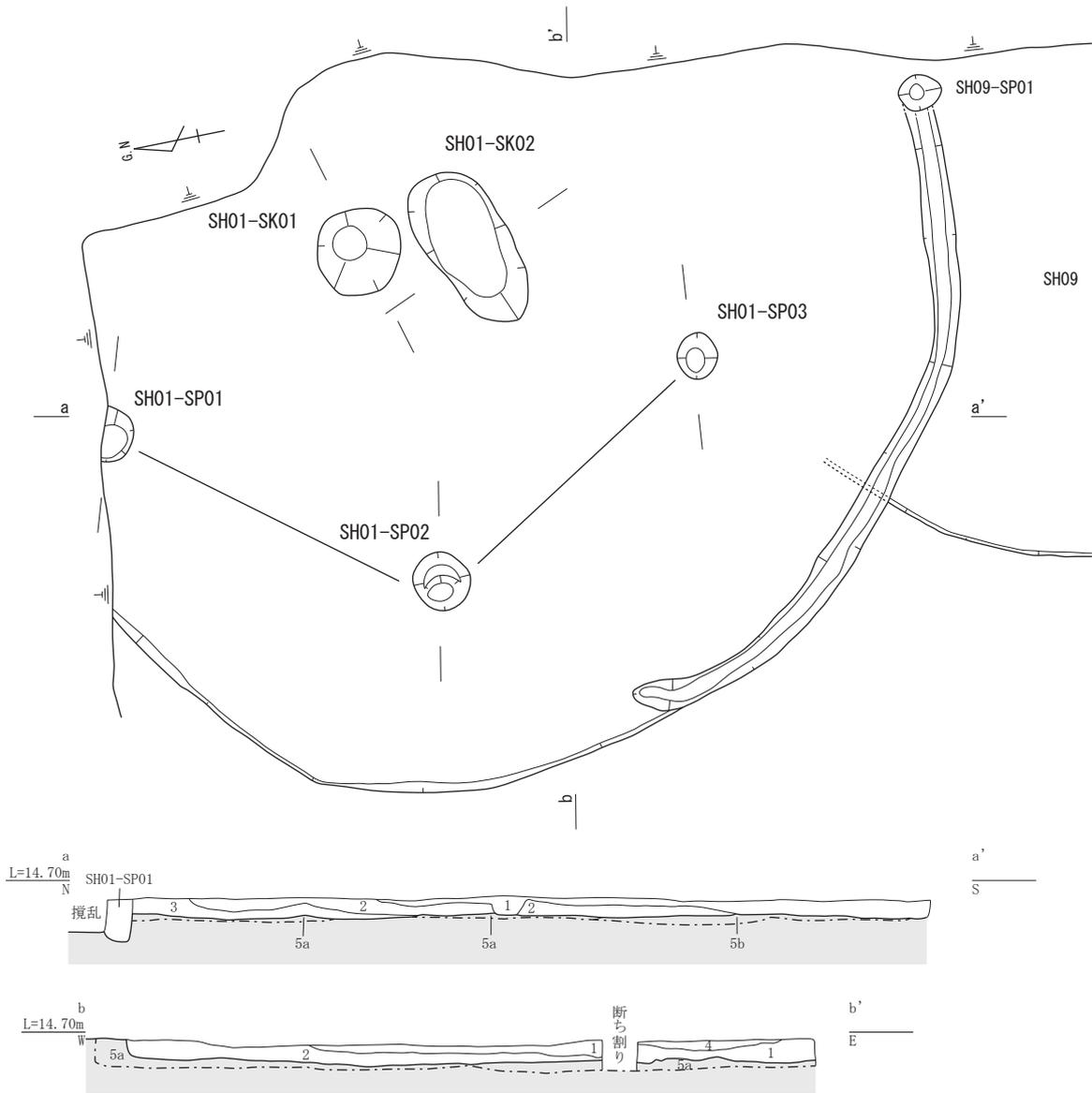
調査区北側(A1-7工区)で検出した竪穴建物跡である。古墳時代中期後半の竪穴建物跡であるSH 09に切られる。調査段階ではSH 01がSH 09を切るものと想定したが、整理段階でSH 09の方が新しいと判明した。そのため、SH 09の北側の平面形態は確認できなかった。しかしながら、SH 01の周壁溝がSH 09より深く掘削されていたため、SH 01の平面形態は把握可能である。

平面形態は円形で、南北長4.9m以上、東西長4.2m以上である。遺構検出高は約14.60mで、掘方底面の高さは約14.50mである。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は、黒褐色細粒砂混じりシルト及び黒色中粒砂混じりシルトで、北側のみ暗灰黄色細粒砂で構成される。

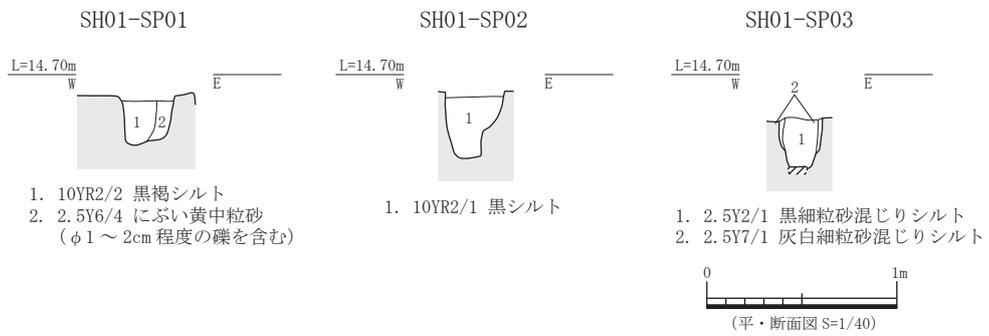
竪穴建物内では、周壁溝と支柱穴3基、土坑2基を確認した。周壁溝は建物南側でのみ検出した。SH 09に切られているため残存高は約0.05mで、埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。支柱穴は建物北側(SP 01)、西側(SP 02)、南側(SP 03)で検出した。支柱穴底面の高さは14.30m前後である。埋土は黒褐色シルト、黒色細粒砂混じりシルト～シルト、直径1～2cmの礫を含むにぶい黄色中粒砂及び灰白色細粒砂混じりシルトである。また、建物中心と想定される箇所です坑2基(SK 01、SK 02)を検出した。平面形態は、北側のSK 01は円形状で、南側のSK 02は東西に長く伸びる楕円形状である。SK 01は長短軸約0.50m、深さ約0.20mである。断面は半円状で、埋土は黒色シルトである。SK 02は長軸約0.96mで、短軸約0.44m、深さ約0.14mの土坑である。断面は台形状で、埋土は黒色シルト及び黒褐色細粒砂である。SK 01とSK 02は「10形中央土坑」の可能性はあるが、炭化物は包含していなかった。香川県内の弥生時代後期の竪穴建物跡について検討した松本和彦氏によると、中期後半に播磨地方で広範に認められる「10形中央土坑」(多賀1996)の影響が想定できる遺構は、善通寺市彼ノ宗遺跡や高松市松並・中所遺跡で認められる。後期になると建物中央の円形土坑に隣接して細長い土坑を有する「10形中央土坑」に類似する遺構が香川県内各地で認められるようになるが、それらが播磨地方からの影響を受けたものかは不明である(松本2000, 2001)。SH 01内のSK 01とSK 02についても同様の性格をもつ遺構であると想定される。遺物は、貼床内・SK 01、02・SP 02から弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 25～27はSK 01から出土したものである。25は高杯の杯部である。口縁部は底面から強く屈曲し、外反しながら立ち上がる。杯部底面の内外面ともに分割ヘラミガキを施す。26は甕の口縁部である。25、26ともに香東川下流域産土器である。27は甕の底部である。28～30はSK 02から出土したものである。28は甕の口縁部である。29は鉢の口縁部で、口縁部が部分的に強く屈曲して外に開く箇所がみられる。30は壺の底部である。31は貼床内から出土したもので、甕の口縁部である。香東川下流域産土器である。

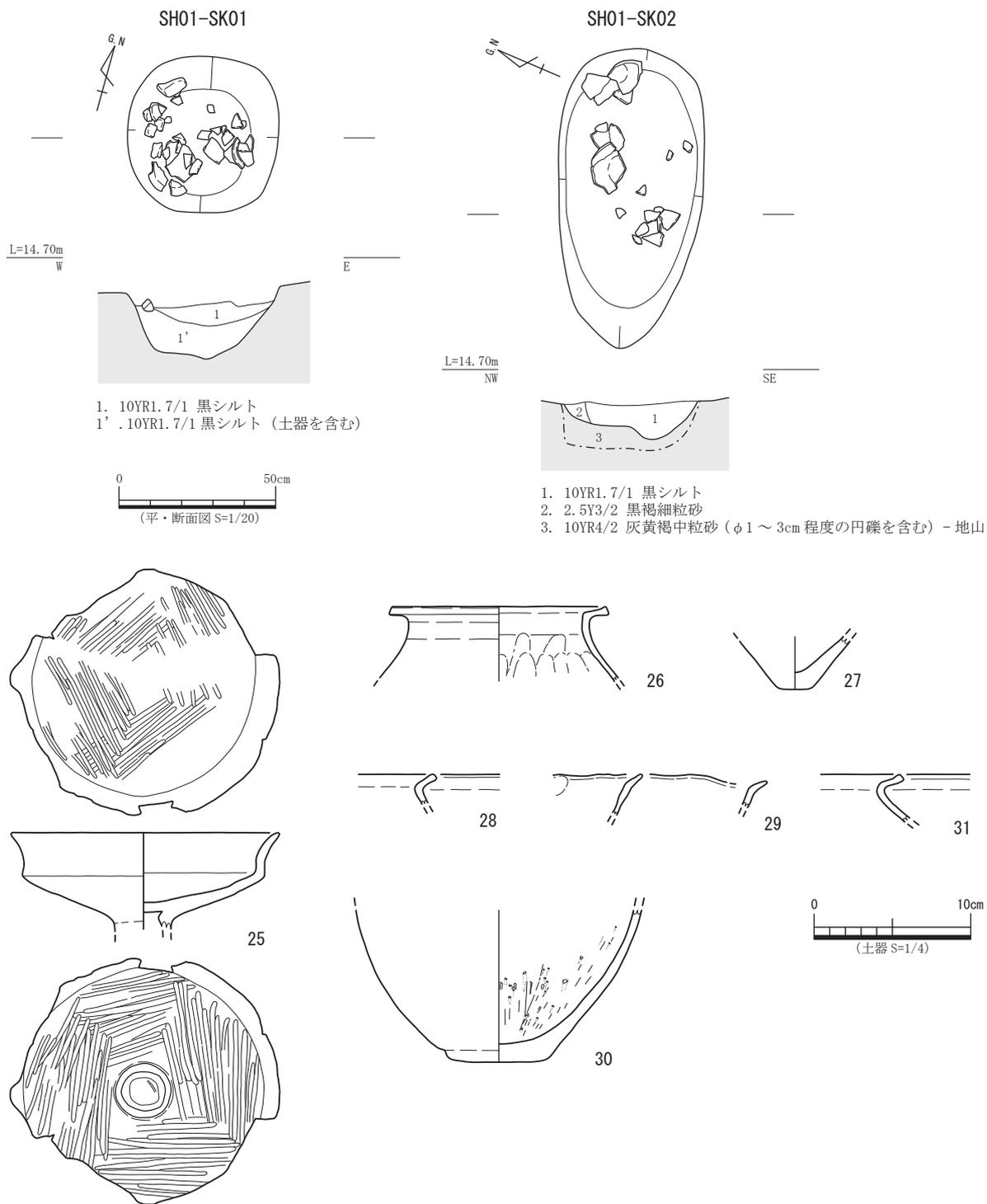
**所属時期** 出土遺物のなかでも時期が判別可能な高杯(25)が蔵本編年(蔵本2019)の後期3



- |                                     |           |
|-------------------------------------|-----------|
| 1. 7. 5YR3/1 黒褐細粒砂混じりシルト            | } SH01 貼床 |
| 2. 2. 5Y3/1 黒褐細粒砂混じりシルト             |           |
| 3. 2. 5Y4/2 暗灰黄細粒砂                  |           |
| 4. 2. 5Y2/1 黒中粒砂混じりシルト              |           |
| 5a. 2. 5Y4/1 黄灰細粒砂 (黒ブロックを含む)       | } 地山      |
| 5b. 2. 5Y5/1 黄灰細粒砂混じりシルト (黒ブロックを含む) |           |



第 29 図 SH01 平・断面図 (S=1/40)

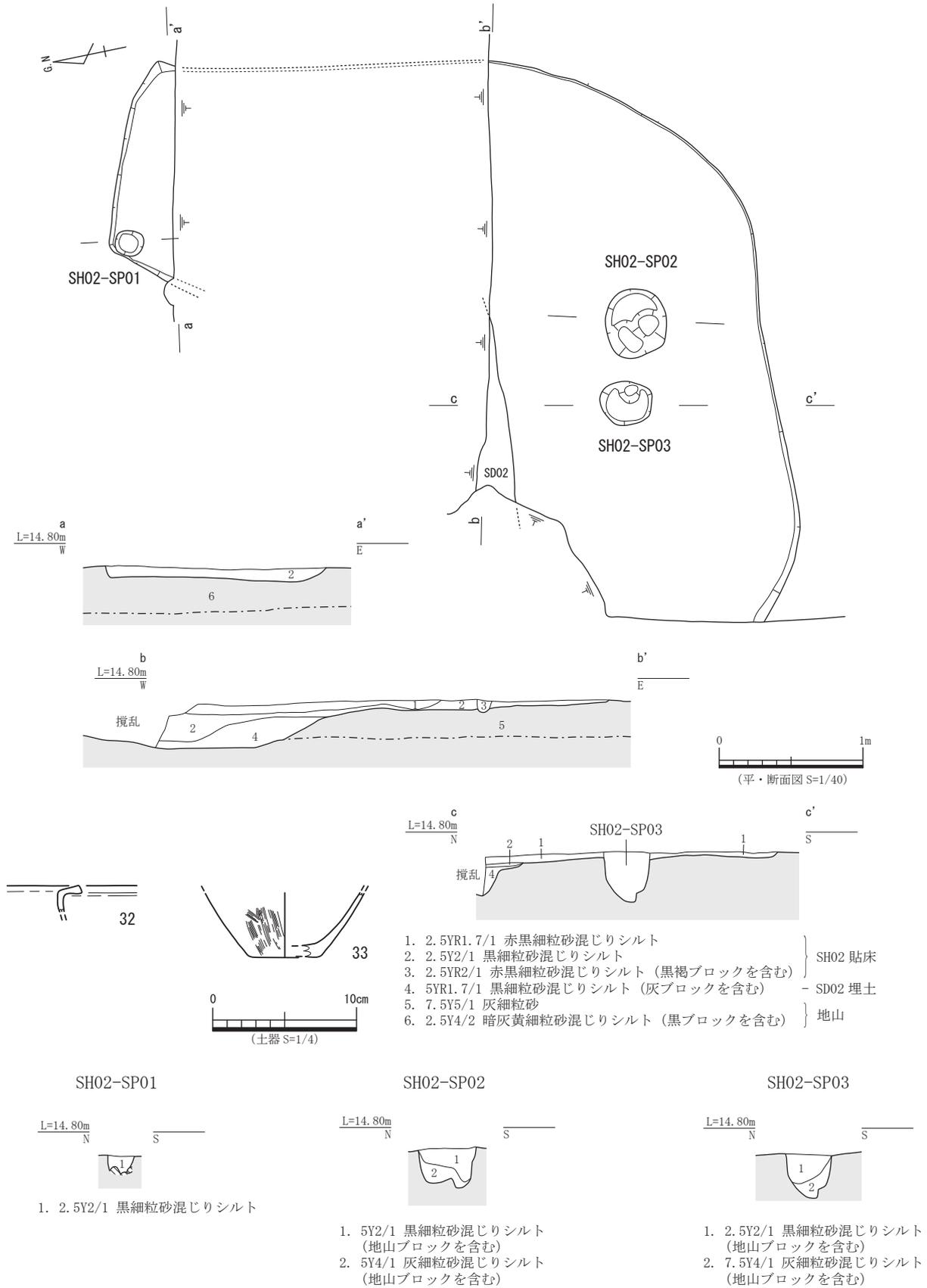


第 30 図 SH01 平・断面図 (S=1/20)・出土遺物 (S=1/4)

期、大久保編年（大久保 1990）の下川津 I 式に相当するため、弥生時代後期中葉である。

### SH 02 (第 31 図)

調査区北側 (A2-3, 4 工区) で検出した竪穴建物跡と想定される遺構である。弥生時代前期



第 31 図 SH02 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

後半の溝である S D 02 を切る。建物基礎による攪乱により大きく削平されていることや周壁溝や支柱穴など竪穴建物跡の要素が検出されなかったため、竪穴建物跡と断定することは難しいが、平面形態が円形状を呈することや遺構の規模から竪穴建物跡の可能性が高いと判断した。A2-4 工区で見られる方形部分は、香川県内の弥生時代後期の竪穴建物跡で認められる張り出し部に相当する可能性がある。

平面形態は円形で、南北長 4.6 m 以上、東西長 4.0 m 以上である。遺構検出高は約 14.65 m で、掘方底面の高さは約 14.60 m である。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は、赤黒色細粒砂混じりシルト及び黒色細粒砂混じりシルトで構成される。断面で周壁溝の可能性のある黒褐色ブロックを含む赤黒色細粒砂混じりシルト層を確認したが、平面では検出できなかった。

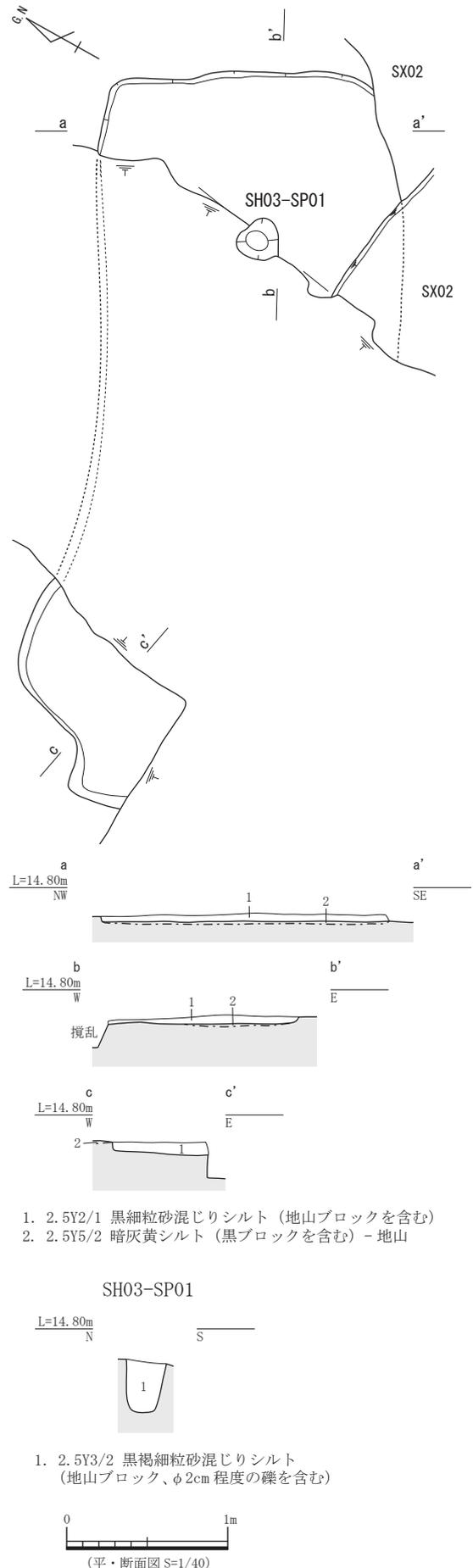
竪穴建物内では、柱穴 3 基を確認した。柱穴は建物北端 (S P 01) と南側 (S P 02、03) で検出した。断面形態から柱穴跡と判断したが、S P 02 と S P 03 は距離が近いため、建て替えの可能性も考えられる。柱穴底面の高さは 14.30 ~ 14.40 m である。埋土は黒色細粒砂混じりシルト及び灰色細粒砂混じりシルトである。貼床内・S P 01 ~ 03 から弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 32、33 は S P 01 から出土したものである。32 は甕の口縁部である。33 は甕の底部片で、平底である。

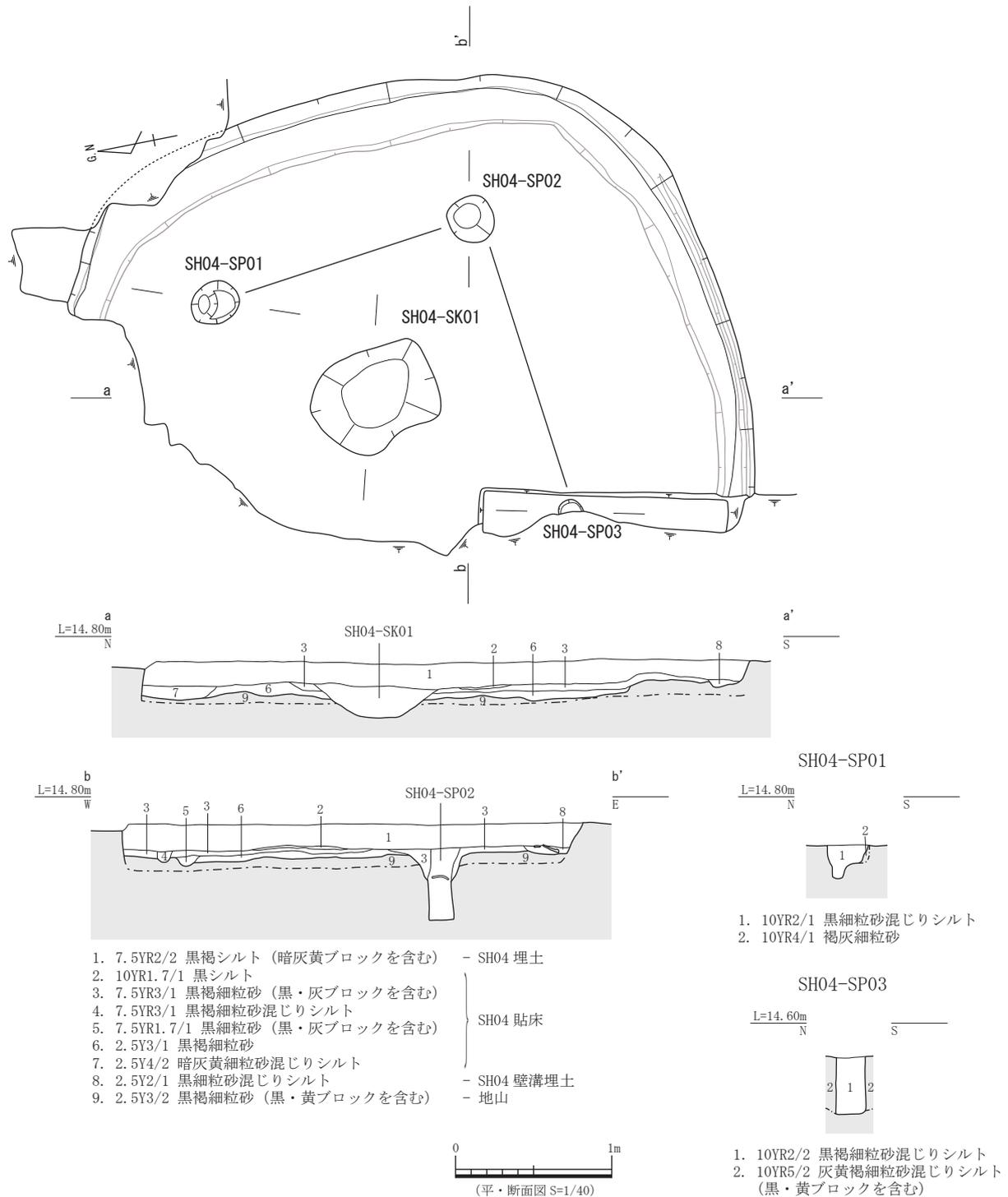
**所属時期** 甕の底部 (33) が平底であること、甕の口縁部 (32) の形態からも弥生時代後期前半～後半と考えられる。

### SH 03 (第 32 図)

調査区北側 (A2-2, 3 工区)、SH 02 の南西で検出した竪穴建物跡である。建物基礎による攪乱により大きく削平されていることに加え、S



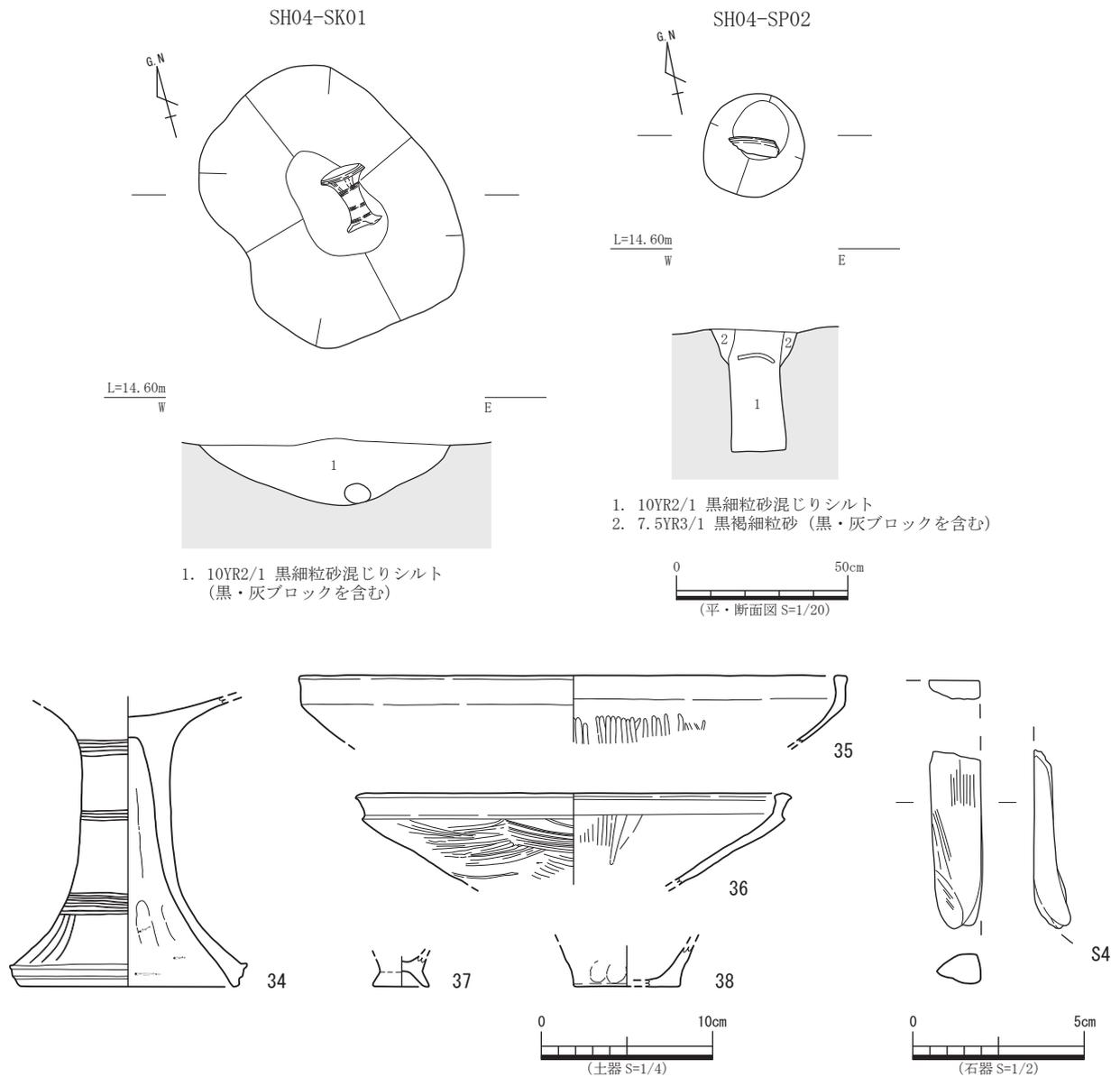
第 32 図 SH03 平・断面図 (S=1/40)



第 33 図 SH04 平・断面図 (S=1/40)

X 02 に切られる。平面形態は方形で、長辺約 4.5 m、短辺 1.7 m 以上である。遺構検出高は約 14.65 m で、掘方底面の高さは約 14.60 m である。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は、地山ブロックを含む黒色細粒砂混じりシルトで構成される。

竪穴建物内では、北東部で支柱穴 1 基 (S P 01) を確認した。支柱穴底面の高さは 14.30



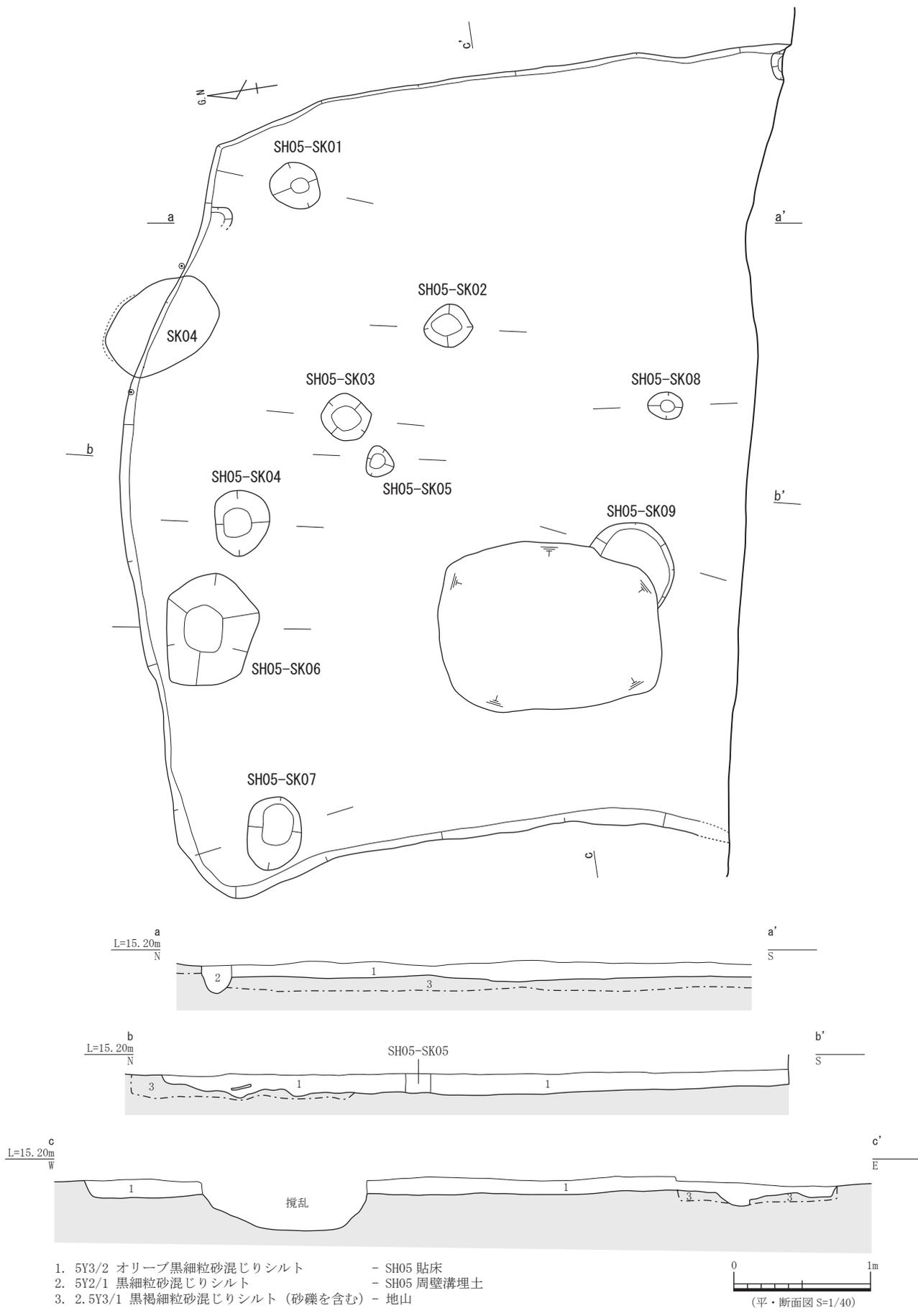
第34図 SH04 平・断面図 (S=1/20)・出土遺物 (S=1/4, 1/2)

mである。埋土は地山ブロック及び直径2cm程度の礫を含む黒褐色細粒砂混じりシルトである。遺物は、貼床内とS P 01 から弥生土器が各1点出土した。

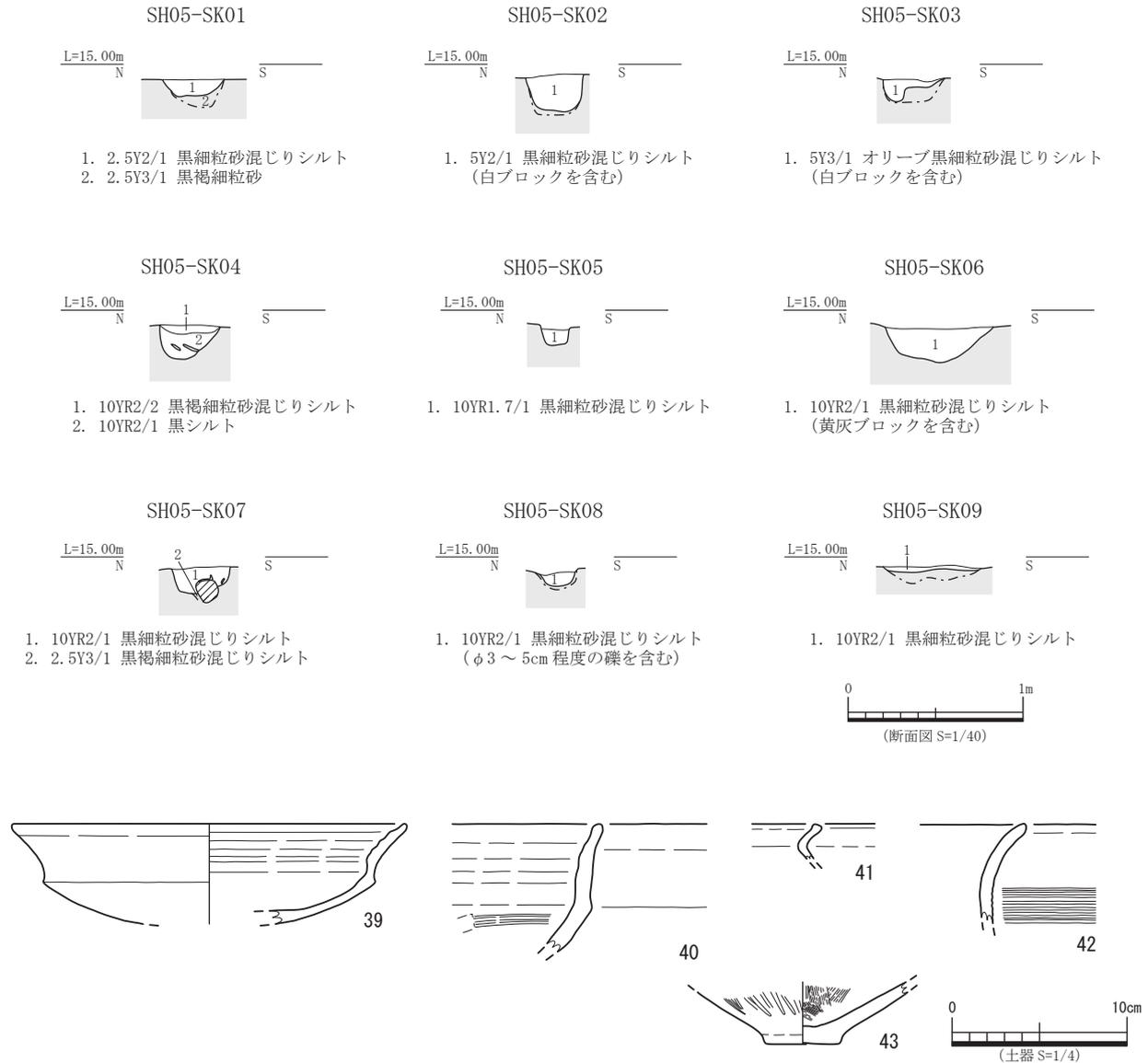
**所属時期** S H 03 を切るS X 02 が古墳時代前期後半のS X 01 に切られていることに加え、周辺状況から弥生時代後期と考えられる。

#### S H 04 (第33・34図)

調査区北西側 (D1-2 工区) で検出した竪穴建物跡である。建物基礎による攪乱により建物西側が大きく削平されている。平面形態は円形で、直径約4.6mである。遺構検出高は約14.65mで、掘方底面の高さは約14.40mである。床面を検出し、床面の高さは約14.45mである。埋土は暗灰黄色ブロックを含む黒褐色シルト層で、貼床は黒色シルト、黒・灰色ブロッ



第 35 図 SH05 平・断面図 (S=1/40)



第 36 図 SH05 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

クを含む黒色細粒砂、黒・灰色ブロックを含む黒褐色細粒砂、黒褐色細粒砂～細粒砂混じりシルト、暗灰黄色細粒砂混じりシルトで構成される。

竪穴建物内では、周壁溝と支柱穴 3 基、中央土坑 1 基を確認した。周壁溝は幅が広く約 0.2 m で、深さは約 0.05 m である。埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。支柱穴は建物北東側 (S P 01)、南東側 (S P 02)、南側 (S P 03) で検出された。支柱穴底面の高さは S P 01、03 が約 14.30 m、S P 02 が約 14.00 m である。埋土は黒色細粒砂混じりシルト、黒褐色細粒砂混じりシルト及び黒・灰色ブロックを含む黒褐色細粒砂である。また、建物中心で土坑 (S K 01) を検出した。平面形態は円形状で、長軸 0.82 m、短軸約 0.66 m、深さ約 0.20 m である。断面は半円状で、埋土は黒・灰色ブロックを含む黒色細粒砂混じりシルトである。竪穴建物埋土内・貼床内・周壁溝埋土内・S P 02・S K 01 から弥生土器片とサヌカイト製剥片が出土した。出土遺物 34 は、S K 01 から出土した高杯脚部である。筒部に 5～8 条の横沈線が 3 箇所、

最下部の横沈線から底部に向かって3条の縦沈線が6箇所施される。底部には、貫通していない穿孔のための敲打痕が外面に1箇所みられる。35はS P 02から出土した高杯の口縁部である。口縁部は底面から強く屈曲し、口縁部が直立に立ち上がる。端部がコ字に成形される。36は床面直上と周壁溝埋土内から出土した高杯の口縁～杯部である。口縁部は底面から強く屈曲し、直立気味に外に開きながら立ち上がる。口縁端部は強くナデられ、凹線状の段がみられる。34～36は香東川下流域産土器である。S4は床面直上から出土した小型の砥石である。石材は泥岩と考えられる。37、38は竪穴建物埋土内から出土したものである。37は製塩土器の脚部で、38は甕又は壺の底部片である。

**所属時期** 出土遺物のなかで時期が判別できる高杯（35、36）が蔵本編年（蔵本2019）の後期1期に相当するため、弥生時代後期前葉である。

#### S H 05（第35・36図）

調査区南端（C、D2工区）で検出した竪穴建物跡である。南側は調査区外のため、全容はつかめないが、平面形態は不整形とされる。南北長4.4m以上、東西長約5.4mである。遺構検出高は約15.05～15.10mで、掘方底面の高さは約14.90～14.95mである。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は、オリーブ黒色細粒砂混じりシルトで構成される。

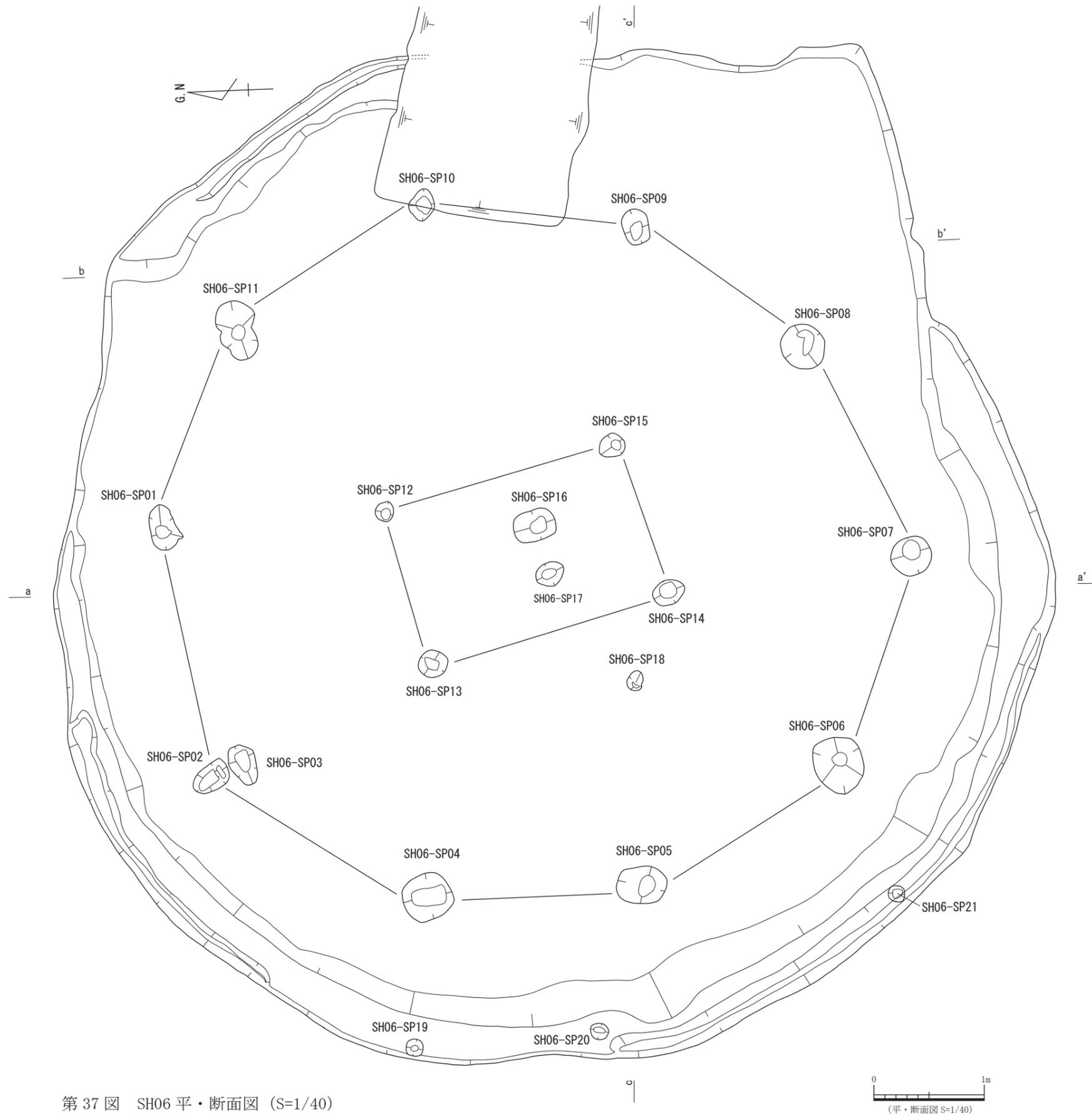
竪穴建物内では、周壁溝と土坑9基を確認した。周壁溝は建物南東端、北東端でのみ検出された。深さは約0.12mで、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。土坑は主柱穴の可能性もあるものもみられるが、底面の高さや平面形態が一定でないことから特定することはできなかった。土坑の埋土は主に黒色細粒砂混じりシルト及びオリーブ黒色細粒砂混じりシルトである。貼床内・S K 02～04、07～09から弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 39～42は貼床内から出土したものである。39は高杯の口縁～杯部である。口縁部は底面から強く屈曲し、外反しながら立ち上がる。内面には強くナデることによる凹線状の段がみられる。特に口縁端部は強くナデられる。40は大型鉢である。口縁部は直立し、内面には高杯と同様に強くナデることによる凹線状の段がみられる。特に口縁端部は強くナデられる。41は甕の口縁部である。42は弥生時代前期後半の壺の口縁～頸部である。頸部にヘラ描き沈線が7条以上みられる。43はS K 03から出土した、甕の底部片である。39～41、43は香東川下流域産土器である。

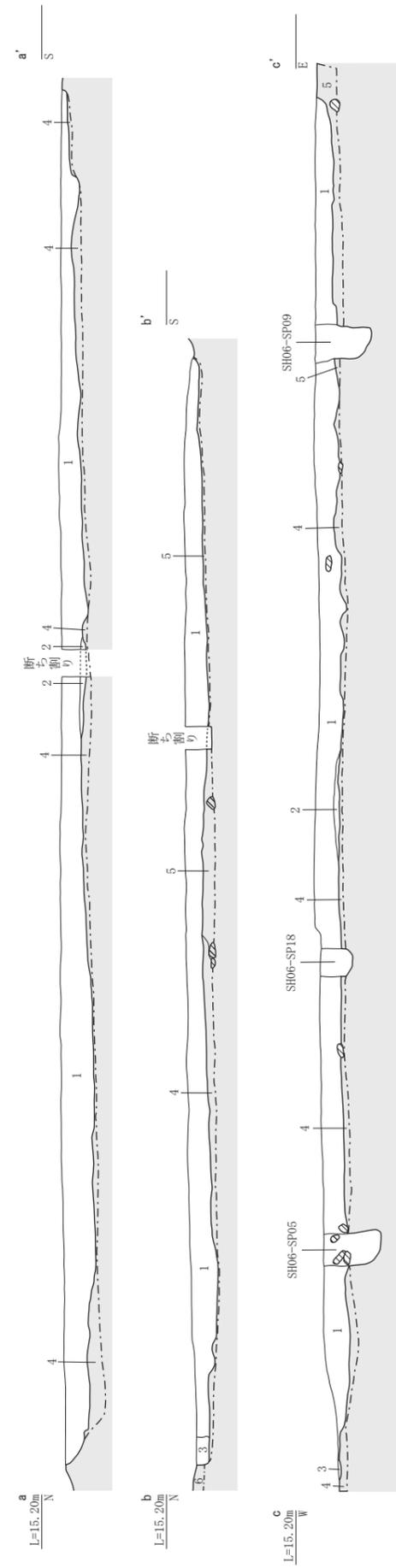
**所属時期** 出土遺物が蔵本編年（蔵本2019）の後期3～4期、大久保編年（大久保1990）の下川津I式に相当するため、弥生時代後期中葉である。

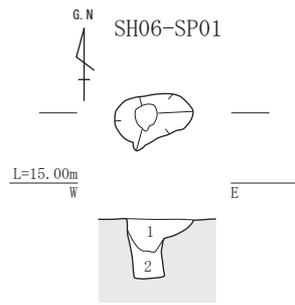
#### S H 06（第37～39図）

調査区南西側（D2工区）で検出した大型の竪穴建物跡である。平面形態は不整形で、直径約9.1mである。建物東側が少し張り出しており、香川県内で弥生時代後期にみられる張り出し住居の可能性が高い。床面積が約65㎡と大型であるため建物の建て替えによる遺構の重複の可能性を考えたが、土層断面では建て替えられた痕跡は認められないこと、主柱穴が同心円状に2列廻っていることから大型竪穴建物跡1棟の遺構であることが判明した。遺構検出高は約15.05mで、掘方底面の高さは約14.90mである。床面は検出されず、貼床のみ検出した。

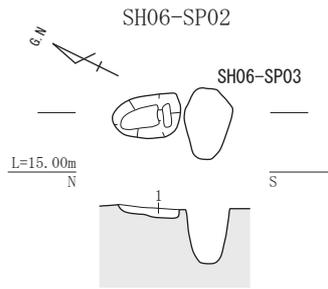


第 37 図 SH06 平・断面図 (S=1/40)

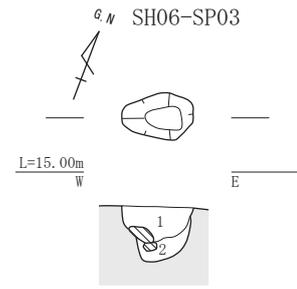




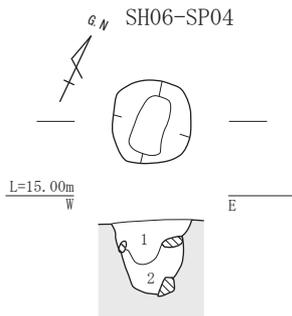
1. 10YR2/1 黒シルト
2. 10YR2/2 黒褐シルト  
( $\phi$ 3cm 程度の礫を含む、粘性高い)



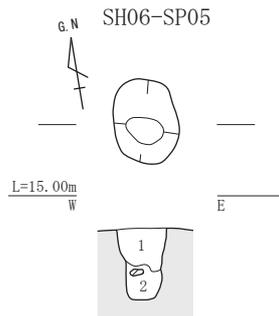
1. 10YR2/1 黒細粒砂混じりシルト



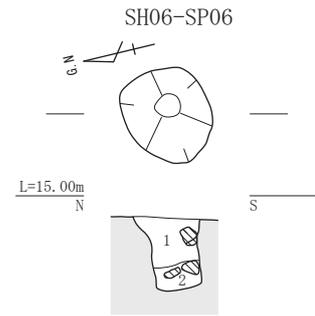
1. 10YR2/1 黒シルト
2. 10YR3/1 黒褐細粒砂混じりシルト  
(礫を含む)



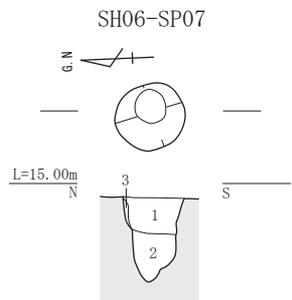
1. 10YR2/1 黒細粒砂混じりシルト
2. 10YR3/1 黒褐細粒砂混じりシルト



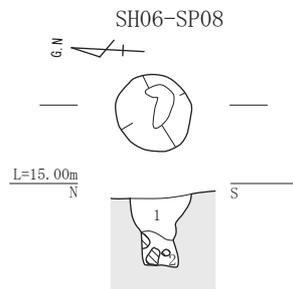
1. 10YR2/1 黒細粒砂混じりシルト
2. 10YR3/1 黒褐細粒砂混じりシルト



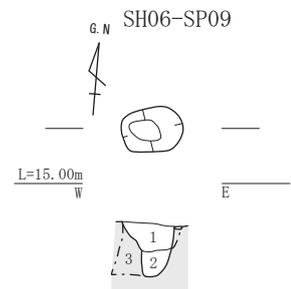
1. 10YR2/1 黒細粒砂混じりシルト
2. 10YR3/1 黒褐細粒砂混じりシルト



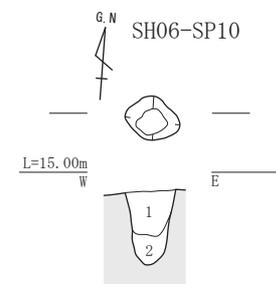
1. 10YR2/1 黒シルト
2. 10YR3/1 黒褐細粒砂混じりシルト  
( $\phi$ 3cm 程度の円礫を含む)
3. 2.5Y3/2 黒褐細粒砂混じりシルト  
(黒ブロックを含む)



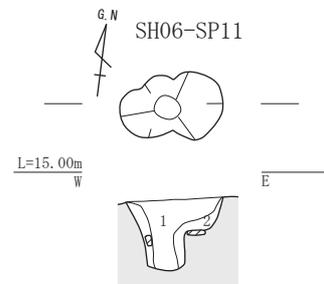
1. 10YR2/1 黒シルト
2. 10YR3/1 黒褐細粒砂混じりシルト  
( $\phi$ 3cm 程度の礫を含む)



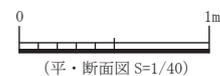
1. 10YR2/1 黒シルト
2. 2.5Y2/1 黒細粒砂混じりシルト
3. 2.5Y3/1 黒褐細粒砂  
( $\phi$ 3cm 程度の礫を含む) - 地山



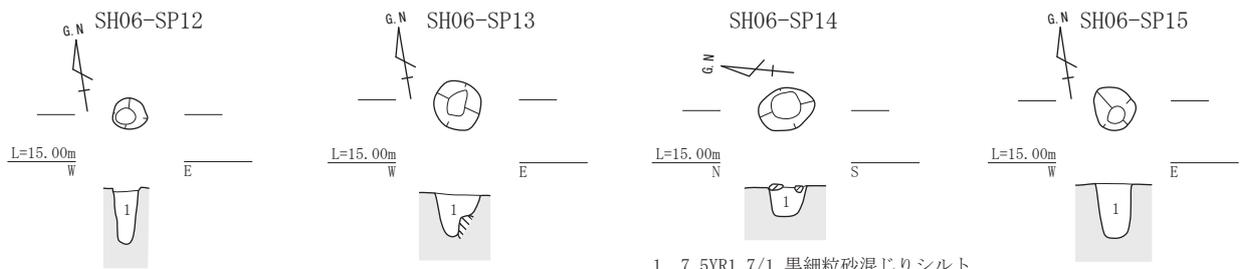
1. 10YR2/1 黒シルト
2. 10YR2/2 黒褐細粒砂混じりシルト  
( $\phi$ 1cm 程度の礫を多数含む)



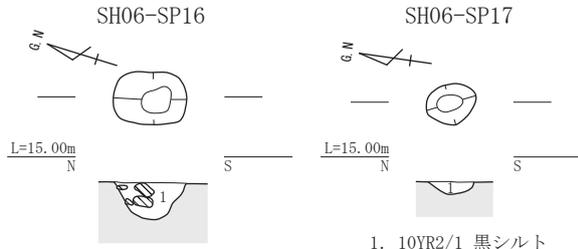
1. 5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト
2. 10YR3/1 黒褐細粒砂混じりシルト  
( $\phi$ 3cm 程度の礫を含む)



第 38 図 SH06 外側主柱穴断面図 (S=1/40)

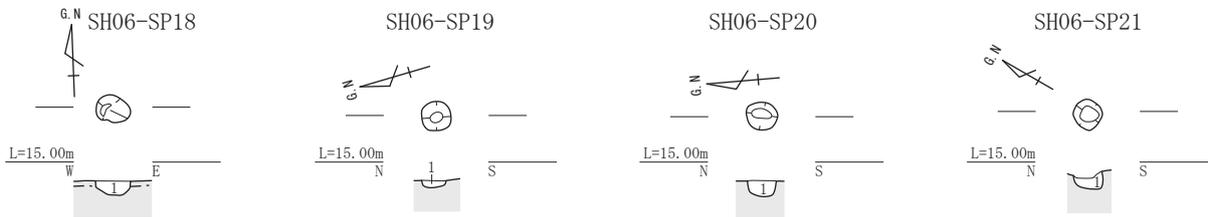


1. 7.5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト 1. 7.5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト 1. 7.5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト 1. 7.5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト

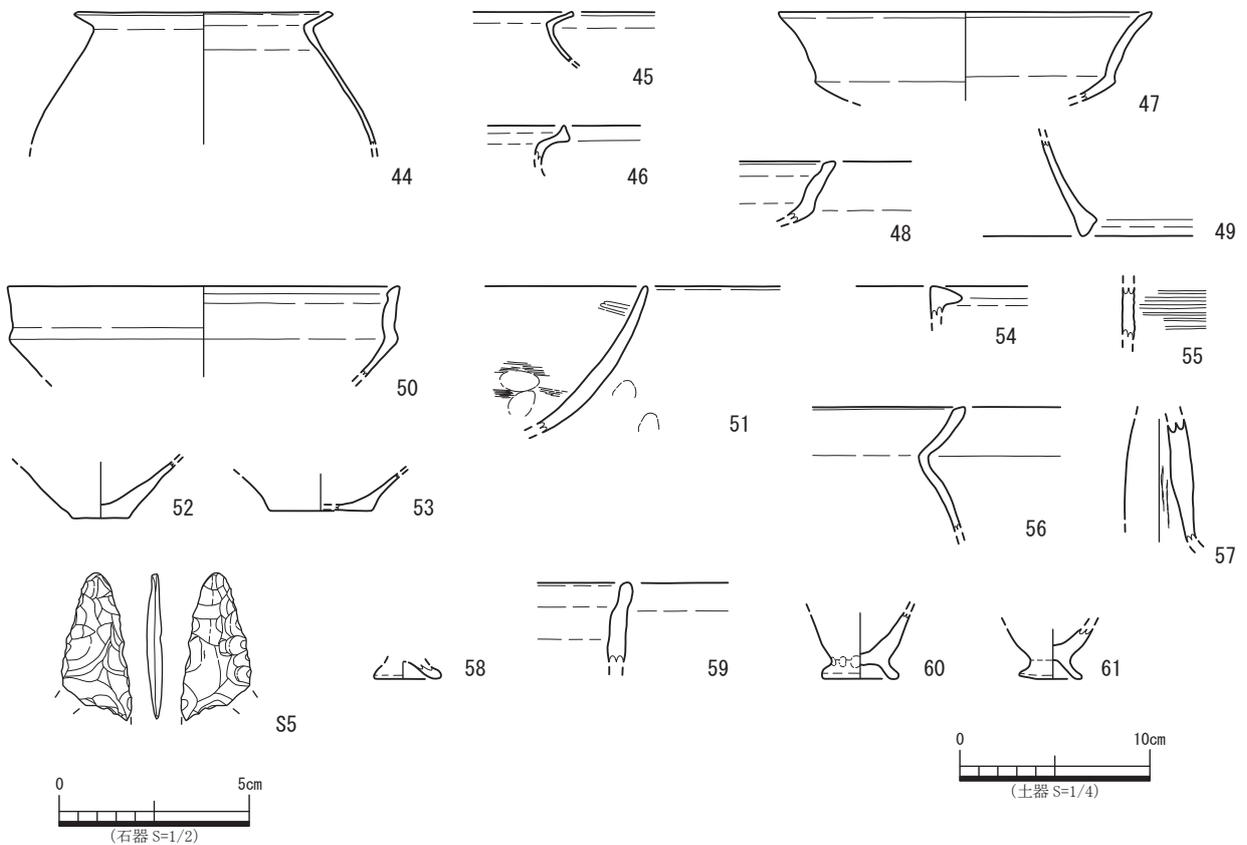


1. 7.5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト

1. 10YR2/1 黒シルト



1. 7.5Y2/1 黒細粒砂混じりシルト 1. 7.5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト 1. 10YR2/1 黒シルト 1. 7.5YR1.7/1 黒細粒砂混じりシルト



第 39 図 SH06 内側支柱穴等断面図 (S=1/40) ・ 出土遺物 (S=1/4, 1/2)

貼床は、黒色細粒砂混じりシルト層である。

竪穴建物内では、周壁溝と支柱穴 17 基とピット 4 基を確認した。掘方は二段落ちになっており、掘方の外端から 0.4～0.6 m 内の部分が他の部分に比べ高く、その箇所に周壁溝が廻っている。周壁溝の残存高は約 0.03 m で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。周壁溝が所在する一段高い箇所より内側に入ると約 0.1 m 低くなる。支柱穴は中心から同心円状に二列廻っている。外側の支柱穴（S P 01～11）は 10 箇所あり、円形状に廻っている。外側支柱穴の底面の高さは約 14.50 m で一定で、埋土は黒色細粒砂混じりシルト～シルト、礫を含む黒褐色細粒砂～シルト、黒ブロックを含む黒褐色細粒砂混じりシルトである。内側の支柱穴（S P 12～15）は 4 箇所あり、長方形に廻っている。内側支柱穴の底面の高さは約 14.60～14.70 m で、埋土は黒色細粒砂混じりシルト～シルトである。建物中心部には支柱穴と考えられるピットが 2 基（S P 16、17）あり、底面の高さは S P 16 が約 14.65 m、S P 17 が約 14.80 m である。埋土は黒色細粒砂混じりシルト～シルトである。貼床内・S P 04、05、07～10、14、16、18 から弥生土器片とサヌカイト製剥片が出土した。

**出土遺物** 44～57、S5 は貼床内から出土したものである。44～46 は、香東川下流域産土器の甕である。47、48 は高杯の口縁部である。47 は口縁部が杯部底面から強く屈曲し、外反して立ち上がる。端部の内面は強くナゲられる。48 は口縁部が杯部底面から強く屈曲し、直立気味に外側に開きながら立ち上がる。口縁端部は肥厚させ、外傾する端面を形成する。49 は高杯の脚部である。端部は肥厚させて、外傾する。47～49 は香東川下流域産土器である。50、51 は、香東川下流域産土器の鉢である。50 は口縁部が杯部底面から強く屈曲し、直立に立ち上がる。内面は強くナゲられる。口縁端部は肥厚させ、外傾する端面を形成する。51 は大型鉢である。端部は丸く成形される。52、53 は甕の底部片である。54、55 は弥生時代前期後半の土器である。54 は甕で、逆 L 字形口縁である。55 は胴部片で、ヘラ描き沈線が 6 条みられる。56、57 は古墳時代中期後半～後期前半の土器で、後世の混入によるものと考えられる。56 は甕の口縁部で、57 は高杯の脚部である。S5 はサヌカイト製石鏃である。58 は S P 11 から出土した製塩土器の脚部である。59 は S P 14 から出土した大型鉢の口縁部である。口縁部は直立し、内面には高杯と同様に強くナゲることによる凹線状の段がみられる。香東川下流域産土器である。60、61 は S P 17 から出土した、製塩土器の脚部である。

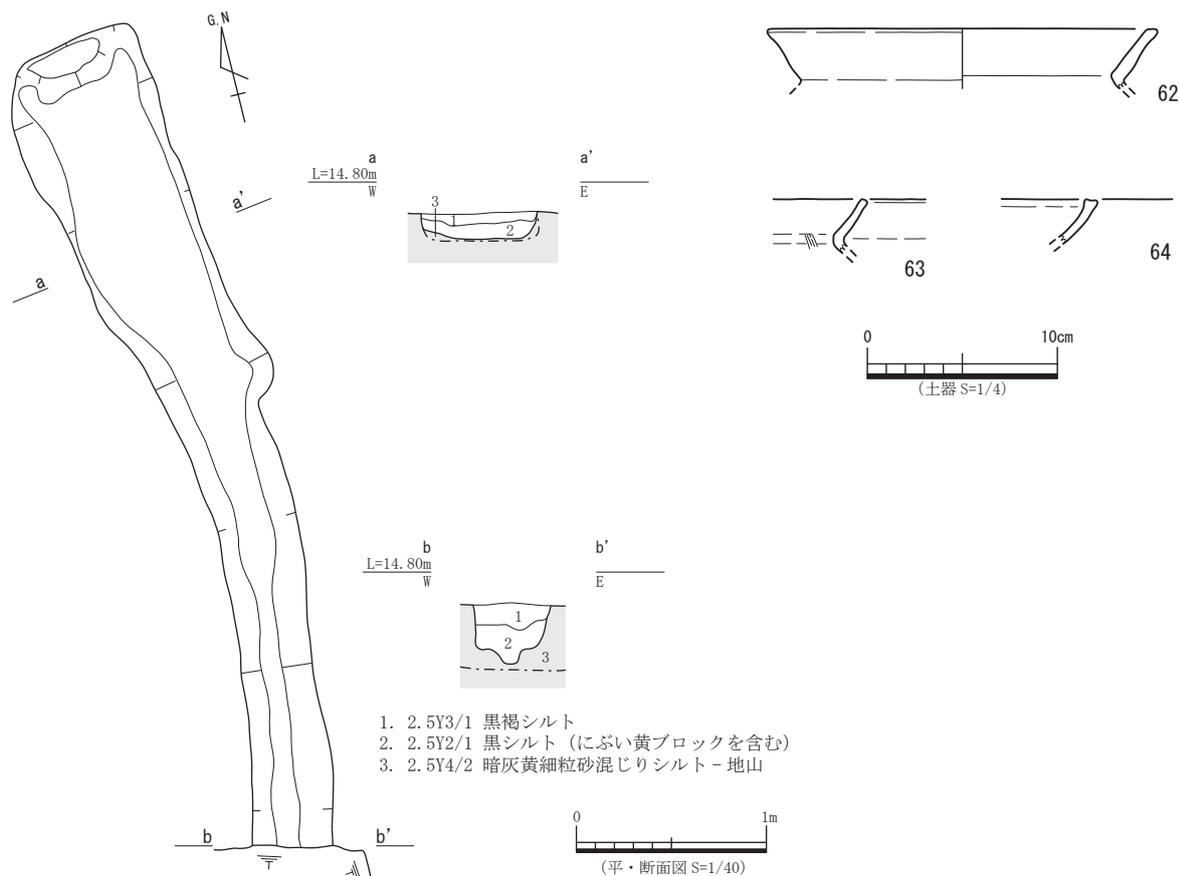
**所属時期** 出土遺物は蔵本編年（蔵本 2019）の後期 2～3 期、大久保編年（大久保 1990）の下川津 I 式に相当するため、弥生時代後期中葉である。

## ② 溝

### S D 05（第 40 図）

調査区北西側（D1-3 工区）で検出した南北方向の溝で、北側は幅が約 0.66 m、深さ約 0.14 m、南側は幅が約 0.40 m、深さ約 0.32 m である。底面の高さは南側が低いため、北から南に向かって流下するものと考えられる。断面形態は台形状で、埋土は黒色シルト及び黒褐色シルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器・土師器片が出土した。

**出土遺物** 62～64 は甕の口縁部である。口縁部は内湾する。口縁端部はわずかに肥厚し、コ字に成形する。



第 40 図 SD05 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

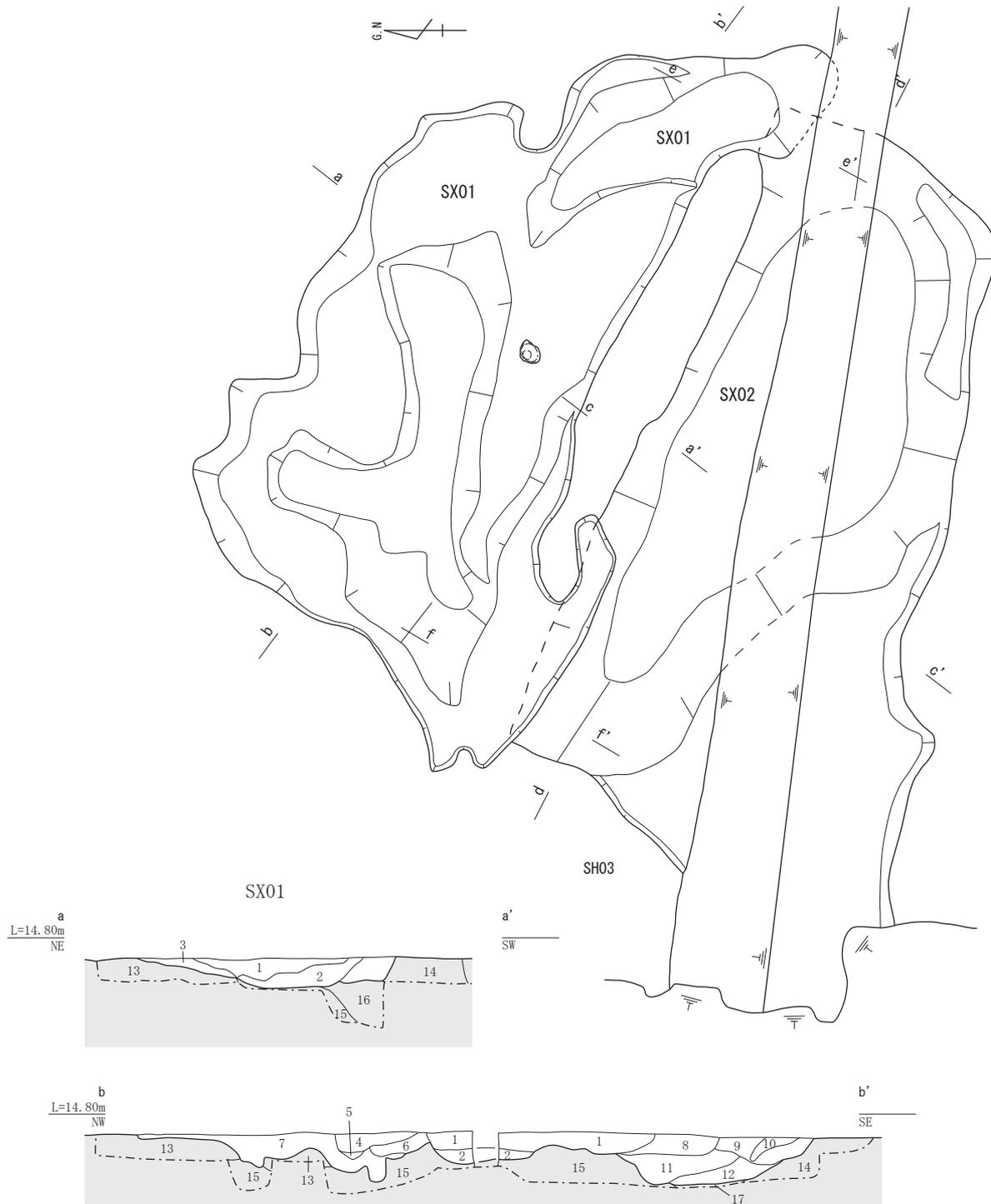
**所属時期** 出土遺物は、信里編年 (信里 2014) の古墳前期 5 期に相当するため、古墳時代前期後半である。

### ③ 不明遺構

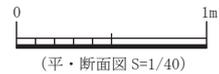
#### S X 01 (第 41・42 図)

調査区北側 (A2-3 工区)、S H 02 の南東で検出した不整形の土坑で、南北長約 2.4 m、東西長約 4.6 m である。底面は一定ではなく、遺構の深さは南東及び東側が約 0.3 m、中心部が約 0.2 m である。埋土は黒色細粒砂混じりシルト～シルト、黒褐色細粒砂、オリーブ黒色細粒砂、赤黒色細粒砂混じりシルト、暗灰黄色細粒砂及び黄灰色中粒砂混じりシルトと多様であり、近隣の地山からもたらされたものと考えられる。土層断面から、遺構中心部が数回掘り返されている状況が認められ、最終埋没埋土である赤黒色細粒砂混じりシルト (第 41 図 1・2) から高杯の杯部が上を向いて出土した。遺構の西端と東端で断ち割りトレンチを設定し、土層を確認したところ S X 02 を切っていることが明らかになった。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器片、土師器片、サヌカイト製剥片が出土した。

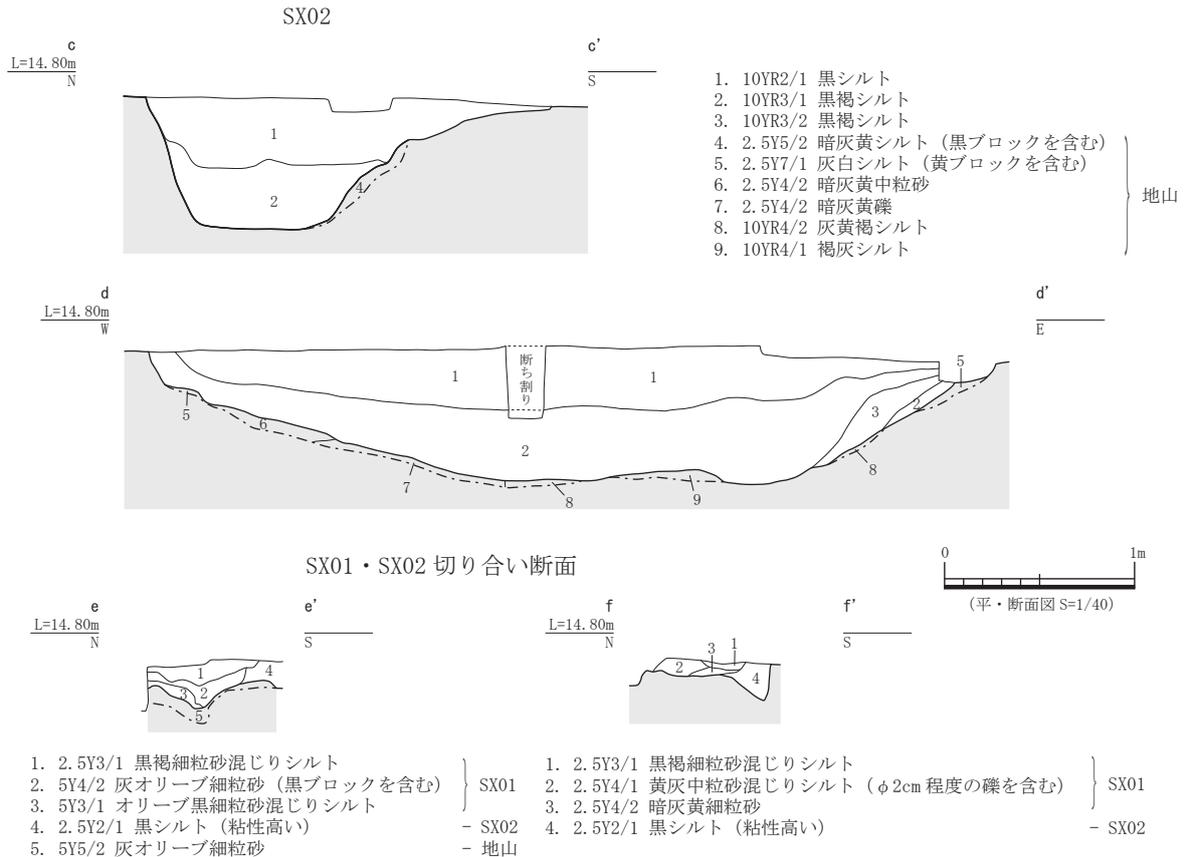
**出土遺物** 65 は高杯の杯部である。口縁部は強く屈曲し、直立気味だがわずかに外反しながら外側に開いて立ち上がる。66 は小型鉢の口縁～胴部である。口縁端部はコ字に整形されて



1. 2.5YR1.7/1 赤黒細粒砂混じりシルト
  2. 2.5YR1.7/1 赤黒細粒砂混じりシルト (粘性あり)
  3. 5Y3/1 オリーブ黒細粒砂
  4. 2.5Y2/1 黒細粒砂混じりシルト (φ2cm程度の礫を含む)
  5. 2.5Y2/1 黒細粒砂混じりシルト (黄灰シルトブロックを含む)
  6. 2.5Y5/1 黄灰中粒砂混じりシルト (φ1cm程度の礫を含む)
  7. 2.5Y2/1 黒細粒砂混じりシルト
  8. 2.5Y4/2 暗灰黄細粒砂
  9. 10YR2/1 黒細粒砂混じりシルト
  10. 2.5Y3/1 黒褐細粒砂 (にぶい黄ブロックを含む)
  11. 5Y3/2 オリーブ黒細粒砂
  12. 2.5Y2/1 黒シルト
  13. 2.5Y4/1 黄灰細粒砂混じりシルト (φ3cm程度の礫を含む、黒ブロックを含む)
  14. 5Y4/2 灰オリーブ細粒砂混じりシルト (黒ブロックを含む)
  15. 2.5Y3/1 黒褐細粒砂混じり中粒砂
  16. 5Y3/2 オリーブ黒細粒砂
  17. 10YR3/1 黒褐細粒砂
- } 地山



第41図 SX01・SX02 平・断面図 (S=1/40)



第 42 図 SX01・SX02 断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

いる。外面は摩滅しており調整は不明だが、内面は丁寧にナデられている。

**所属時期** 出土遺物は、信里編年 (信里 2014) の古墳前期 4～5 期に相当するため、古墳時代前期後半である。

### S X 02 (第 41・42 図)

調査区北側 (A2-3 工区)、S X 01 の南側で検出した不整形の土坑で、S X 01 に切られ、S H 03 を切る。南北長約 2.6 m、東西長約 4.5 m である。遺構検出高は 14.65 m で、遺構底面の高さは 13.95 m、遺構の深さは約 0.7 m である。断面は台形状で、埋土は黒色シルト及び黒褐色シルトである。掘削中は湧水が激しく、また埋土の色調・土質から S X 02 は貯水又は出水遺構の可能性がある。遺構からは、土器片 1 点が出土した。

**所属時期** 古墳時代前期後半の遺構である S X 01 に切られ、弥生時代後期と考えられる S H 03 を切っていることから、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

#### ④土坑

##### SK 06 (第 43 図)

調査区北側中央 (A2-3 工区)、S X 01 の北東で検出した土坑である。平面形態は北西-南東に長く伸びる長方形状で、長軸約 0.94 m、短軸約 0.50 m、深さ約 0.11 m である。断面は楕円形状で、埋土は黒細粒砂混じりシルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器片・土師器片が出土した。

**出土遺物** 67 は甕の口縁部である。口縁部は内湾する。口縁端部は内外にわずかに肥厚し、端面はコ字に成形する。

**所属時期** 出土遺物は、信里編年 (信里 2014) の古墳前期 5 期に相当するため、古墳時代前期後半である。

##### SK 07 (第 44 図)

調査区北側中央 (A2-3 工区)、S X 01 の北東で検出した土坑である。平面形態は北東-南西に長く伸びる楕円形状で、長軸約 0.48 m、短軸約 0.28 m、深さ約 0.32 m の土坑である。断面は楕円形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルト及び直径 1cm 程度の礫を含む黒色細粒砂混じりシルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 68 は高杯の口縁部である。口縁部は底面から強く屈曲し、口縁部が直立気味に外に開きながら立ち上がる。端部は外面がわずかに肥厚し、コ字に成形される。

**所属時期** 出土遺物が蔵本編年 (蔵本 2019) の後期 2 期に相当するため、弥生時代後期前葉である。

##### SK 08 (第 44 図)

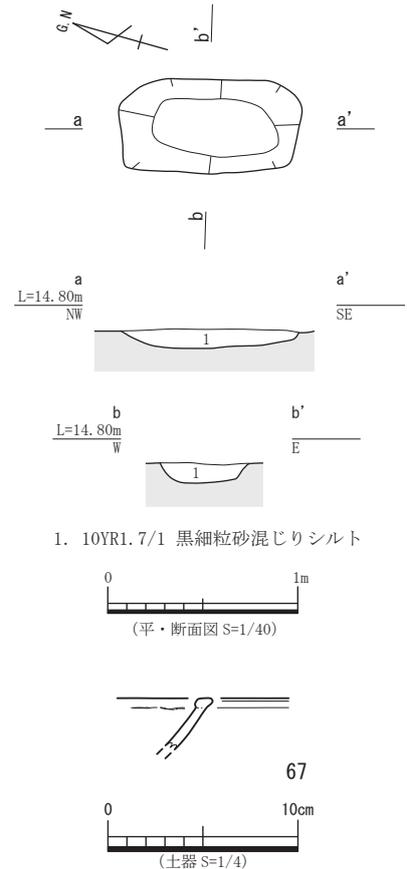
調査区北西側 (D1-3 工区)、S D 05 の北東で検出した土坑である。平面形態は円形状で、長軸約 0.21 m、短軸約 0.16 m、深さ約 0.18 m の土坑である。断面は楕円形状で、埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器片が出土した。

**出土遺物** 69 は高杯の脚部である。底部は内側の端部をつまみだしたようにわずかに突出させ、端面は丁寧にナデる。香東川下流域産土器である。

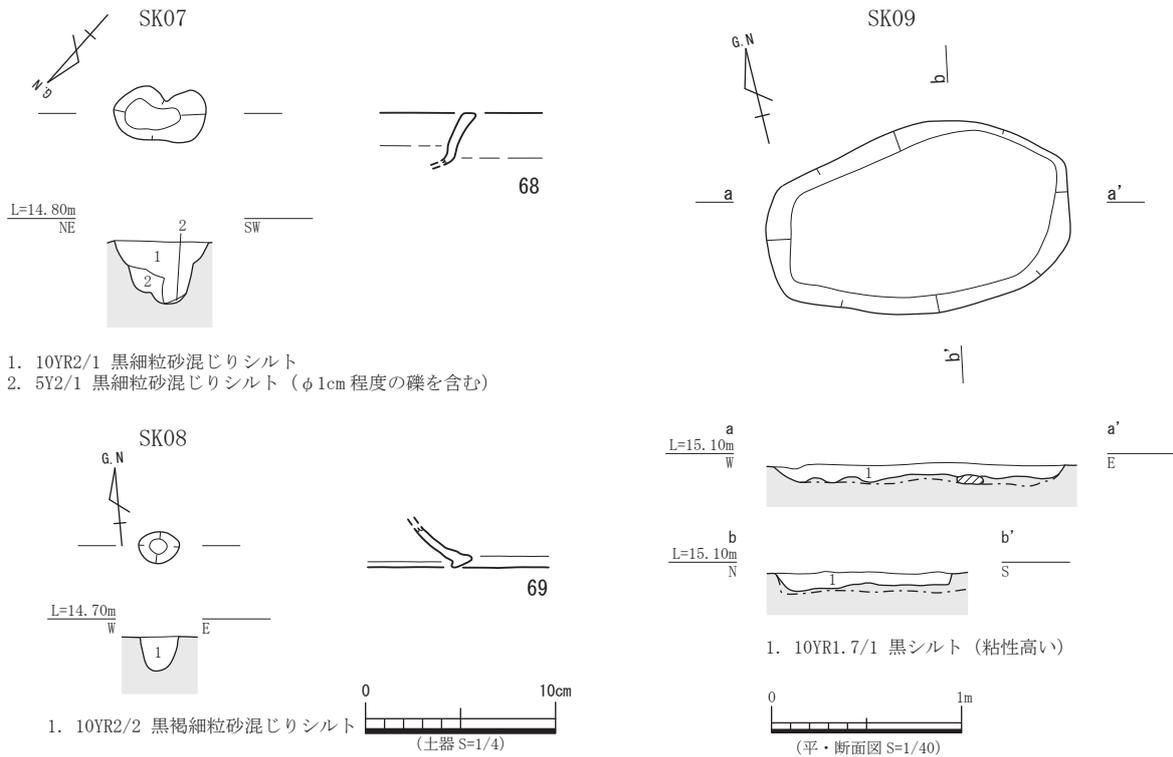
**所属時期** 出土遺物から、弥生時代後期と考えられる。

##### SK 09 (第 44 図)

調査区南側 (D2 工区)、S H 05 の北側で検出した土坑である。平面形態は東西に長く延び



第 43 図 SK06 平・断面図 (S=1/40)・  
出土遺物 (S=1/4)



第 44 図 SK07 ～ 09 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

る楕円形状で、長軸約 1.60 m、短軸約 1.00 m、深さ約 0.08 m の土坑である。断面は台形状で、埋土は黒色シルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器片が出土した。

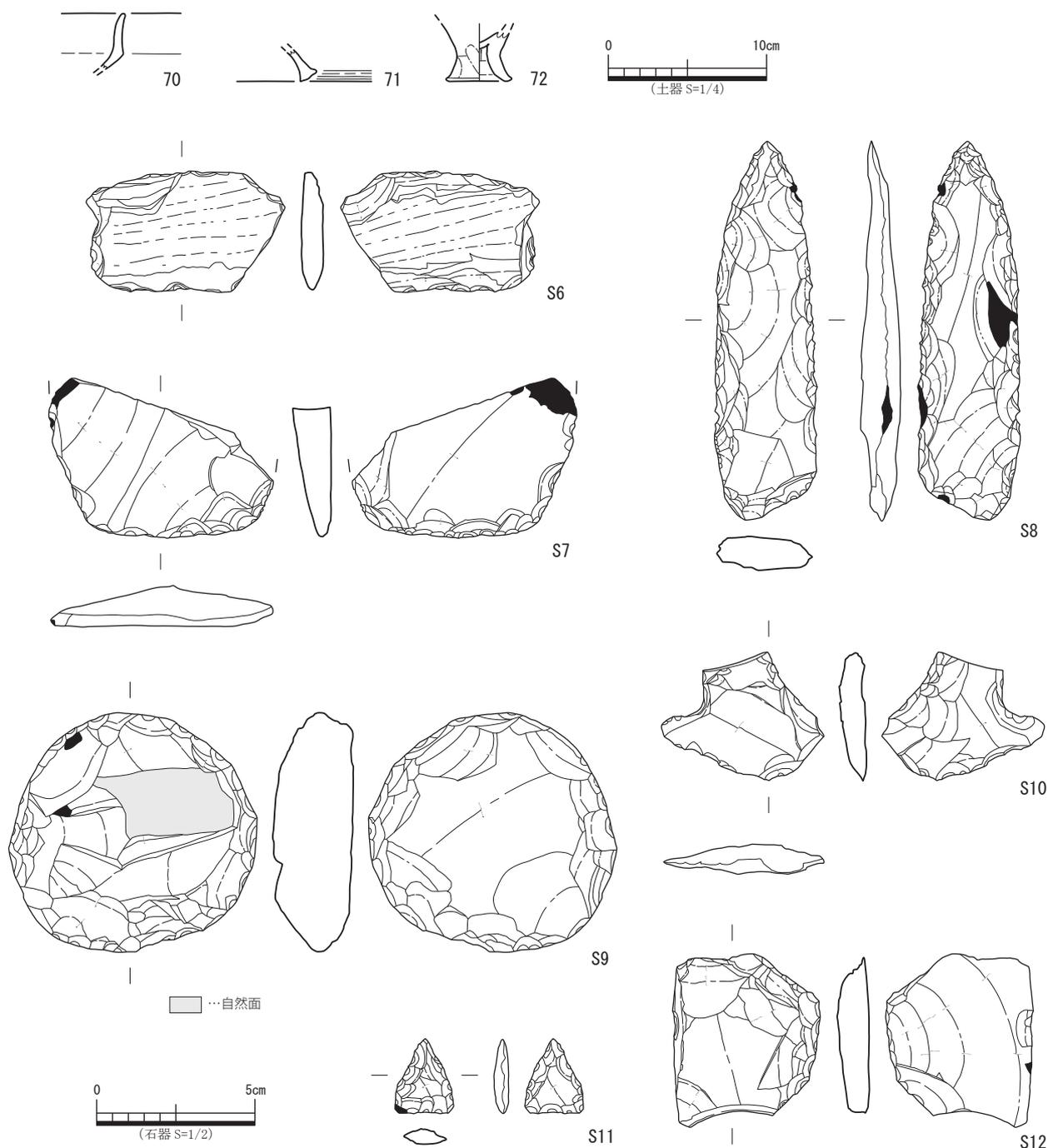
**所属時期** 出土遺物の中に、香東川下流域産土器の土器片が多数含まれていたため、弥生時代後期と考えられる。

### ⑤包含層 (第 45・46 図)

包含層から出土した当該期の遺物は、調査区南側～北東側にかけて集中する。包含層から出土した石器は、弥生時代前期又は後期に所属すると想定されるが、どちらの時期か判断できなかったため、ここでまとめて提示する。土器は主に弥生時代後期のものが出土した。

70、71 は高杯である。70 は口縁部で、杯部底面から強く屈曲しわずかに外反して立ち上がる。71 は脚部で、端部は内外面ともに肥厚し端面は凹状にナデられる。70、71 は香東川下流域産土器である。72 は製塩土器の脚部である。

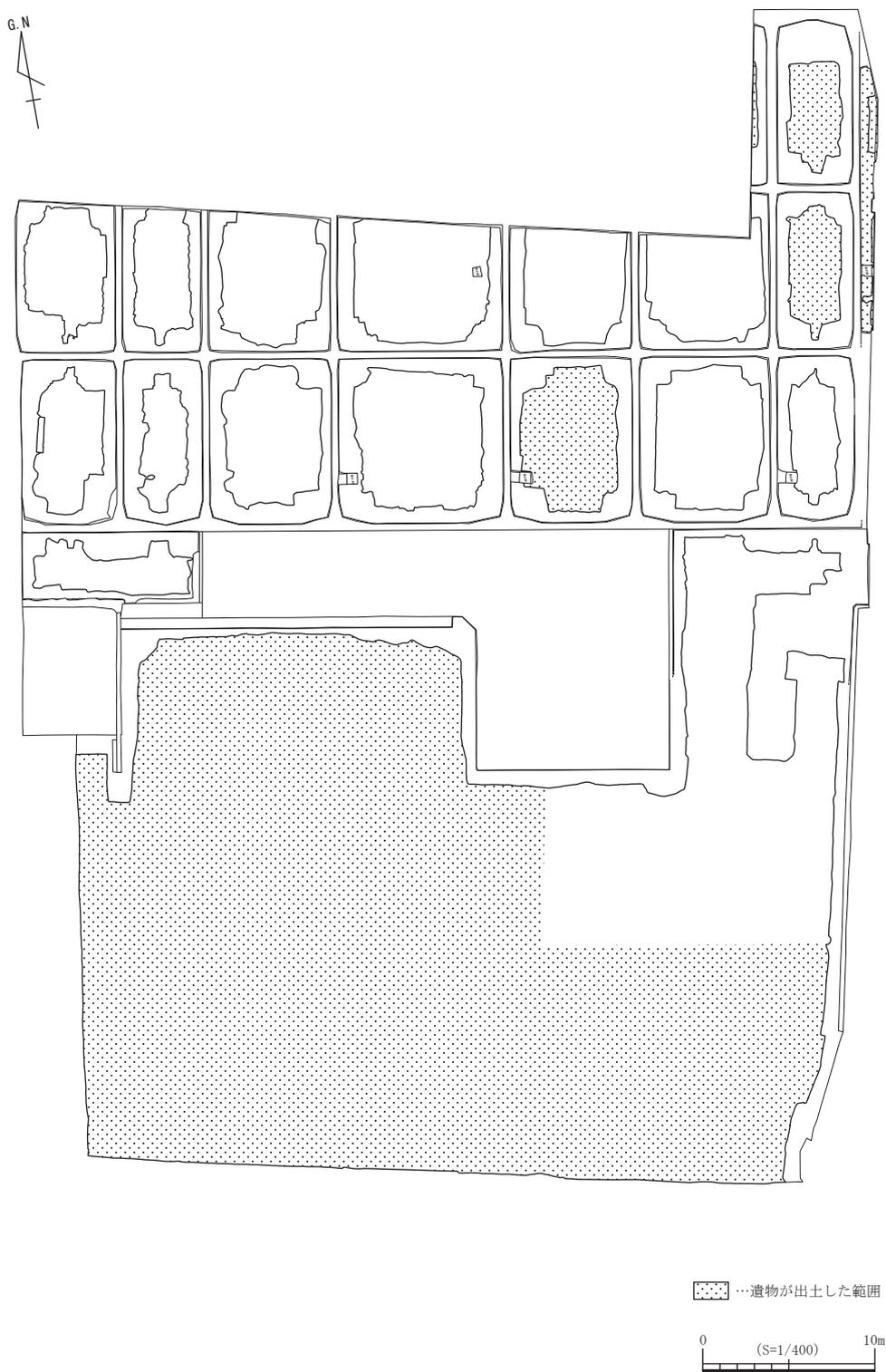
S6 は結晶片岩製の打製石包丁である。横面に挟りがみられる。S7 はサヌカイト製の打製石斧 (石鋏) である。刃部の一部に使用による摩滅が認められ、横面の先端は刃がつぶされている。S8 はサヌカイト製の石槍である。完形に近い製品であり、横面下部は刃がつぶされている。S9 はサヌカイト製の叩き石である。直径 7.4cm の円形で、横面には使用痕が認められる。S10 はサヌカイト製の石匙である。完形である。S11 はサヌカイト製の打製石鏟である。完形である。S12 は楔形石器 (石核) である。石核は直接打法によって成形されている。



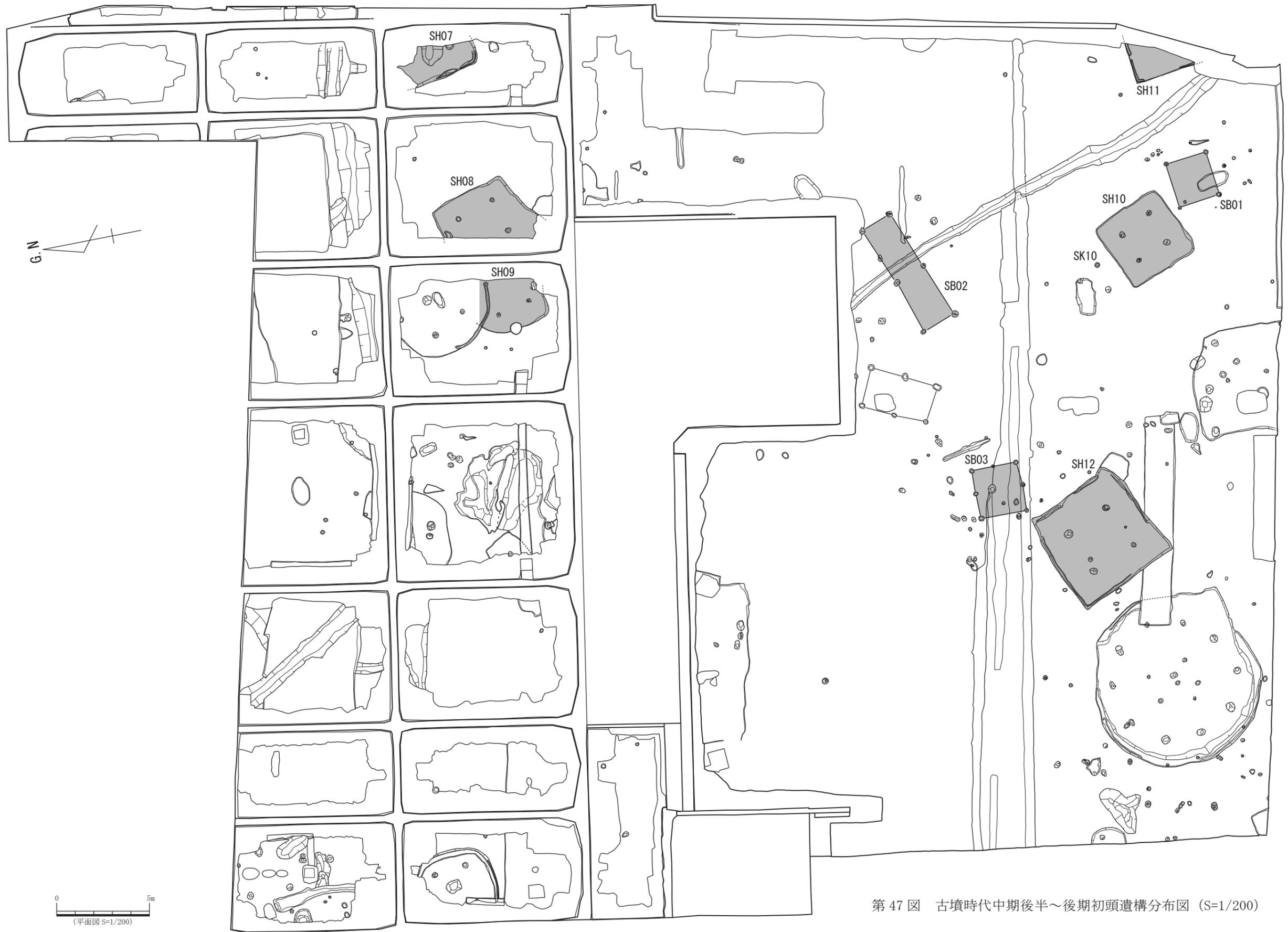
第 45 図 包含層出土遺物（弥生時代後期～古墳時代前期）（S=1/4, 1/2）

### 参照文献

- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡 第2分冊』, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
- 蔵本晋司 2019 「香東川下流域産土器群の基礎的研究」『上林遺跡』, 香川県教育委員会
- 多賀茂治 1996 「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡 第6分冊』, 兵庫県教育委員会
- 信里芳紀 2014 「讃岐地域における古墳時代前期の土器編年」『古式土師器の編年的研究 一四国島の古墳時代前期の土器様相一』, 四国考古学研究会
- 松本和彦 2000 「松並・中所遺跡竪穴住居について」『松並・中所遺跡』, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 松本和彦 2001 「遺構の変遷」『岡清水遺跡』, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター



第 46 図 包含層の遺物（弥生時代後期～古墳時代前期）出土範囲（S=1/400）



第 47 図 古墳時代中期後半～後期初頭遺構分布図 (S=1/200)

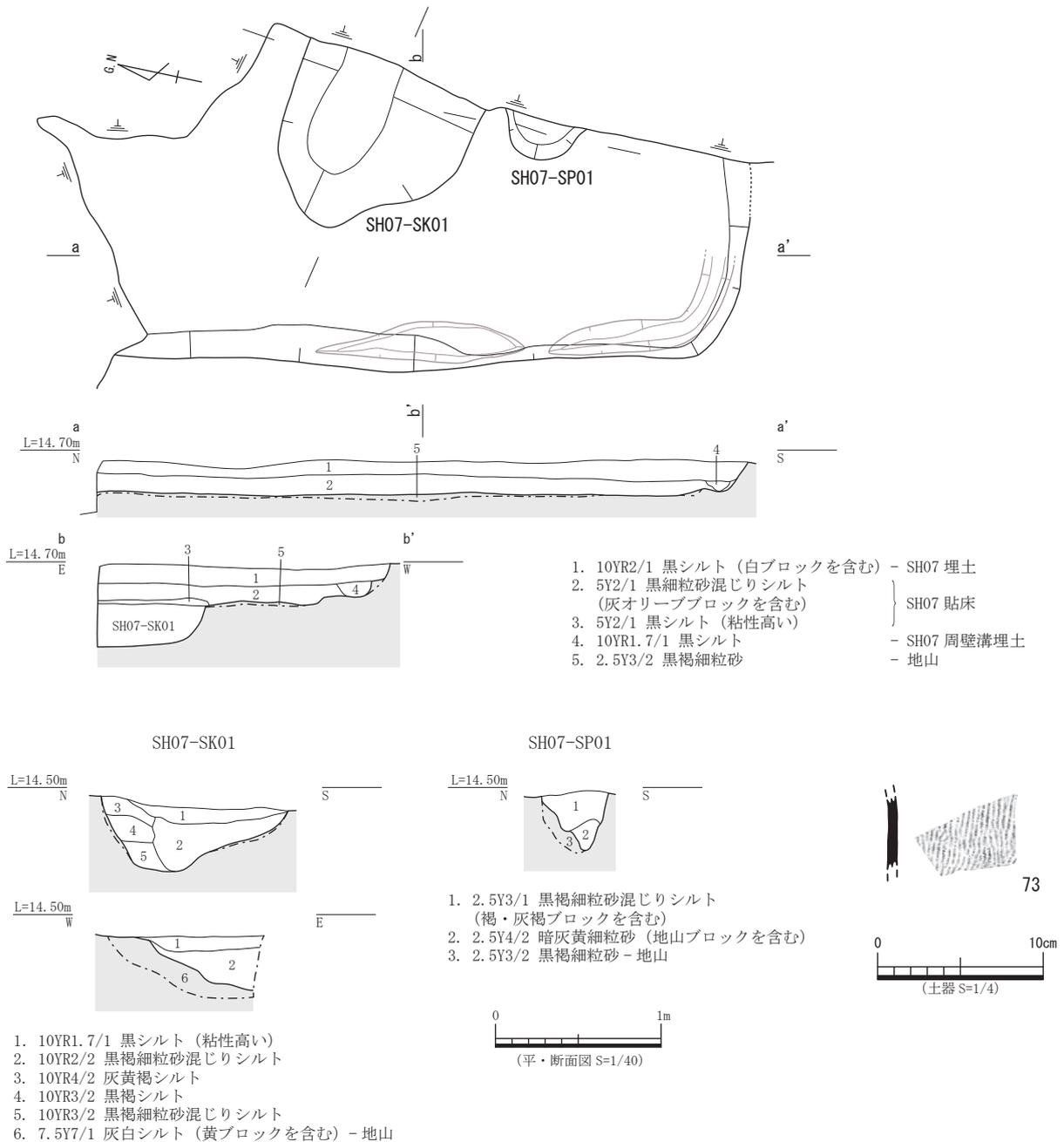
(4) 古墳時代中期後半～後期初頭

本調査において、古墳時代中期後半～後期初頭の遺構は、調査地北東側及び南側を中心に分布している。遺構は、竪穴建物跡6棟、掘立柱建物跡3棟、土坑1基を確認した(第47図)。

① 竪穴建物跡

SH07 (第48図)

調査区北東側(A1-5工区)で検出した竪穴建物跡である。建物基礎による攪乱により、南西側のみ遺存していた。平面形態は方形で、南北長3.6m以上、東西長1.2m以上である。主



第48図 SH07 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

軸方位はN 12° Wである。遺構検出高は 14.66 mで、掘方底面の高さは約 14.42 mである。床面を検出し、床面の高さは約 14.55 mである。埋土は白色ブロックを含む黒色シルトで、貼床は灰オリーブ色ブロックを含む黒色細粒砂混じりシルト及び黒色シルトで構成される。

竪穴建物内では、周壁溝と土坑 1 基、柱穴 1 基を確認した。周壁溝は西南端から西側中央にかけて確認した。深さは約 0.09 mで、埋土は黒色シルトである。柱穴は建物南西側（S P 01）で検出した。柱穴底面の高さは約 14.10 mで、埋土は褐色・灰褐色ブロックを含む黒褐色細粒砂混じりシルト及び地山ブロックを含む暗灰黄色細粒砂である。また、建物中央部で土坑（S K 01）を検出した。平面形態は東西方向に延びる楕円形状で、長軸 1.08 m以上、短軸約 1.14 mである。断面は台形状で、埋土は黒色シルト、黒褐色細粒砂混じりシルト～シルト及び灰黄褐色シルトである。S K 01 は掘方底面から掘り込まれており、S H 07 に伴うのではなく破壊された遺構である可能性が高い。S K 01 から遺物は出土していないため、時期は不明である。竪穴建物埋土内・貼床内から土師器片が出土した。

**出土遺物** 73 は S P 01 から出土した須恵器大甕の胴部片である。外面全体に平行叩きを施す。内面に文様は見られず、ナデられる。

**所属時期** 出土遺物のなかで時期が判別できる大甕（73）が田辺編年（田辺 1966）の T K 208～T K 23 型式に相当するため、古墳時代中期後葉～末葉（5 世紀後半～末）である。須恵器大甕において外面に平行叩き、内面の文様をナデ消す手法は、田辺編年の T K 23 型式までとされる（田辺 1966）。

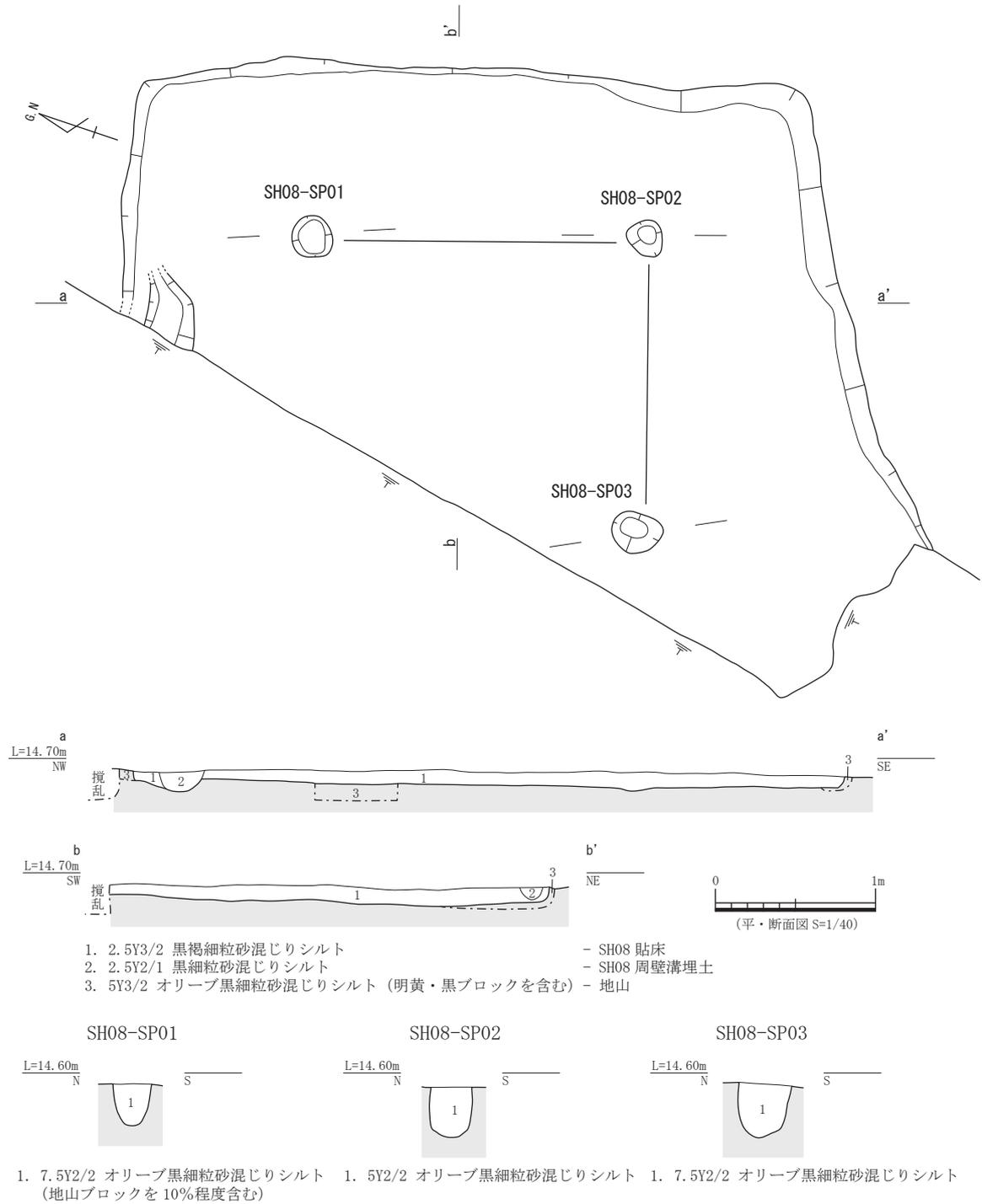
#### S H 08（第 49・50 図）

調査区北東側（A1-6 工区）、S H 07 の南西で検出した竪穴建物跡である。西側約 3 分の 1 程度が建物基礎による攪乱によって破壊されていた。平面形態は方形で、南北長約 4.5 m、東西長 3.0 m 以上である。主軸方位は N 17.5° W である。遺構検出高は約 14.62 mで、掘方底面の高さは約 14.54 m である。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は黒褐色細粒砂混じりシルトで構成される。

竪穴建物内では、周壁溝と主柱穴 3 基を確認した。周壁溝は建物北側中央でのみ検出した。残存高は約 0.12 m で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。主柱穴は建物北東側（S P 01）、南東側（S P 02）、南西側（S P 03）で検出した。主柱穴底面の高さは 14.20～14.25 m である。埋土はすべて単層で、オリーブ黒色細粒砂混じりシルトである。貼床内から土器片が出土した。

**出土遺物** 74、S13 は貼床内から出土した遺物である。74 は弥生土器の高杯の脚部である。外面端部は外側につまみ出すように肥厚し、底面にはナデによる弱い稜がみられる。また、外面から内面に向かってあけられた穿孔がみられる。香東川下流域産土器である。S13 はサヌカイト製の打製石斧（石鋏）又は石核である。先端に刃部とみられる加工痕があるため打製石斧と思われるが、打製石斧にしては幅が狭いため石核の可能性もある。横面には加工痕が認められるが、先端はつぶれている。

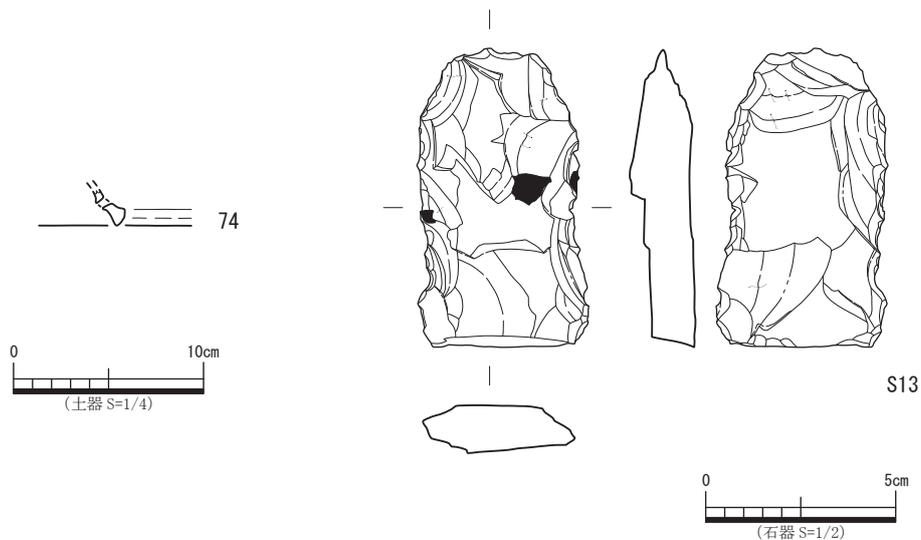
**所属時期** 遺構の平面形態と周辺状況から、古墳時代中期後半～後期初頭と考えられる。



第 49 図 SH08 平・断面図 (S=1/40)

### SH 09 (第 51・52 図)

調査区北側 (A1-7、B4 工区)、SH 08 の西側で検出した竪穴建物跡である。北側は SH 01 を切り、東側は建物基礎による攪乱によって破壊されていた。また、西側が SK 17 に切られる。SH 01 の項でも述べたように、調査段階では SH 01 が SH 09 を切るものと想定したが、整理段階で SH 09 の方が新しいと判明した。そのため SH 09 の北側の平面形態は確認できな



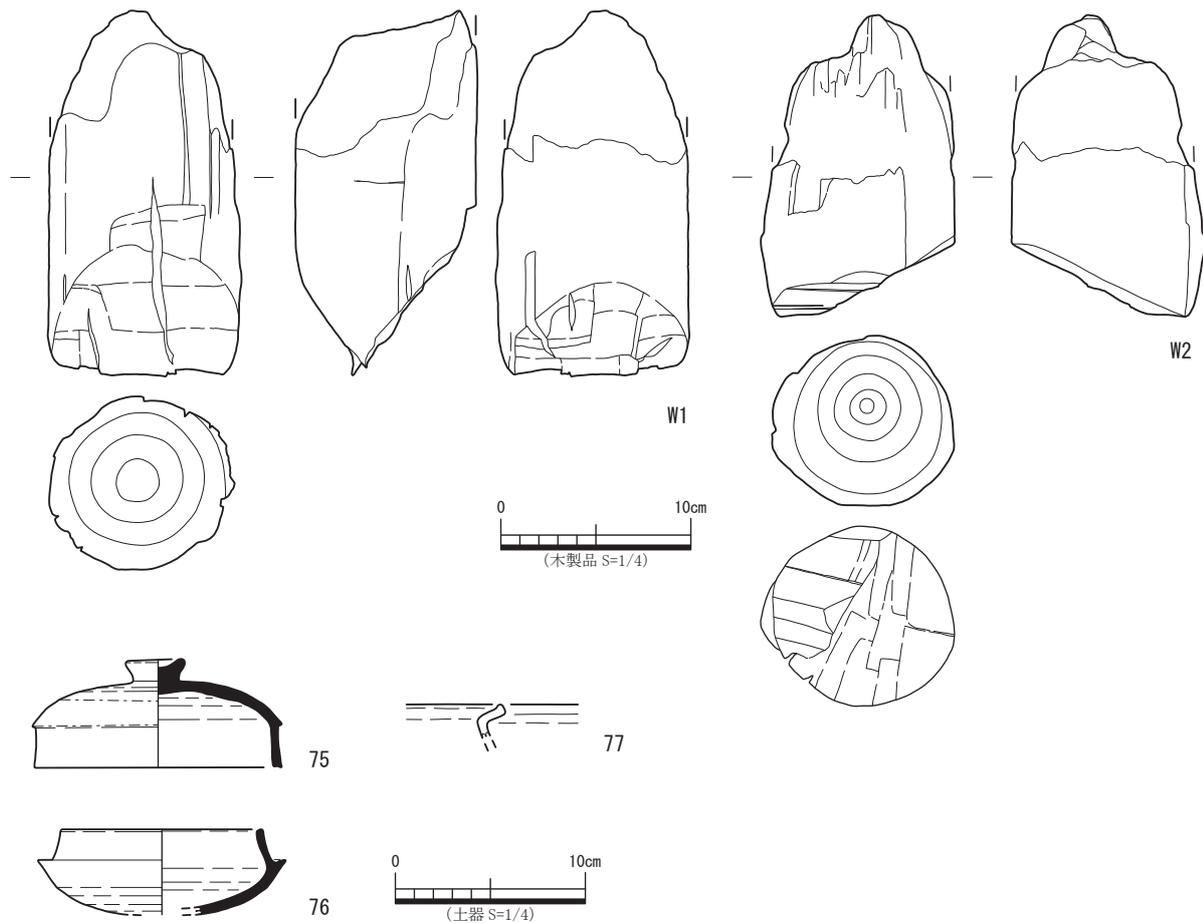
第 50 図 SH08 出土遺物 (S=1/4, 1/2)

かったが、残存する部分から平面形態は隅丸方形と想定され、南北長 3.0 m 以上、東西長 2.9 m 以上である。主軸方位は N 12° W である。遺構検出高は約 14.60 m で、掘方底面の高さは約 14.55 m である。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は黒褐色細粒砂混じりシルトで構成される。

竪穴建物内では、支柱穴 3 基と土坑 1 基を確認した。支柱穴は建物北東側 (S P 01)、北西側 (S P 02)、南西側 (S P 03) で検出した。支柱穴底面の高さは 14.10 ~ 14.30 m である。埋土はにぶい黄褐色ブロックを含む黒色シルト、黄褐色ブロックを含む黒色シルト、黒色シルトである。また、建物南側で土坑 1 基 (S K 01) を確認した。平面形態は、南側が建物基礎による攪乱により破壊されていたが、東西に延びる楕円形状である。長軸約 0.46 m、短軸約 0.30 m 以上、深さ約 0.30 m である。断面は台形状で、埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。土坑底面では、直径約 0.1 m 程度の礫とともに一部欠損した杯身と杯蓋が確認された。S K 01 の埋土に焼土は含まれていないが、竪穴建物南側中央部に位置することからカマド掘方の可能性が考えられる。当該期のカマドは高松市萩前・一本木遺跡などで確認されており (高松市教委編 2017)、カマド内に土器が廃棄されている例が多く、S H 09 内の S K 01 についても同様の性格をもつ遺構であると想定される。貼床内及び S K 01 から土器片が出土した。また、S P 02、03 からは柱材 (W1、W2) が出土した。

**出土遺物** 75、76 は S K 01 から、77 は貼床内から出土したものである。75 は杯蓋で、口縁部が上に向いた状態で出土した。天井部につまみがついている。口縁部と天井部の境は強い稜が入り、境ははっきりとしている。天井部はほぼ全体にヘラケズリが施され、口縁部は直線的に延び、端部は凹斜面になっている。また、天井部側面には自然釉が残り、焼成時に重ね焼きをした様子が見える。76 は杯身である。受部には溝を作り、シャープに成形する。受部の立ち上がりは内向し、口縁端部に向かって外反して延びている。端部は平らに成形されている。周辺では萩前・一本木遺跡 I の 393 (高松市教委編 2017)、器種は異なるが太田下・須川遺跡の 968 に類似する (香川県教委編 1995)。77 は弥生土器の甕の口縁部である。頸部か





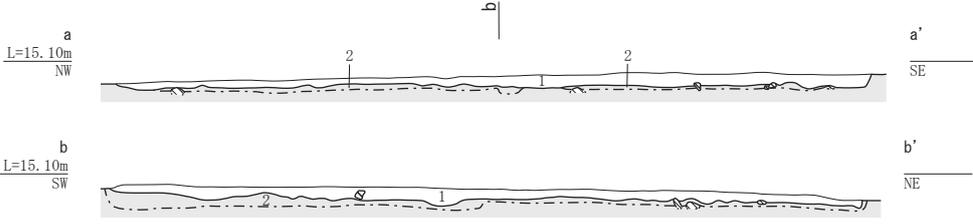
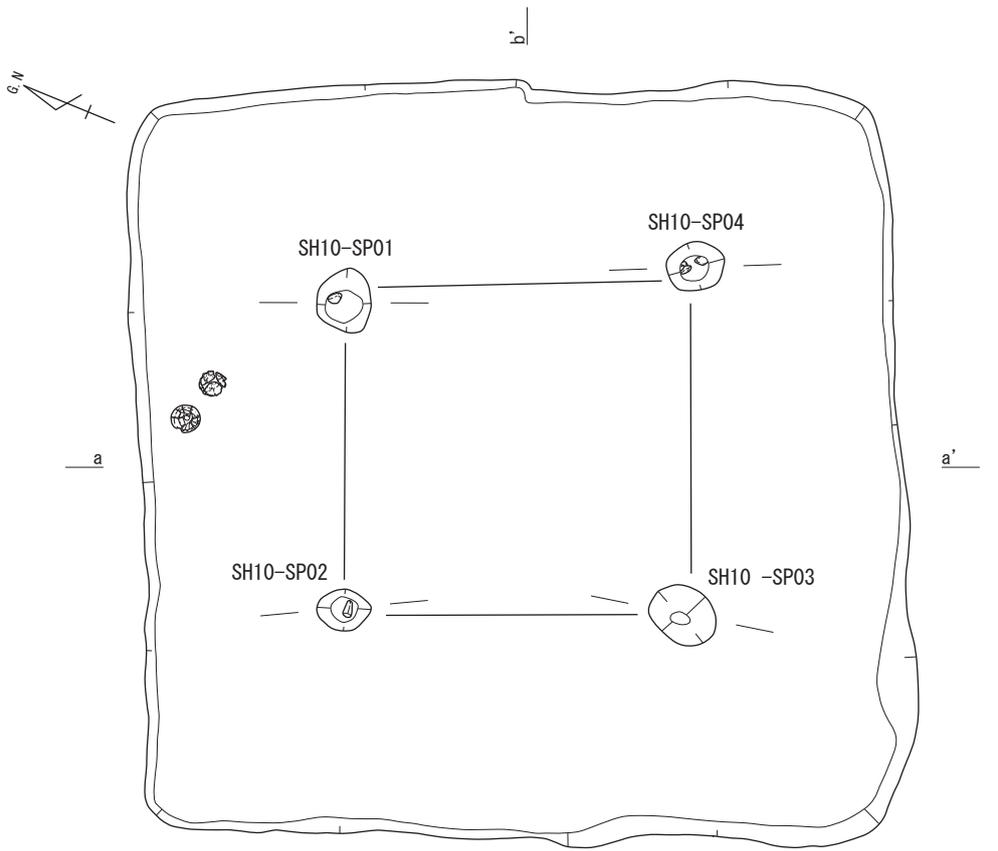
第 52 図 SH09 出土遺物 (S=1/4)

らくの字状に屈曲し、端部は内側につまみ上げている。香東川下流域産土器である。S P 02、03 から柱材が出土した。W1 はS P 02 から突き刺さった状態で確認された。長さ 19.40 cm、幅 10.2 cm である。先端はワレにより調整は不明であるが、平端部は加工痕が少しみられる。W2 はS P 03 から突き刺さった状態で確認された。長さ 16.0 cm、幅 10.2 cm である。先端部は尖らせるように加工、平端部は斜めに裁断したのち、加工したとみられる工具痕が多数見られた。また、一部樹皮が残存していた。樹種はどちらもアワブキ科アワブキ属である。

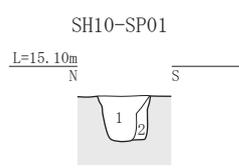
**所属時期** 出土遺物のなかで時期が判別できる杯身・杯蓋 (75、76) が田辺編年 (田辺 1966) のTK 23 型式に相当するため、古墳時代中期後葉～末葉 (5 世紀後半～末) である。また柱材について加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った結果、W1 はAD 418～538 年の範囲、W2 はAD 428～551 年の範囲に該当する可能性が非常に高く、どちらも 5 世紀～6 世紀前半の木材であることが判明した。これらの年代は出土遺物の須恵器の年代とも整合的である。

#### SH 10 (第 53 図)

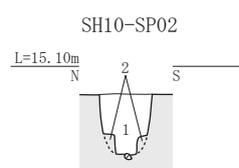
調査区南東側(C 工区)、S D 01 の南西で検出した竪穴建物跡である。平面形態は隅丸方形で、3.9 m 四方である。主軸方位はN 19° W である。遺構検出高は約 15.00 m で、掘方底面の高さ



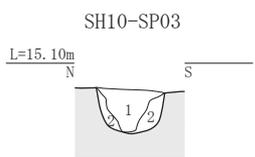
- 1. 2. 5Y2/1 黒細粒砂混じりシルト - SH10 貼床
- 2. 2. 5Y3/1 黒褐細粒砂 (白ブロックを含む) - 地山



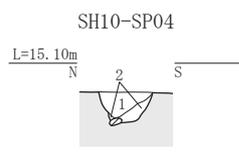
- 1. 2. 5Y2/1 黒細粒砂
- 2. 2. 5Y3/1 黒褐細粒砂混じりシルト



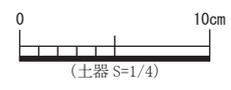
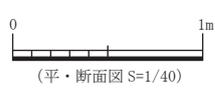
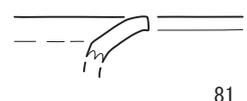
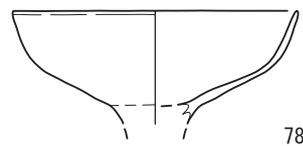
- 1. 2. 5Y2/1 黒細粒砂
- 2. 2. 5Y4/1 黄灰細粒砂



- 1. 2. 5Y2/1 黒細粒砂
- 2. 2. 5Y3/1 黒褐細粒砂混じりシルト



- 1. 2. 5Y2/1 黒細粒砂
- 2. 2. 5Y3/1 黒褐細粒砂混じりシルト



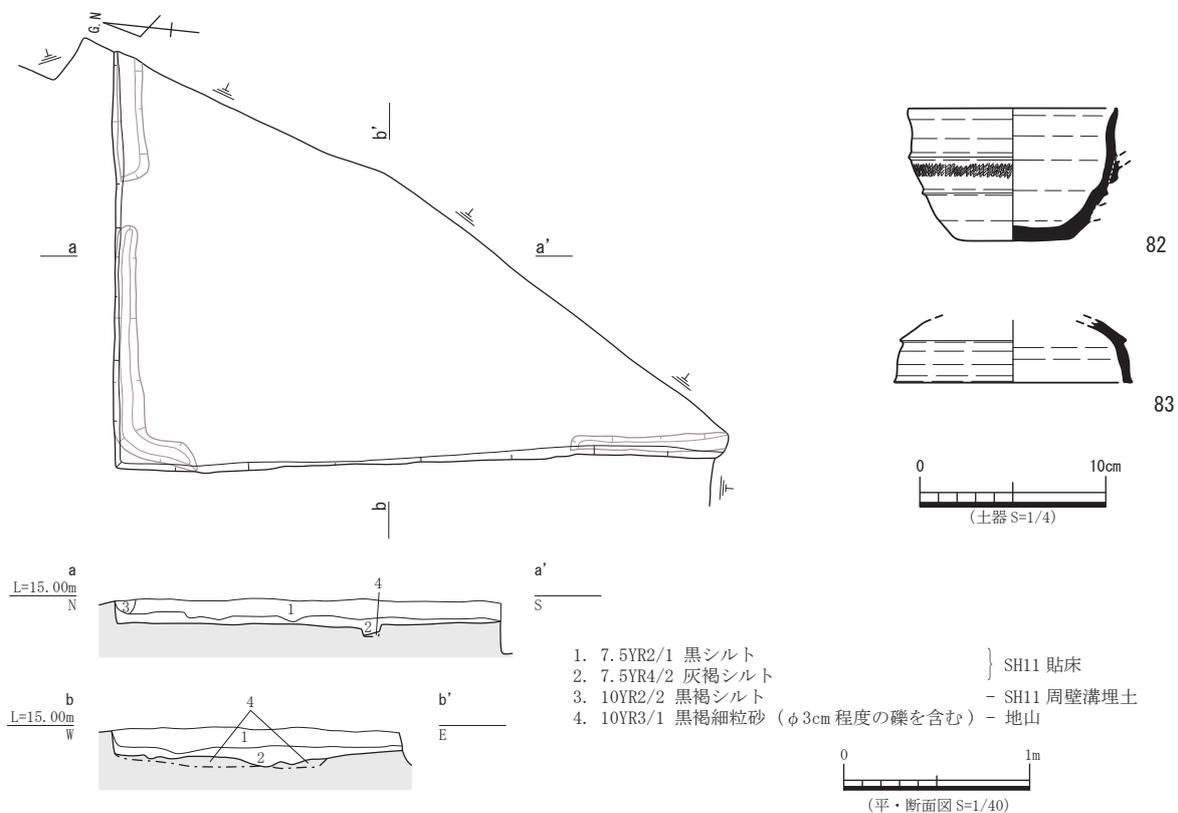
第 53 図 SH10 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

は約 14.95 m である。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は黒色細粒砂混じりシルトで構成される。

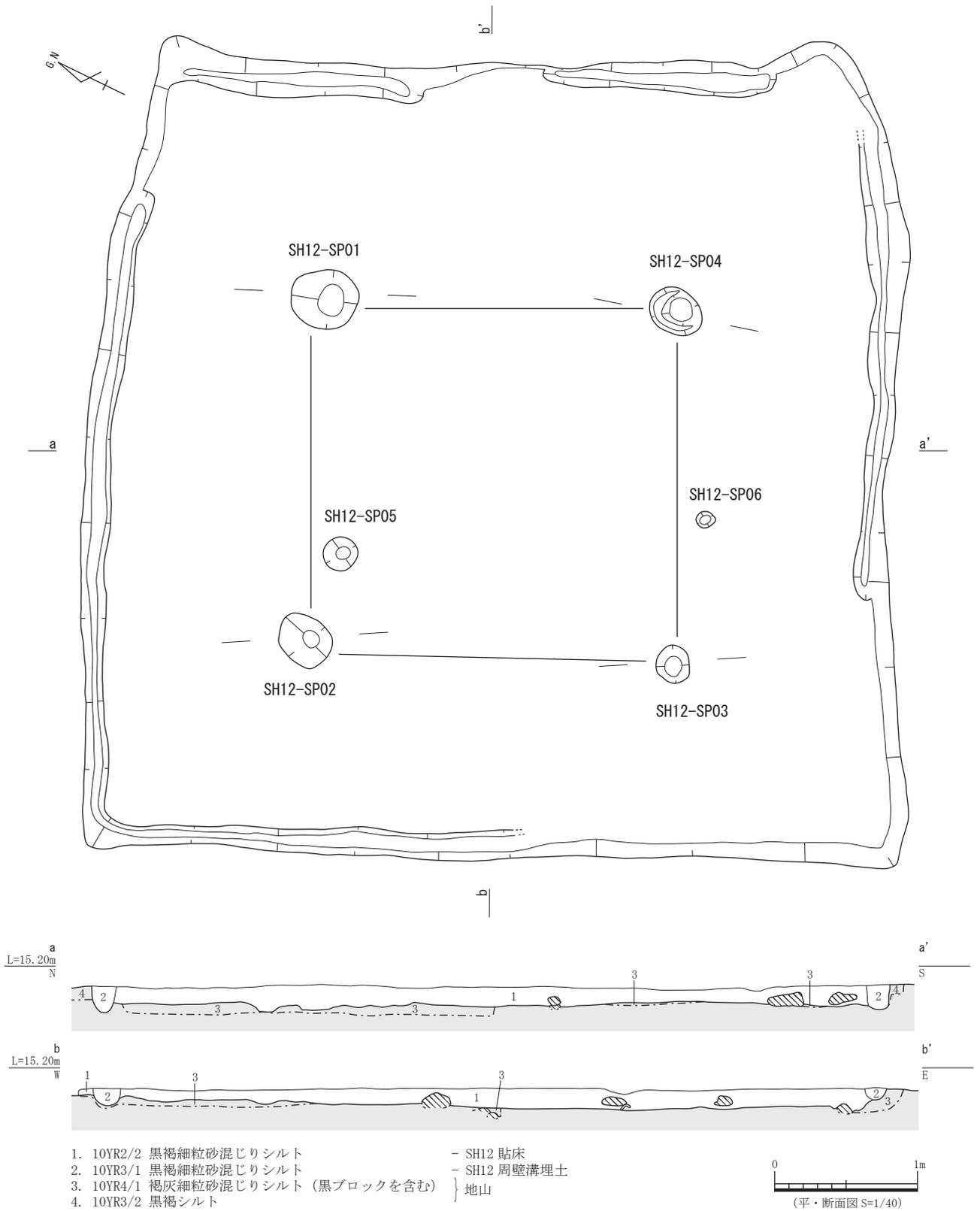
竪穴建物内では、支柱穴 4 基を確認した。支柱穴底面の高さは 14.60 ~ 14.78 m である。埋土は黒色細粒砂及び黒褐色細粒砂混じりシルトである。貼床内及び S P 04 から土器片が出土した。建物北西側で掘方底面から高杯の杯部が 2 点 (78、79) 口縁部を下にした状態で出土した。周辺では、萩前・一本木遺跡 I の 10- 竪穴 210 で、第 2 貼床面直上から押しつぶされた状態の杯蓋を確認しており、今回出土した遺物も同様に埋没したと推測される (高松市教委編 2017)。

**出土遺物** 78 ~ 80 は貼床内から、81 は S P 01 から出土した。78、79 は高杯の口縁~杯部である。78 は椀型で、杯部ははじめ緩やかに杯部中央からはほぼ垂直に立ち上がり、端部をすぼめるように成形している。周辺では萩前・一本木遺跡 I (高松市教委編 2007) の 494 がこれに類似する。79 は内・外面に黒斑が見られ、円盤充填の跡も残っていた。80 は弥生時代前期後半の甕で、逆 L 字形口縁である。81 は壺の口縁部である。緩やかに外反し、端部はコ字に成形する。香東川下流域産土器である。

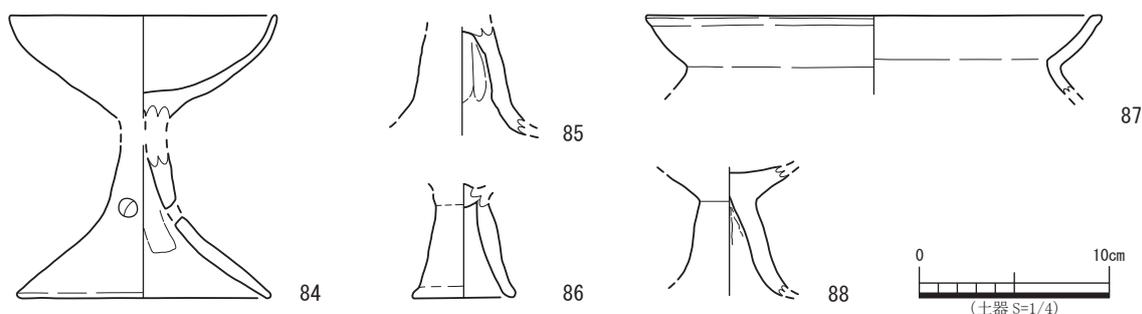
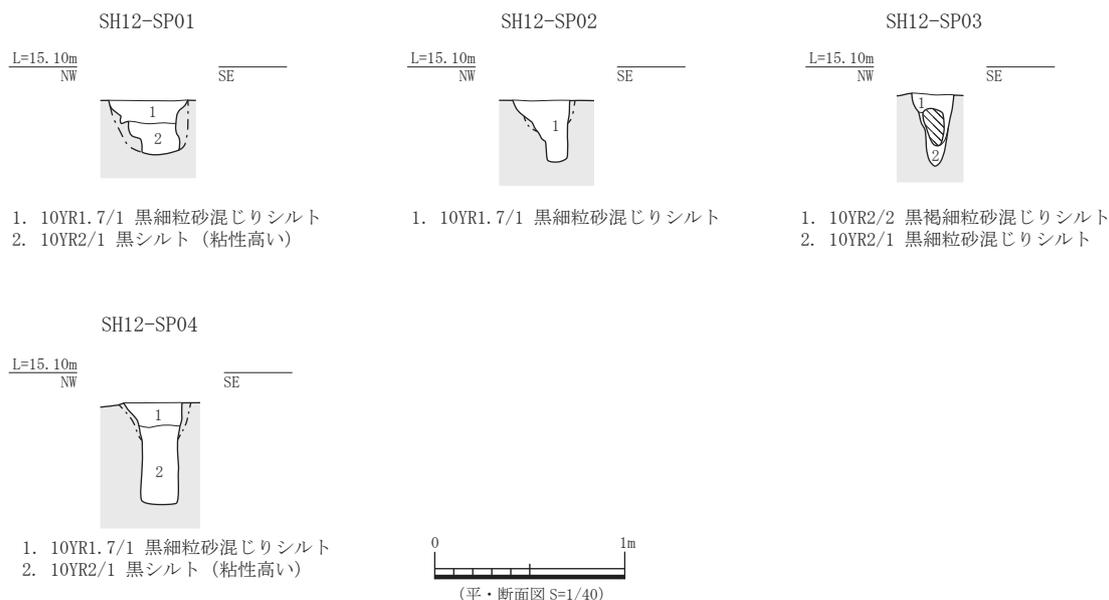
**所属時期** 出土遺物のなかで時期が判別できる高杯 (78) は、片桐氏の分類 (片桐 2002) において高杯 B 2 にあたり、古墳時代中期土師器編年の IV ~ V 期に該当する。IV 期は T K 208 型式併行期の須恵器が共伴し、V 期は太田下・須川遺跡 (香川県教委編 1995) の S H 02 ~ 06 を類例として挙げている。この竪穴建物跡には T K 23 型式併行期の須恵器が共伴している。そのため、古墳時代中期後葉~末葉 (5 世紀後半~末) である。



第 54 図 SH11 平・断面図 (S=1/40) ・出土遺物 (S=1/4)



第 55 図 SH12 平・断面図 (S=1/40)



第 56 図 SH12 断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

### SH 11 (第 54 図)

調査区南東側 (C 工区)、SD 01 の東で検出した竪穴建物跡である。東側約 3 分の 2 程度が建物基礎による攪乱によって破壊されていた。平面形態は方形で、南北長 3.3 m 以上、東西長 2.3 m 以上である。主軸方位は N 5° W である。遺構検出高は 14.98 m で、掘方底面の高さは約 14.84 m である。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は黒色シルト及び灰褐色シルトで構成される。

竪穴建物内では、周壁溝を確認した。周壁溝は建物北側及び南西側で検出した。残存高は約 0.08 m で、埋土は黒褐色シルトである。貼床内及び周壁溝から土器片が出土した。

**出土遺物** 82、83 は貼床内から出土した。82 はコップ型土器である。胴部には三角状の突帯が 2 条付けられ、突帯の間には楕円波状文を 5 条施す。口縁部は、上部の突帯から端部に向かって一度外反し、端部は内側に向かって少しまみ上げている。把手は上部貼付面のみ残存している。また、底面には火だすき痕が走っている。83 は杯蓋の口縁～杯部である。口縁部と天井部の境には強い稜が入り、稜の下は強くナデられる。口縁部は外側にわずかに膨らみながら延び、端部は外側に向かってつまみ出し、端面は浅い凹斜面になっている。

**所属時期** 出土遺物のなかで時期が判別できる杯蓋 (83) が田辺編年 (田辺 1966) の TK 23

～47型式に相当するため、古墳時代中期後葉～末葉（5世紀後半～末）である。

### SH 12（第55・56図）

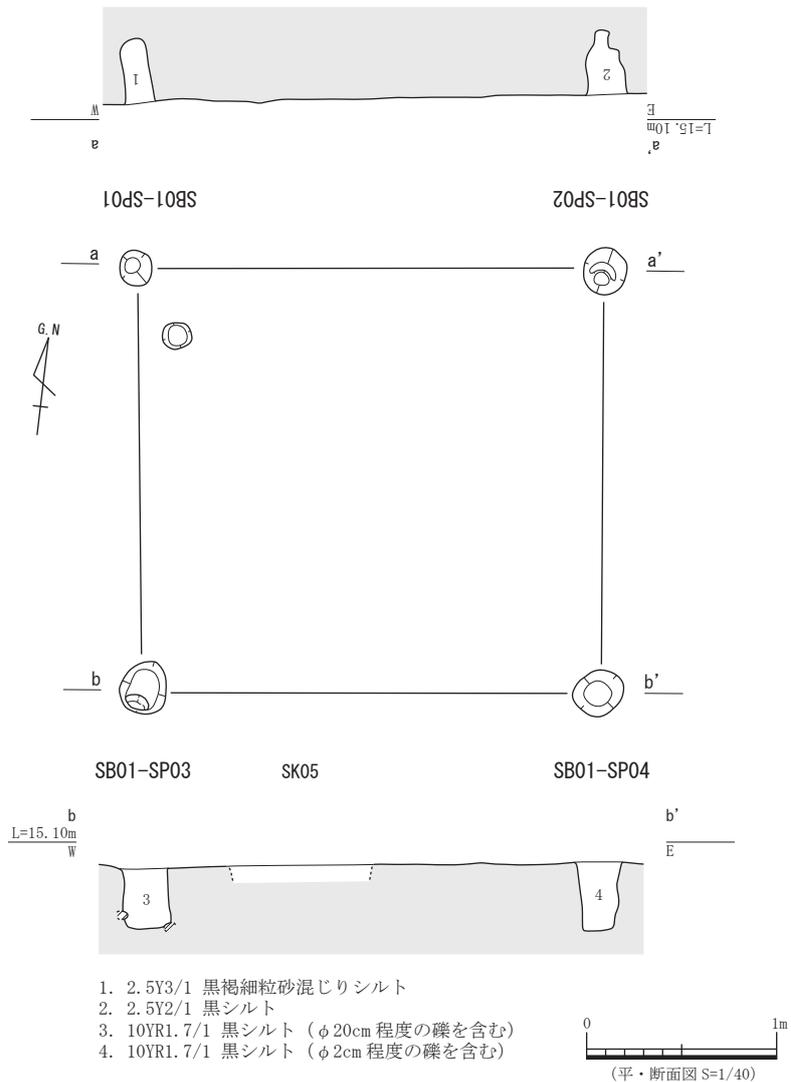
調査区南西側（D2工区）、SH 06の北東で検出した竪穴建物跡である。平面形態は正方形で、南北長、東西長ともに約5.7mである。主軸方位はN 24.5° Wである。遺構検出高は約15.08mで、掘方底面の高さは約14.90mである。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は黒褐色細粒砂混じりシルトで構成される。

竪穴建物内では、周壁溝と支柱穴4基、ピット2基を確認した。周壁溝は建物北側・西北側・東側・南東側で検出した。残存高は0.15～0.2mで、埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

また、支柱穴底面の高さは14.40～14.60mで、埋土は上層が黒色細粒砂混じりシルト又は黒褐色細粒砂混じりシルトで、下層が粘性の高い黒色シルトである。貼床内及びSP 02から土器片が、SP 04からは土器片と柱材が出土し、樹種はブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節であった。

**出土遺物** 84～87は貼床内、88はSP 02から出土した。84～86、88は土師器高杯である。84の杯部は浅い椀型で緩やかに立ち上がり、端部は先細りしている。脚部には外側から内側に向かって空けられた円孔が3箇所あり、内側には工具痕のような痕がみられる。また、杯部と脚部の接合部には円盤充填後に先の細い道具で回したような孔が空いている。85、88は裾部に向かって緩やかに外反し、脚柱部と裾部との境が明瞭に屈曲する。86は裾部まで緩やかに外反し、端部を外側につまみ出している。また、円盤充填部が残っている。87は土師器甕の口縁部で、球状に張った胴部から内側に湾曲する口縁部を持つ。口縁端部はコ字に成形する。

**所属時期** 出土遺物のなかで時期が判別できる高杯（84）が片桐編年（片桐2002）の高杯B 2に相当するため、古墳時代中期後葉～末葉（5世紀後半～末）である。また柱材の加速器質量



第57図 SB01 平・断面図（S=1/40）



分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った結果（分析番号No. 17）、AD 417～538年の範囲に該当する可能性が非常に高く、5世紀～6世紀前半の木材であることが判明した。出土遺物の土師器の年代とも整合的である。

## ②掘立柱建物跡

### SB 01（第57図）

調査区南東側（C工区）、SH 10の南東で確認した1間×1間（2.5 m×2.2 m）の掘立柱建物跡である。主軸方位はN 5.5° Wである。柱穴底面の高さは14.62～14.66 mで、埋土は黒褐色細粒砂混じりシルト及び直径2～20 cm程度の礫を含む黒色シルトである。SP 02、03から土器片が出土した。

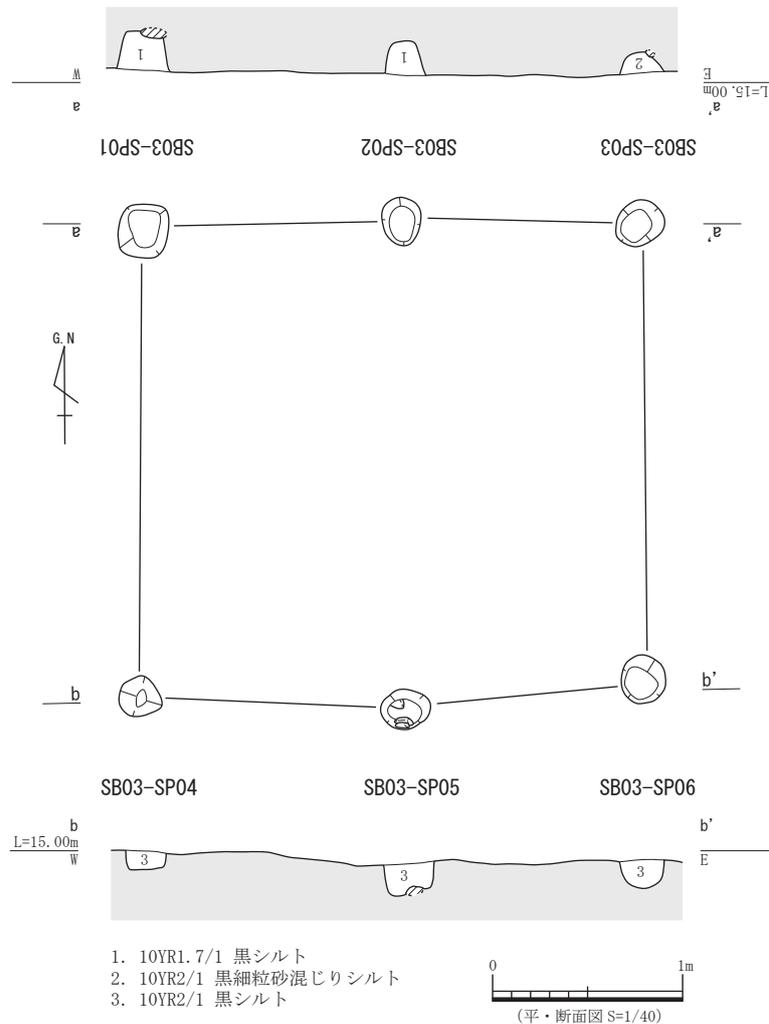
**所属時期** 周辺状況と主軸方位から、古墳時代中期後半～後期初頭の遺構と考えられる。

### SB 02（第58図）

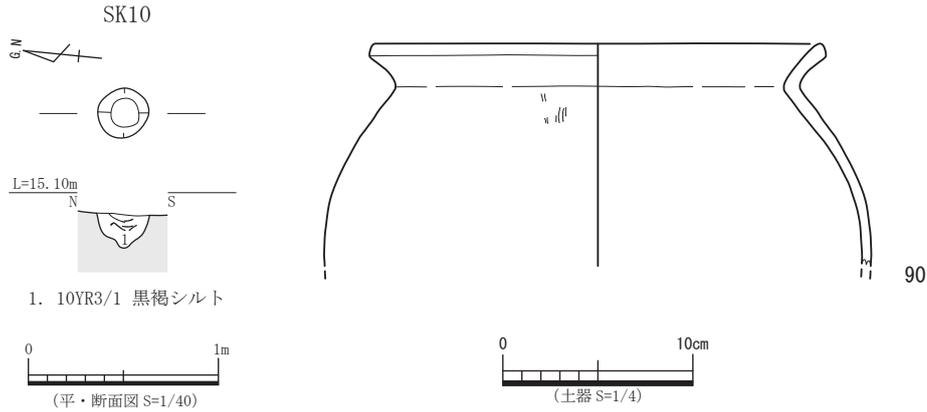
調査区南東側（C工区）、SH 10の北で確認した1間×2間（6.4 m×1.8 m）の掘立柱建物跡である。主軸方位はN 19° Wである。柱穴底面の高さは14.70～14.86 mで、埋土は黒色シルト、黒褐色中粒砂混じり細粒砂及び黒褐色シルトである。SP 03から土器片が出土した。

遺構南側にはSP 07、08を検出した。当初、SD 01を挟んで東側の1間×2間（3.6 m×1.6～1.8 m）の掘立柱建物跡と、西側の1間×1間（3.0 m×1.6～1.8 m）の掘立柱建物跡の2つの遺構の可能性も考えられたが、SP 07等のピットの形態や深さが他のピットと異なっていることを考慮し、前述したようにSD 01を横断した形態（1間×2間）で報告をする。SP 07から須恵器片が出土した。

**出土遺物** 89は須恵器甕の口縁～頸部で、SP 03から出土した。頸部から口縁に向かって外反し、端面は凹斜面に成形し、外側につまみ出している。頸部中央には強い稜が入り、口縁部



第59図 SB03 平・断面図 (S=1/40)



第 60 図 SK10 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

と頸部との境は突帯の鋭いつまみをつけ、口縁部・頸部ともに櫛描波状文が施されている。

**所属時期** 出土遺物のなかで時期が判別できる甕 (89) が田辺編年 (田辺 1966) の T K 208 ~ 23 型式に相当するため、古墳時代中期後葉~末葉 (5 世紀後半~末) である。また、遺構の主軸方位が当該期の竪穴建物跡の主軸方位と同じである。

#### S B 03 (第 59 図)

調査区南側中央 (D2 工区)、S H 12 の北東で確認した 1 間×2 間又は 1 間×1 間 (2.6 m×2.4 m) の掘立柱建物跡である。第 59 図では 1 間×2 間としているが、建物の規模から 1 間×1 間である可能性もある。主軸方位は N 1° W である。柱穴底面の高さは 14.72 ~ 14.90 m で、埋土は黒色シルト及び黒色細粒砂混じりシルトである。S P 02、03 から土器片が出土した。

**所属時期** 周辺状況と主軸方位から、古墳時代中期後半~後期初頭の遺構と考えられる。

### ③土坑

#### S K 10 (第 60 図)

調査区南東側 (C 工区)、S H 10 の北で検出した土坑である。平面形態は円形状で、長短軸約 0.27 m、深さ約 0.18 m である。断面は楕円形状で、埋土は黒褐色シルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器片・土師器片が出土した。

**出土遺物** 90 は土師器甕の口縁~胴部である。胴部は球体で外側に張り出し、口縁部はくの字状に大きく屈曲している。端部は外方に向き、ナデでコ字に成形する。また、口縁部と胴部には黒斑がみられる。

**所属時期** 出土遺物 (90) の特徴から、森原氏の古墳時代後半期土器様相の III ~ IV 期にあたり (森原 2017)、T K 23 ~ M T 15 型式併行に該当することから、古墳時代中期後半~後期初頭である。

#### ④包含層 (第 61・62 図)

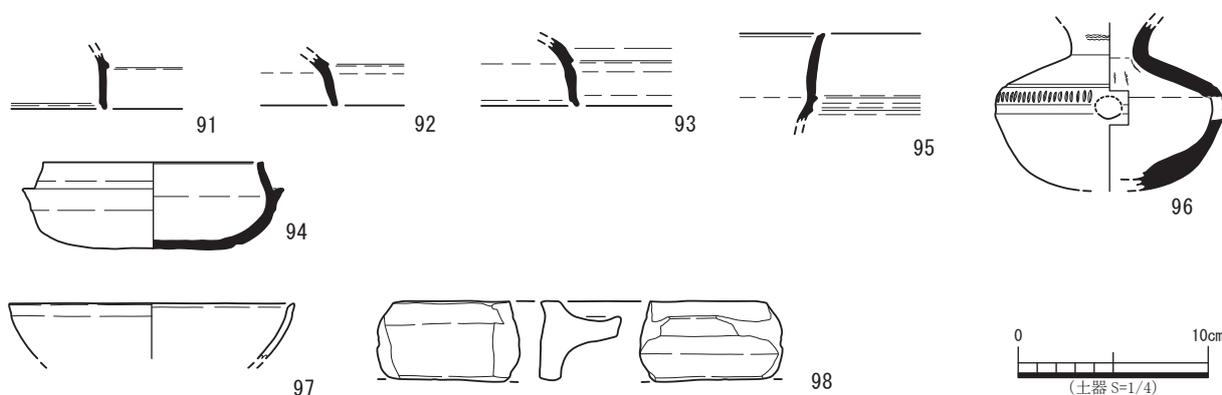
包含層から出土した当該期の遺物は、調査区北西部、北東部から南側にかけて集中する。

91 ~ 93 は杯蓋の口縁部である。91 は口縁部と天井部境に強い稜線が入る。口縁部は端部

に向かって垂直に延び、端部は凹斜面に成形する。92 は口縁部と天井部境に弱い稜線が入る。口縁部はやや内湾しながら端部に向かって垂直に延び、端部はコ字に成形し端面は平坦である。93 は口縁部と天井部境に弱い稜線が入り、稜の下部は強くナデられる。口縁部は緩やかに内湾しながら端部に向かって垂直に延び、端部に近づくと外反する。端部は外側に向かってつまみ上げ、段を付けている。周辺では萩前・一本木遺跡 I の 493 がこれに類似する（高松市教委 2017）。94 は杯身である。口縁部と受部との境は強くナデられ、明瞭な溝が形作られている。口縁部の立ち上がりも長く、端部をシャープに仕上げ、やや凹斜面になっている。周辺では太田下・須川遺跡（香川県教委 1995）の 1013 がこれに類似する。包含層で出土した杯身・杯蓋は、口縁部の立ち上がりや端部の特徴から、田辺編年（1966）の T K 23 型式に相当する。

95、96 は甗である。95 は口縁部で、口縁部と頸部の境に突帯が 2 条施されている。口縁部にむかって緩やかに外反し、端部はやや凹斜面に成形し、外側につまみ出している。96 も甗で、頸部と胴部の境はくの字状に屈曲し、肩は大きく張り出し、イチヂク形に成形されている。体部の最も張り出した部分には刻み目が施され、体部中央には強い稜が入る。頸部には櫛描波状文が施され、口縁に向かって外反していく。肩の張り出し具合や文様の特徴から、田辺編年（田辺 1966）の T K 208 ～ T K 23 型式に相当する。

97 は鉢の口縁部である。薄く成形され、端部は外側につまみあげる。98 は移動式カマドの上部である。上面と底面は平らに成形され、中央部は外側に張り出し、端部はつまみ上げてコ字に成形する。張り出し部分下部には煤が付着している。



第 61 図 包含層出土遺物（古墳時代中期後半）（S=1/4）

## 参考文献

- 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編 2011 『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』，同成社  
 大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 『年代のものさし—陶器の須恵器—』，大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40  
 香川県教育委員会編 1995 『太田下・須川遺跡』，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

片桐孝浩 2002 「須恵器出現前後の土師器について」『極端遺跡』, 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・  
日本道路公団・香川県土木部

高松市教育委員会編 2009 『太田下・須川遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 124 集

高松市教育委員会編 2014 『太田下・須川遺跡』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 151 集

高松市教育委員会編 2017 『萩前・一本木遺跡Ⅰ』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 177 集

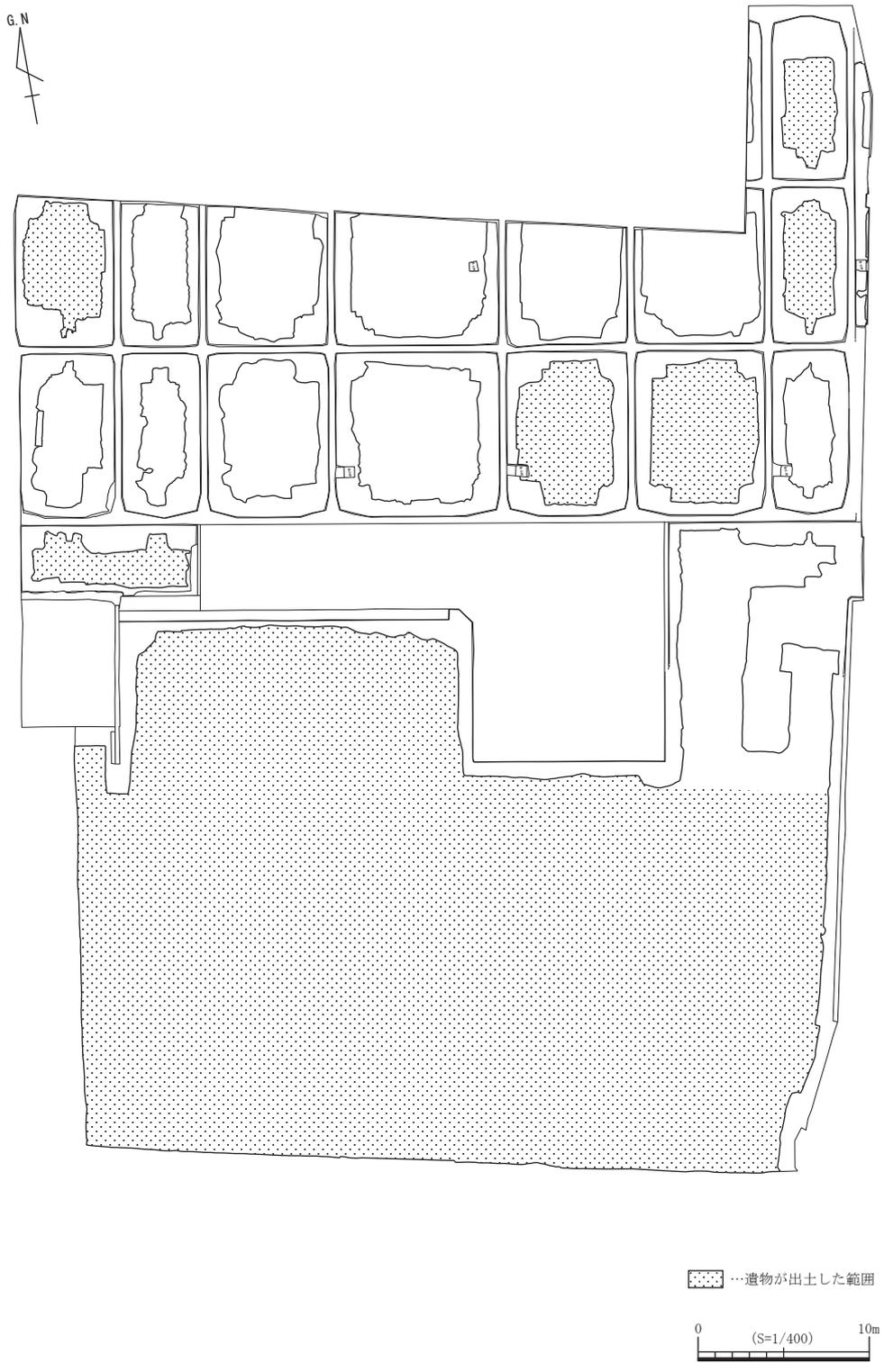
高松市教育委員会編 2018 『太田下・須川遺跡 (第 4 次調査)』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 196 集

田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』, 平安学園考古学クラブ

田辺昭三 1981 『須恵器大成』, 角川書店

中村浩 2001 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』, 芙蓉書房出版

森原奈々 2017 「萩前・一本木遺跡における古墳時代後半期の遺物諸相」『萩前・一本木遺跡Ⅰ』, 高松市埋蔵文化財調査報告第 177 集



第 62 図 包含層の遺物（古墳時代中期後半）出土範囲（S=1/400）

## (5) 古代以降・時期不明

本調査においては時期が特定できなかった遺構について述べる。本項で述べる遺構の中には、詳細な時期が特定できなかった弥生時代又は古墳時代の遺構も含まれる（第64図）。

### ① 竪穴建物跡

#### SH 13（第63図）

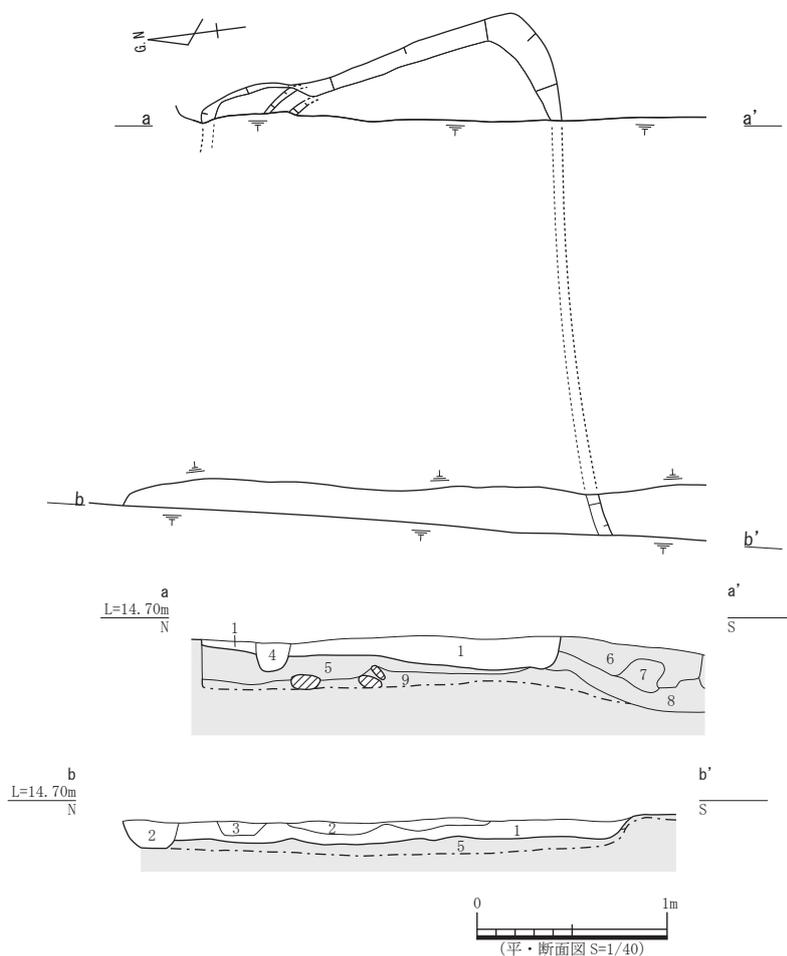
調査区最北端東側（A1-2、3工区）で検出した竪穴建物跡である。建物基礎の攪乱により、南西部分のみ残存する。東西長2.8m以上、南北長1.8m以上で、主軸方位はN 8° Wである。遺構検出高は約14.60mで、掘方底面の高さは約14.42～14.52mである。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は、にぶい黄色ブロックを含む黒褐色細粒砂混じりシルト、黒褐色シルト、黒色シルトで構成される。遺構北東隅で周壁溝を確認した。西側壁面でも周壁溝とみられる黒褐色シルト層がみられるものの、平面では確認できなかった。遺物は土器片のみ出土し、時期の判別できるものはなかった。

所属時期 不明である。

#### SH 14（第65図）

調査区北側中央（B5工区）、SX 02の南で検出した竪穴建物跡と想定される遺構である。建物基礎の攪乱により、北部分のみ残存する。東西長1.5m以上、南北長1.0m以上で、主軸方位はW 32° Nである。遺構検出高は約14.60mで、掘方底面の高さは約14.50mである。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は、地山ブロックを含む黒色細粒砂混じりシルトで構成される。遺物は土器片のみ出土し、時期の判別できるものはなかった。

所属時期 不明である。

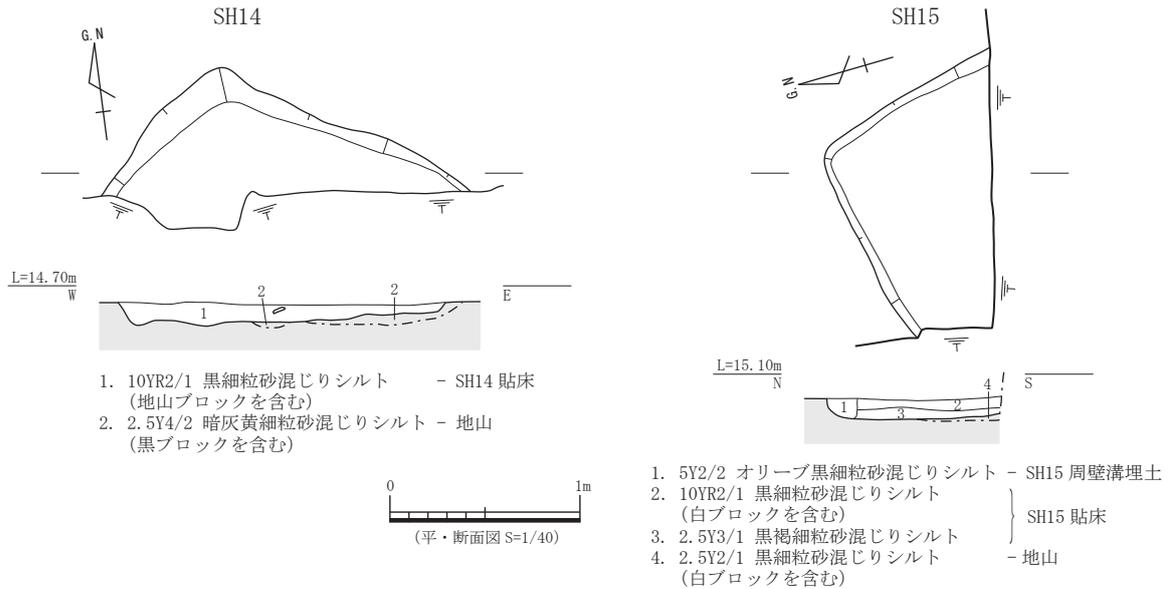


- |                                      |              |
|--------------------------------------|--------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色細粒砂混じりシルト（にぶい黄ブロックを含む） | } SH13 貼床    |
| 2. 10YR3/1 黒褐色シルト                    |              |
| 3. 10YR2/1 黒シルト                      |              |
| 4. 5Y3/2 オリーブ黒細粒砂混じりシルト              | - SH13 周壁溝埋土 |
| 5. 5Y4/3 暗オリーブ細粒砂混じりシルト              |              |
| 6. 10YR3/2 黒褐色中粒砂混じり細粒砂              | } 地山         |
| 7. 2.5Y2/1 黒細粒砂                      |              |
| 8. 5Y2/2 オリーブ黒細粒砂（φ1～2cm程度の礫を多量に含む）  |              |
| 9. 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂（φ5～10cm程度の礫を含む）   |              |

第63図 SH13 平・断面図（S=1/40）



第 64 図 時期不明遺構分布図 (S=1/200)



第 65 図 SH14・15 平・断面図 (S=1/40)

### SH 15 (第 65 図)

調査区南西端 (D2 工区)、SH 06 の南西で検出した竪穴建物跡と想定される遺構である。北西端部のみ検出し、残りは調査区外である。東西長 1.2 m 以上、南北長 1.0 m 以上で、主軸方位は N 16° W である。遺構検出高は約 14.95 m で、掘方底面の高さは約 14.85 m である。床面は検出されず、貼床のみ検出した。貼床は、黒色細粒砂混じりシルトで構成される。遺物は土器片のみ出土し、時期の判別できるものはなかった。壁面では周壁溝とみられるオリーブ黒色細粒砂混じりシルト層がみられるものの、平面では確認できなかった。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 主軸方位から古墳時代中期後半の可能性がある。

### ② 掘立柱建物跡

#### SB 04 (第 66 図)

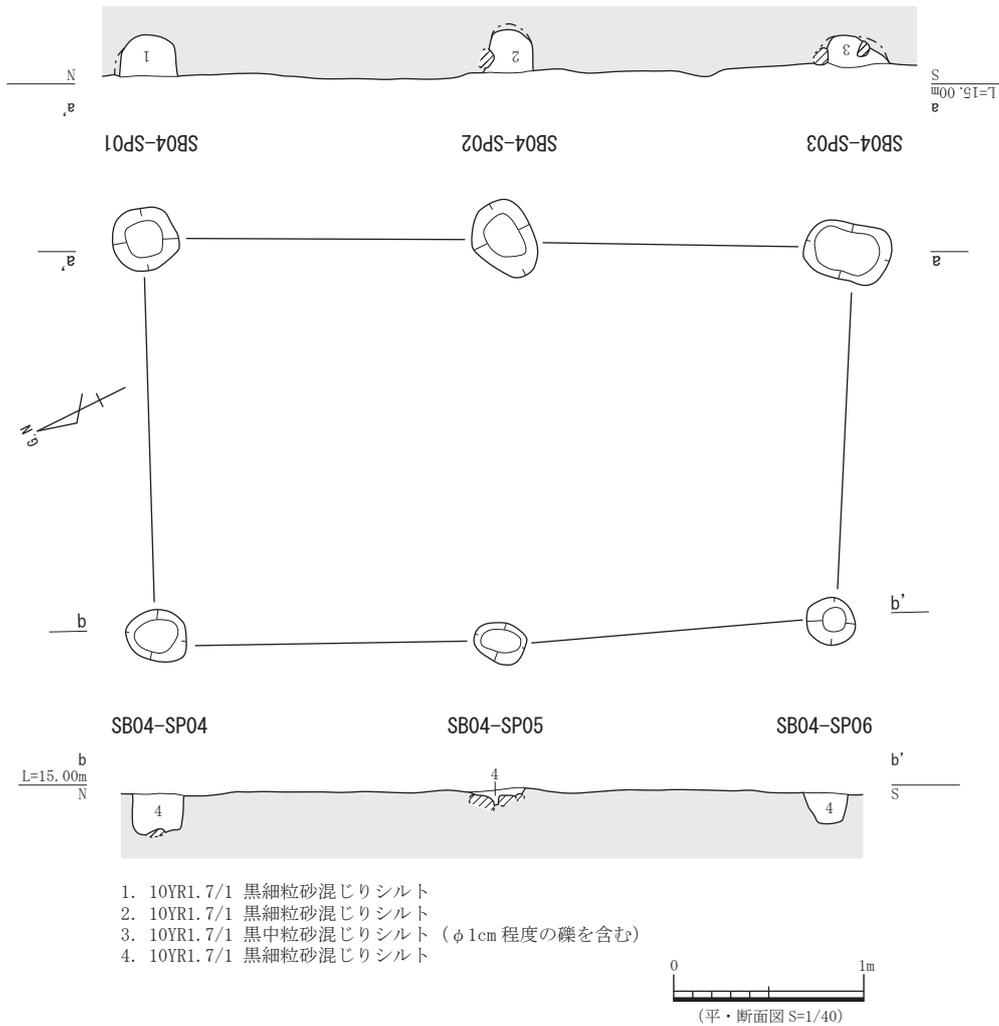
調査区南側中央 (D2 工区)、SD 01、SB 02 の西で確認した 1 間×2 間 (2.0 m×3.6 m) の掘立柱建物跡である。主軸方位は N 29.5° E である。柱穴底面の高さは 14.72～14.90 m で、埋土は黒色中粒砂～細粒砂混じりシルトである。SP 01～03、06 から土器片が出土したが、時期の判別できるものはなかった。

**所属時期** 不明である。

### ③ 溝

#### SD 06 (第 67 図)

調査区北西側 (A1-4 工区) で検出した東西方向の溝で、幅は約 0.8 m、深さ約 0.06 m である。弥生時代前期の溝である SD 02 を切る。建物基礎の攪乱により削平されているため詳細は不明だが、底面の高さは約 14.58 m である。断面形態は台形状で、埋土は暗褐色ブロックを含む



第 66 図 SB04 平・断面図 (S= 1 /40)

灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の弥生土器片・須恵器片・陶磁器片が出土した。

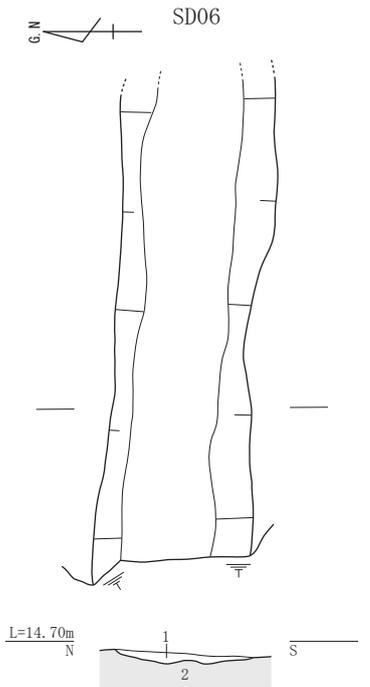
**出土遺物** 99 は弥生時代前期の壺の口縁部である。内面に突帯を貼付する。

**所属時期** 出土遺物に陶磁器片が含まれることから近世である。

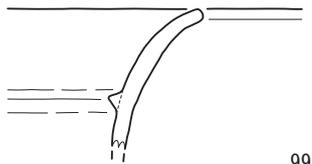
#### SD 07 (第 67 図)

調査区北側 (A2-1 工区) で検出した南西—北東方向の溝で、幅は 1.4 m 以上、深さ約 0.2 m である。建物基礎の攪乱により大きく削平されているためほとんど残存していない。底面の高さは約 14.4 m である。断面形態は半円状で、埋土は黒褐色シルト、灰黄褐色シルト及びにぶい黄褐色シルトである。遺構から土器片が 1 点出土した。

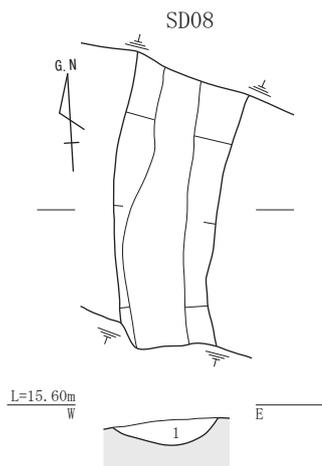
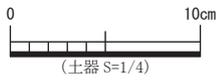
**所属時期** 不明である。



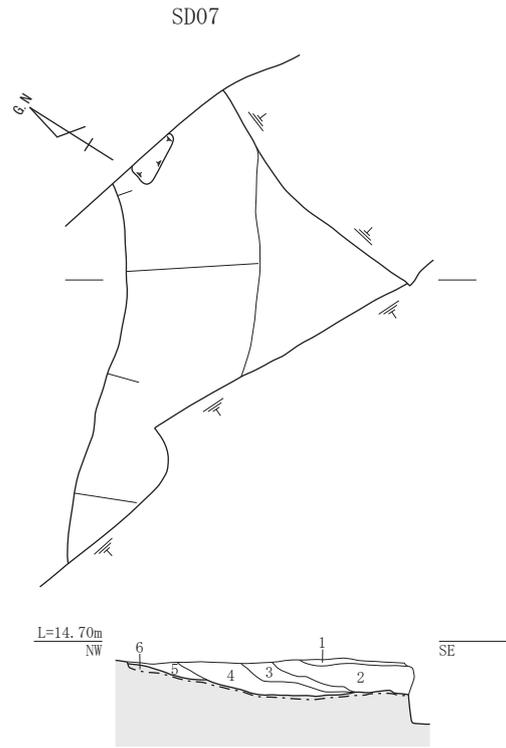
1. 10YR4/2 灰黄褐細粒砂混じりシルト (暗褐ブロックを含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐細粒砂混じりシルト-地山



99

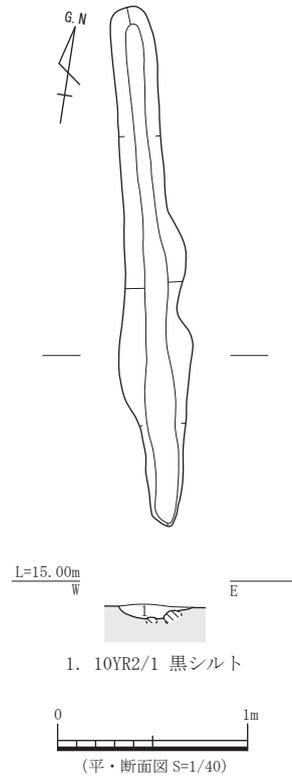


1. 10YR2/2 黒褐中粒砂混じり細粒砂



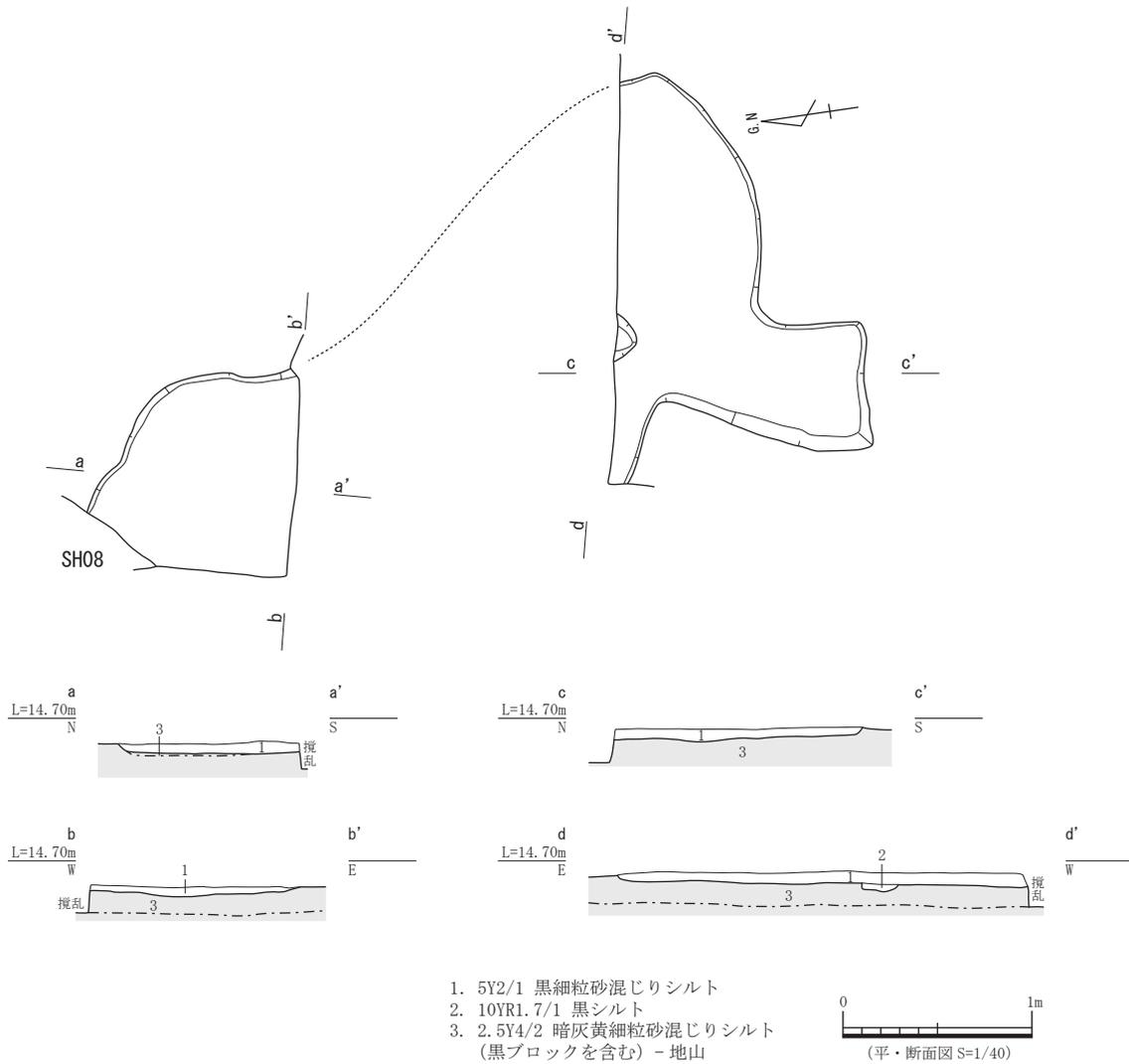
1. 10YR3/1 黒褐シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐シルト
3. 10YR4/3 にぶい黄褐シルト
4. 10YR4/3 にぶい黄褐シルト (粘性高い)
5. 10YR4/2 灰黄褐シルト
6. 2.5Y8/2 灰白シルト (黄ブロック含む)

SD09



1. 10YR2/1 黒シルト

第 67 図 SD06 ~ 09 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)



第 68 図 SX03 平・断面図 (S= 1 /40)

**SD 08 (第 67 図)**

調査区北側 (A2-1 工区) で検出した南北方向の溝で、幅は約 0.56 m、深さ約 0.14 m である。建物基礎の攪乱により大きく削平されている。底面の高さは約 15.38 m である。断面形態は半円状で、埋土は黒褐色中粒砂混じり細粒砂である。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 不明である。

**SD 09 (第 67 図)**

調査区中央やや南側 (D2 工区) で検出した南北方向の溝で、幅は約 0.3 m、深さ約 0.08 m である。底面の高さは約 14.80 m である。断面形態は半円状で、埋土は黒色シルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 不明である。

#### ④ 不明遺構

##### S X 03 (第 68 図)

調査区中央東側 (B1、B3 工区) で検出した不整形の土坑で、S H 08 に切られる。長軸 4.2 m 以上、短軸 2.2 m 以上、深さ約 0.06 m である。中心にピットのような掘り込みがみられる。断面は台形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。遺構からは土器片が数点出土した。

**所属時期** 古墳時代中期後半の遺構である S H 08 に切られるため、古墳時代中期後半以前である。

#### ⑤ 土坑

##### S K 11 (第 69 図)

調査区北東側 (A1-5 工区)、S H 07 の南で検出した円形の土坑である。長軸約 0.6 m、短軸約 0.5 m、深さ約 0.11 m である。断面は台形状で、埋土は黒褐色中粒砂混じり細粒砂である。遺構からは、土器片、陶磁器片、サヌカイト製剥片が数点出土した。

**所属時期** 出土遺物に陶磁器片が含まれることから近世である。

##### S K 12 (第 69 図)

調査区中央東側 (B1 工区)、S X 03 の南で検出した不整形の土坑である。長軸約 0.56 m、短軸約 0.4 m、深さ約 0.10 m である。断面は台形状で、埋土は黒色シルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 不明である。

##### S K 13 (第 69 図)

調査区北側 (A1-9 工区)、S D 02 の北で検出した不整形の土坑である。遺構南側がピット状に掘られている。長軸 0.6 m 以上、短軸約 0.4 m、深さ約 0.28 m である。断面は台形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルト及び黒褐色細粒砂である。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 不明である。

##### S K 14 (第 69 図)

調査区北側 (A1-9 工区)、S K 13 の西で検出した楕円形の土坑である。建物基礎の攪乱によって遺構北側が半分壊されている。長軸約 0.68 m、短軸約 0.6 m、深さ約 0.04 m である。断面は台形状で、埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 不明である。

##### S K 15 (第 69 図)

調査区北側 (A1-9 工区)、S K 14 の西で検出した円形の土坑である。建物基礎の攪乱によって壊されたが残存している。長軸約 0.4 m、短軸約 0.25 m 以上、深さ約 0.26 m である。断面は半円状で、埋土は黄色ブロックを含む黒色シルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 不明である。

#### **S K 16** (第 69 図)

調査区北側 (A2-4 工区)、S H 02 の北で検出した楕円形の土坑である。長軸約 1.54 m、短軸約 0.94 m、深さ約 0.12 m である。断面は台形状で、埋土は黒色細粒砂である。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の土器片が出土した。

**所属時期** 不明である。

#### **S K 17** (第 69 図)

調査区北側 (A1-7 工区)、S H 01 の南で検出した円形の土坑である。S H 09 を切る。長短軸約 0.65 m、深さ約 0.12 m である。断面は台形状で、埋土はオリーブ黒色シルトである。遺構からは、ビニール袋 1 袋程度の土器片が出土した。

**出土遺物** 100 は弥生時代の高杯脚部である。

**所属時期** 古墳時代中期後半の遺構である S H 09 を切るため、古墳時代中期後半以降である。

#### **S K 18** (第 69 図)

調査区北西側 (D1-3 工区)、S K 08 の南東で検出した楕円形の土坑である。建物基礎の攪乱により遺構北東側が半分壊されている。長軸 0.34 m 以上、短軸約 0.4 m、深さ 0.12 m 以上である。断面は半円状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。遺構から土器片が数点出土した。

**所属時期** 不明である。

#### **S K 19** (第 70 図)

調査区北西側 (D1-3 工区)、S K 18 の南で検出した楕円形の土坑である。建物基礎の攪乱により遺構東側が一部壊されている。長軸 1.88 m 以上、短軸約 0.8 m、深さ約 0.28 m である。断面は台形状で、埋土は黒色シルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 不明である。

#### **S K 20** (第 70 図)

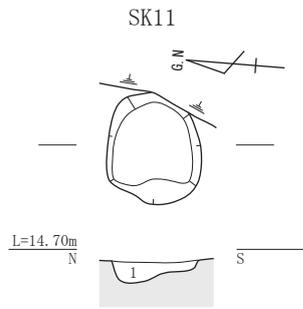
調査区北西側 (D1-3 工区)、S D 05 の東で検出した楕円形の土坑である。S D 05 に切られる。長軸 0.81 m 以上、短軸約 0.68 m、深さ約 0.27 m である。断面は台形状で、埋土は黒褐色シルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 古墳時代前期後半の遺構である S D 05 に切られるため、古墳時代前期後半以前である。

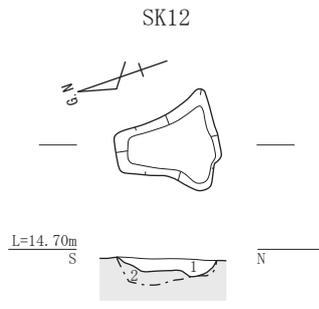
#### **S K 21** (第 70 図)

調査区北西側 (D1-3 工区)、S D 05 の東で検出した楕円形の土坑である。S K 20 に切られる。長軸 1.4 m 以上、短軸約 0.72 m、深さ約 0.24 m である。断面は台形状で、埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

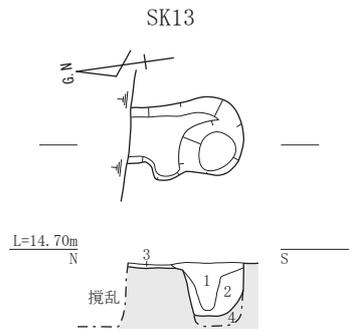
**所属時期** 古墳時代前期後半以前の遺構である S K 20 に切られるため、古墳時代前期後半以



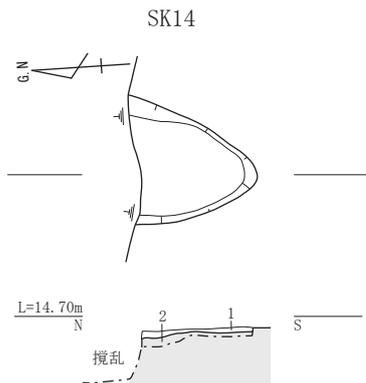
1. 2.5Y3/2 黒褐中粒砂混じり細粒砂 (黒褐ブロック含む)



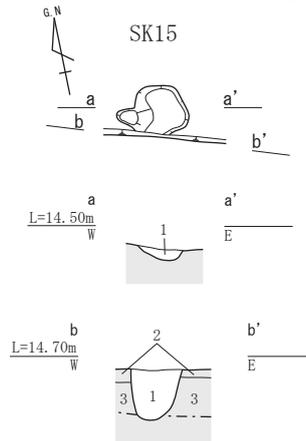
1. 2.5Y2/1 黒シルト
2. 2.5Y4/1 黄灰細粒砂混じりシルト (黒ブロック、φ3cm程度の礫を含む) - 地山



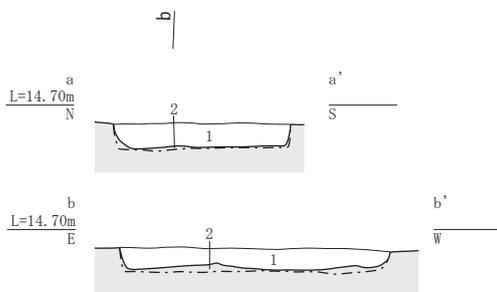
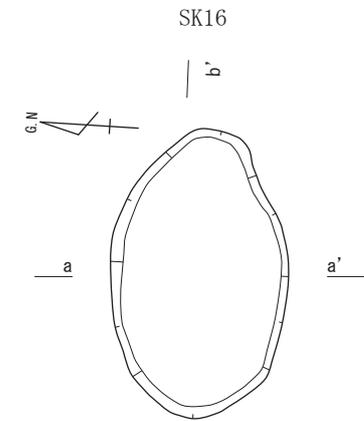
1. 10YR2/1 黒細粒砂混じりシルト (円礫含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐細粒砂
3. 2.5Y2/1 黒細粒砂混じりシルト
4. 7.5Y5/1 灰細粒砂 (φ3cm程度の礫を多量に含む) - 地山



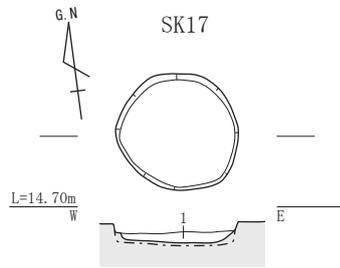
1. 10YR4/2 灰黄褐細粒砂混じりシルト
2. 7.5Y5/1 灰シルト (φ3cm程度の礫を多量に含む) - 地山



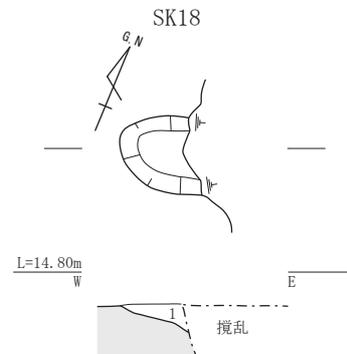
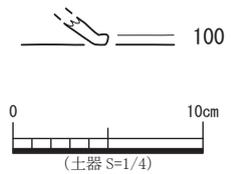
1. 10YR1.7/1 黒シルト (黄ブロック含む)
2. 10YR2/1 黒シルト
3. 7.5YR3/2 黒褐シルト
4. 10YR7/1 灰白中粒砂混じりシルト



1. 2.5Y2/1 黒細粒砂
2. 10YR2/2 黒褐中粒砂混じり細粒砂 (φ1cm程度の礫を含む) - 地山



1. 5Y2/2 オリーブ黒シルト



1. 10YR2/1 黒細粒砂混じりシルト

第 69 図 SK11 ~ 18 平・断面図 (S=1/40)・出土遺物 (S=1/4)

前である。

#### **S K 22** (第70図)

調査区北西側 (D1-3 工区)、S D 05 の西で検出した楕円形の土坑である。遺構西側は調査区外である。中心部が円形状に一段深くなる。長軸 0.72 m 以上、短軸約 1.0 m、深さ約 0.34 m である。断面は半円状で、埋土は黒色シルト及び黒褐色細粒砂混じりシルトである。遺構から遺物は出土しなかった。

**所属時期** 不明である。

#### **S K 23** (第70図)

調査区南側 (D2 工区)、S K 09 の北西で検出した不整形の土坑である。S H 12 に切られる。長軸約 1.55 m、短軸 1.0 m 以上、深さ約 0.06 m である。断面は台形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。遺構から土器片が数点出土した。

**所属時期** 古墳時代中期後半の遺構である S H 12 に切られるため、古墳時代中期後半以前である。

#### **S K 24** (第71図)

調査区南西側 (D2 工区)、S H 06 の西で検出した不整形の土坑である。長軸約 2.88 m、短軸約 1.84 m、深さ約 0.42 m である。断面は台形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。遺構から土器片が数点出土した。

**所属時期** 不明である。

#### **S K 25** (第71図)

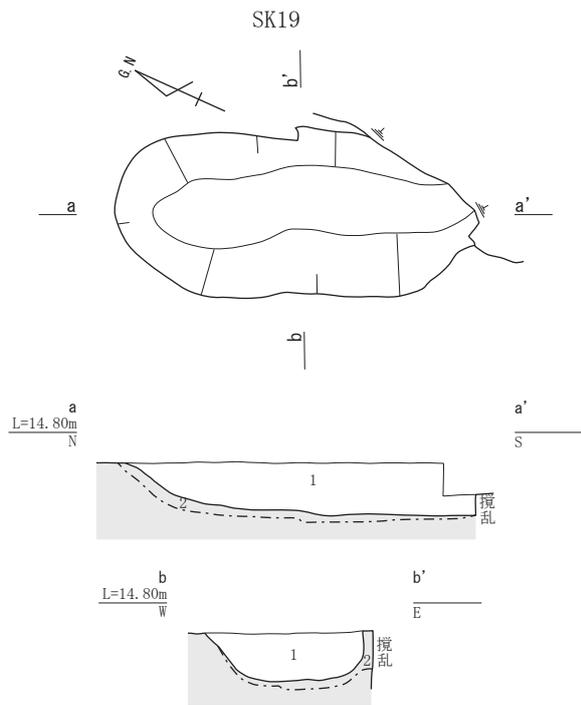
調査区南西側 (D2 工区)、S K 24 の西で検出した円形の土坑である。遺構西側は調査区外である。遺構北西部に土坑が 1 基ある。長軸約 1.90 m、短軸 0.88 m 以上、深さ約 0.06 m である。断面は台形状で、埋土は黒色細粒砂混じりシルトである。遺構から土器片が数点出土した。

**所属時期** 不明である。

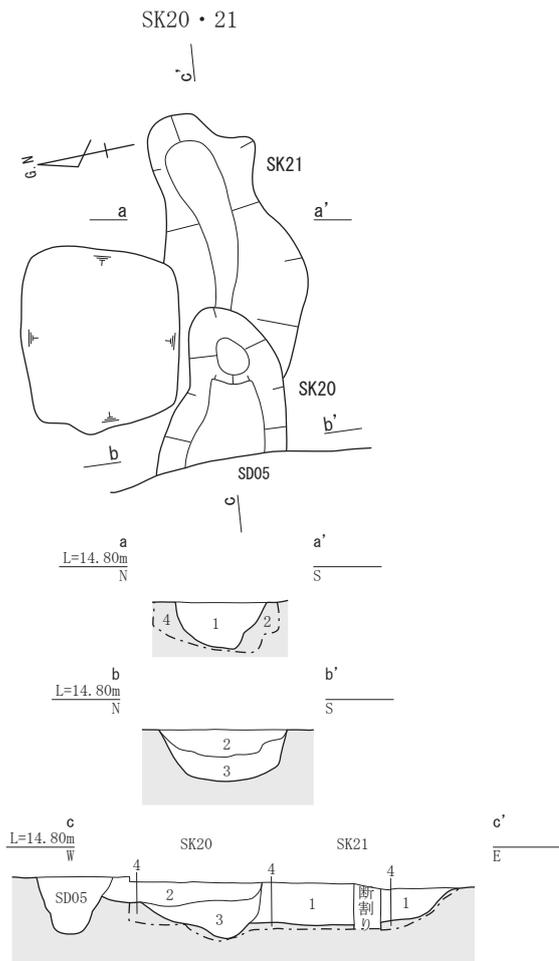
#### **⑥ 包含層** (第72図)

包含層から出土した古代～中世の遺物は、調査区南側及び北西側に集中する。

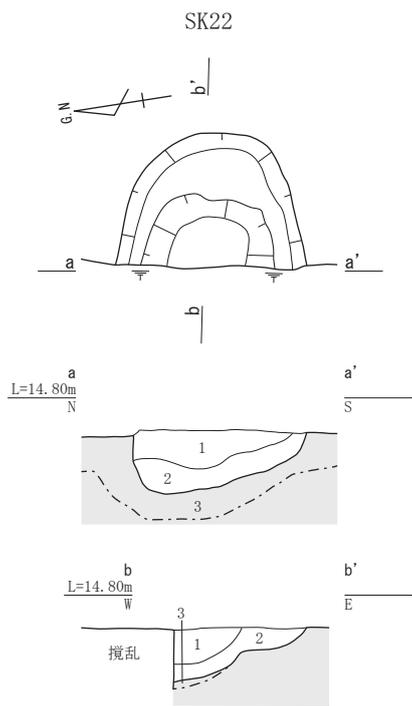
101 は須恵質杯の口縁部である。102 は須恵質杯の底部である。高台が付着する。101、102 は 8～9 世紀の所産と考えられる。103 は青磁碗の口縁部である。外面には鎬蓮弁文がみられる。104 は足釜の脚部である。103、104 は中世の所産である。



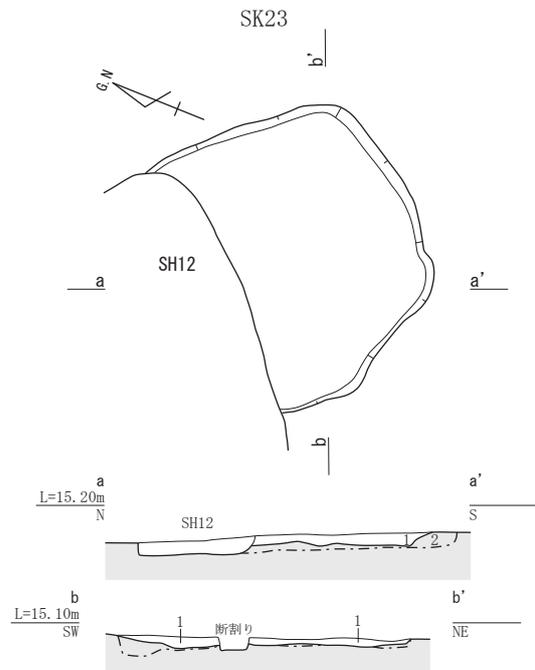
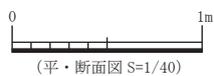
1. 10YR2/1 黒シルト
2. 10YR2/2 黒褐シルト (粘性高い)



1. 10YR2/2 黒褐細粒砂混じりシルト
2. 2.5Y3/1 黒褐シルト
3. 10YR3/2 黒褐シルト
4. 10YR4/2 灰黄褐細粒砂混じりシルト - 地山

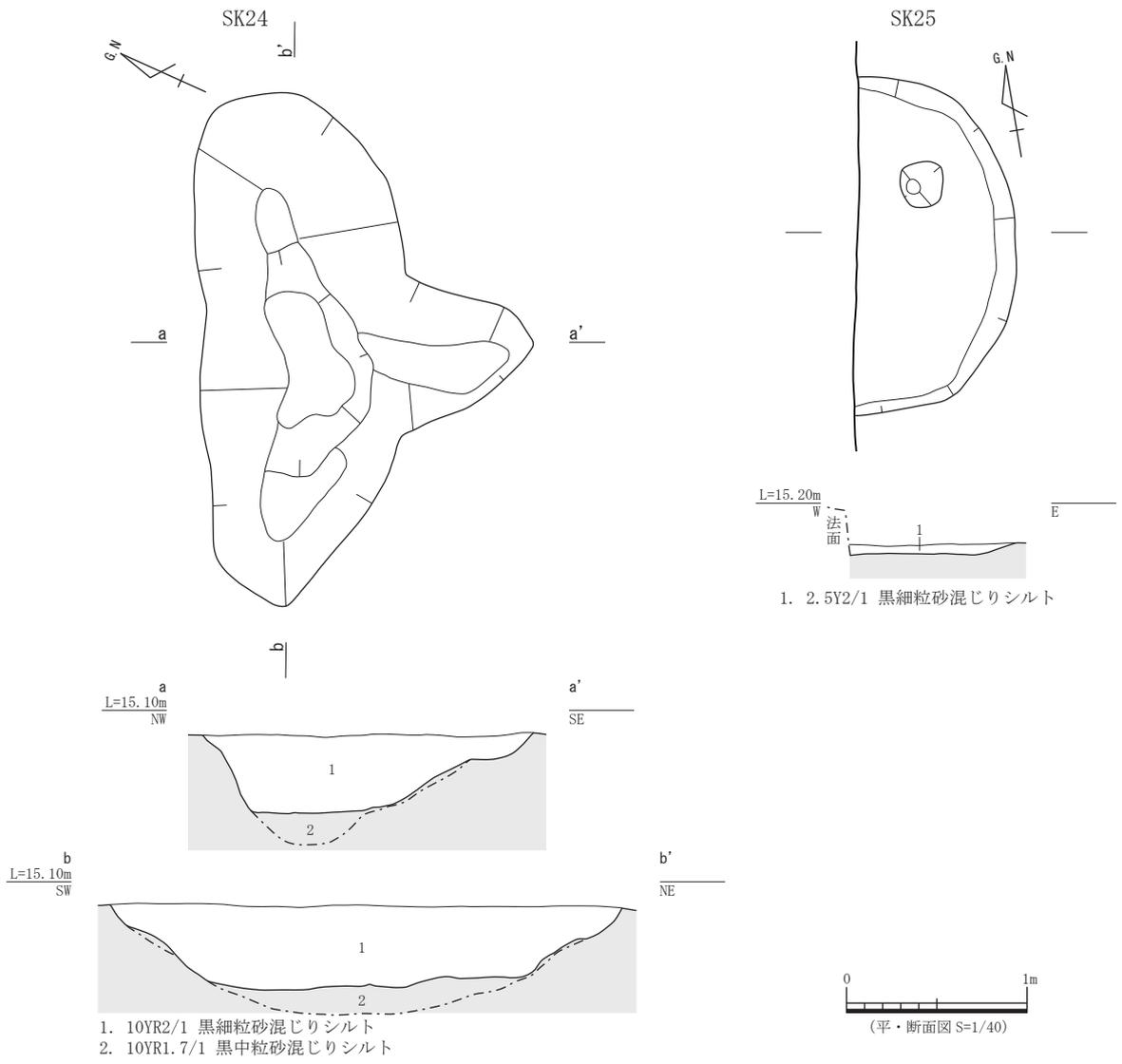


1. 10YR2/1 黒シルト
2. 10YR2/2 黒褐細粒砂混じりシルト
3. 10YR4/2 灰黄褐細粒砂 (黒・黄ブロックを含む) - 地山



1. 10YR2/1 黒細粒砂混じりシルト
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルト (黒ブロックを含む) - 地山

第70図 SK19～23 平・断面図 (S= 1/40)



第 71 図 SK24・25 平・断面図 (S=1/40)



## 第4節 自然科学分析

- (1) 放射性炭素年代測定
- (2) 高松市太田下・須川遺跡出土木製品の樹種調査結果

第1表 自然科学分析対応表

分析 番号	報告書 番号	遺構名 / 層位	器種	法量 (cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
15	W2	SH09-SP03	柱材	[16.0]	[10.2]	[9.5]	
16	W1	SH09-SP02	柱材	[19.4]	[10.2]	[9.6]	
17		SH12-SP04	柱材				表面腐食のため実測はせず、樹種 同定・放射性炭素年代測定のみ依頼

## 放射性炭素年代測定

(株)吉田生物研究所

### 1. はじめに

高松市に位置する太田下・須川遺跡より検出された木製品 3 点について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 2 表 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

第 2 表 測定試料及び処理

遺物番号	試料データ	前処理
No. 15	種類 : 木材 (木柱) 状態 : wet	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0mol/L, 塩酸:1.2mol/L)
No. 16	種類 : 木材 (木柱) 状態 : wet	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0mol/L, 塩酸:1.2mol/L)
No. 17	種類 : 木材 (木柱) 状態 : wet	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0mol/L, 塩酸:1.2mol/L)

### 3. 結果

第 3 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、および半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期 5730  $\pm$  40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal14.2 (較正曲線データ : IntCal13) を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCal1 の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、

同様に2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

第3表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

遺物番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
No. 15	-27.93 $\pm$ 0.20	1575 $\pm$ 21	1575 $\pm$ 20	435-465 cal AD (27.17%) 475-500 cal AD (23.53%) 508-516 cal AD ( 6.04%) 530-543 cal AD (11.53%)	428-551 cal AD (95.45%)
No. 16	-29.19 $\pm$ 0.17	1606 $\pm$ 21	1605 $\pm$ 20	421-438 cal AD (16.76%) 461-477 cal AD (16.30%) 497-534 cal AD (35.21%)	418-484 cal AD (52.77%) 487-538 cal AD (42.68%)
No. 17	-28.45 $\pm$ 0.15	1609 $\pm$ 19	1610 $\pm$ 20	420-437 cal AD (18.50%) 462-476 cal AD (15.15%) 498-533 cal AD (34.62%)	417-482 cal AD (53.13%) 488-538 cal AD (42.32%)

## 参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代編集委員会編「日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代」:3-20, 日本第四紀学会

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

## 高松市太田下・須川遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

### 1. 試料

試料は高松市に所在する太田下・須川遺跡から出土した木製品 3 点である。

### 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

### 3. 結果

樹種同定結果（広葉樹 2 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

#### 1) ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* Endlicher sect. *Cerris*)

(遺物 No. 17)

(写真 No. 17)

環孔材である。木口では大道管（ $\sim 430 \mu\text{m}$ ）が年輪界にそって 1～数列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。クヌギ節はクヌギ、アベマキがあり、本州(岩手、山形以南)、四国、九州、琉球に分布する。

#### 2) アワブキ科アワブキ属 (*Meliosma* sp.)

(遺物 No. 15, 16)

(写真 No. 15, 16)

散孔材である。木口では中庸な道管（ $\sim 130 \mu\text{m}$ ）が、単独ないし柔細胞を間に挟んで 2～4 個放射方向に複合して分布している。幅の広い放射組織が幾筋もある。柾目では道管は階段穿孔（バー少数）を持つ。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は 1～4 細胞列、高さ $\sim 2.5\text{mm}$ からなる。アワブキ属はヤマビワ、アワブキ等があり、本州、四国、九州、琉球に分布する。

## 参考文献

- 林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所 (1991)
- 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所 (1999)
- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)
- 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 (1979)
- 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」 (1985)
- 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」 (1993)

## 使用顕微鏡

Nikon DS-Fi1

第 4 表 高松市太田下・須川遺跡出土木製品同定表

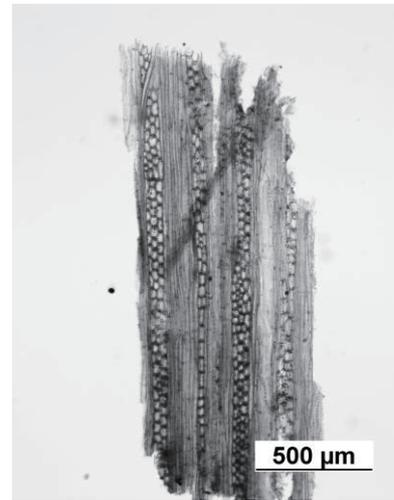
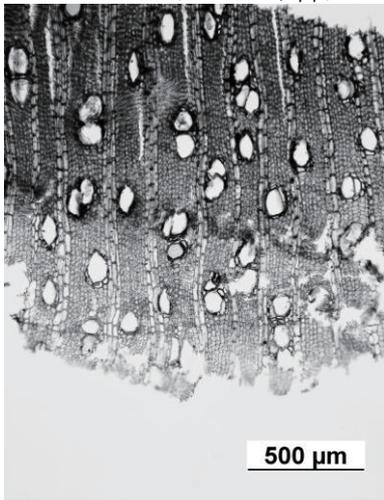
No.	器種	樹種
15	木柱	アワブキ科アワブキ属
16	木柱	アワブキ科アワブキ属
17	木柱	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節



No-15 木口  
アワブキ科アワブキ属

柁目

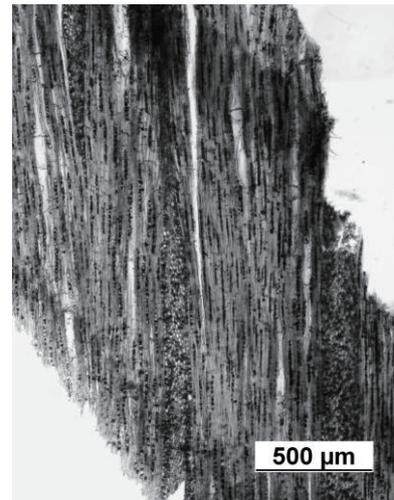
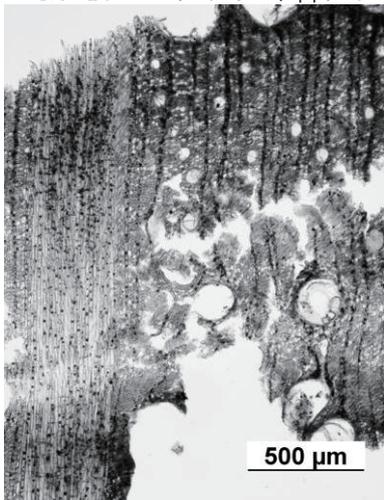
板目



No-16 木口  
アワブキ科アワブキ属

柁目

板目



No-17 木口  
ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節

柁目

板目

## 第IV章 まとめ

### (1) 弥生時代前期 (第73図)

弥生時代前期前半の遺構は溝1条(SD01)を検出した。周辺では、太田下・須川遺跡1次調査SR01から突帯文土器の甕の口縁が、上天神遺跡6区SR01から浅鉢が出土している。また、上天神遺跡4区SD07下層及びSD17下層から前期前半の突帯文土器がまとまって出土しており、当該期の遺構であることが確認されている。

弥生時代前期後半の遺構は溝3条、土坑5基を検出した。周辺では、太田下・須川遺跡1次調査SR02において弥生時代前期後半から後期後半までの各時期の土器が出土している。また、上天神遺跡1区SD09は弥生時代前期後半の遺構であることが確認されている。

本調査区においても竪穴建物跡など集落に関連する遺構は確認されなかったが、周辺の出土遺構などの状況を考えると近隣に集落があったことが窺われる。

### (2) 弥生時代後期～古墳時代前期 (第74図)

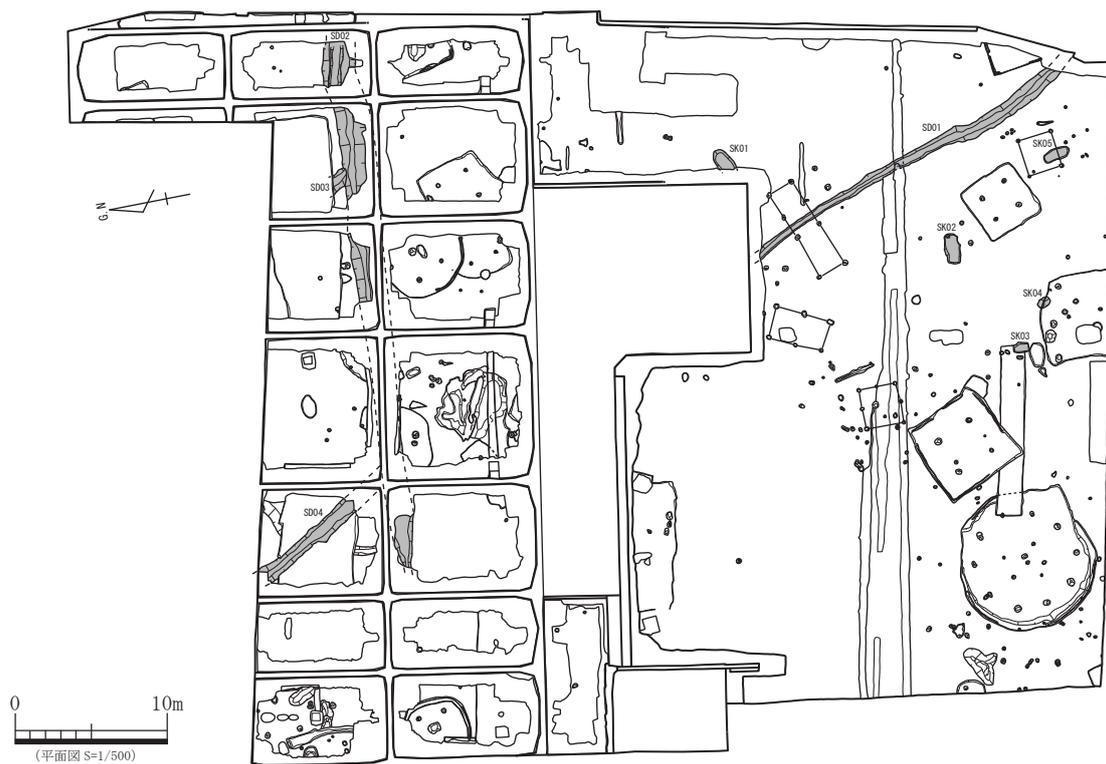
弥生時代後期前葉～中葉の遺構は竪穴建物跡6棟を検出した。太田下・須川遺跡と上天神遺跡では、これまで後期初頭から前半にかけての集落跡が確認されている。本調査区ではこれらに後続する時期の遺構が確認され、集落が後期中葉まで継続したことが明らかになった。また、これまでの調査で東西の集落の広がりには明らかになっていたが、南北の集落の広がりには不明であり、北側に集落が広がるようになったことは成果である。本調査は太田下・須川遺跡を含む集落の時間的・空間的広がり的一端を明らかにしたが、周辺の流路や溝からは後期後半の土器が出土していることから、後期後半まで集落が継続している可能性も考えられる。

調査区内では、床面積が約65㎡の大型の竪穴建物跡(SH06)を確認した。弥生時代後期の大型竪穴建物跡は、下川津遺跡(SHⅡ01:約55㎡)や川津一ノ又遺跡Ⅰ(SH05:約57㎡)でもみられるが、その役割については不明である。今後検討したい。

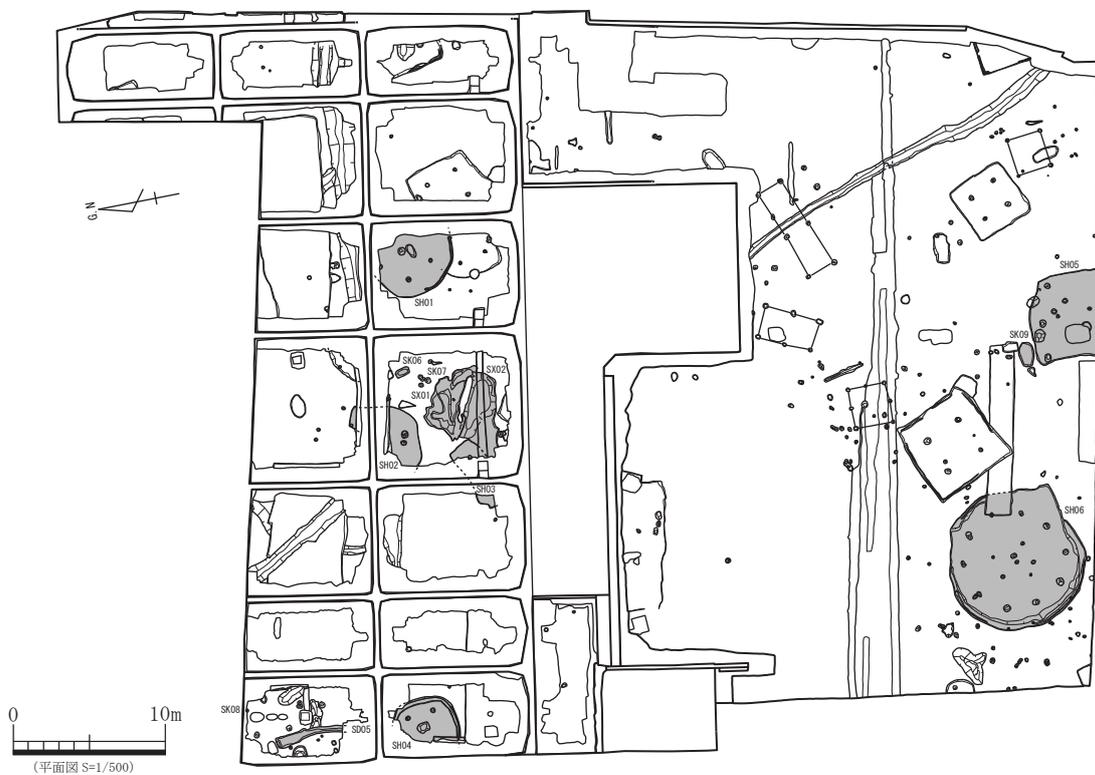
古墳時代前期後半の遺構も不明遺構2基等を検出した。これらの遺構がどのような契機によって築造されたかは不明だが、高松平野であまり遺構が検出されていない古墳時代前期後半の遺構が認められたことは、太田下・須川遺跡周辺の土地利用の歴史を考える上で興味深く、今後周辺で集落が検出される可能性が高い。

### (3) 古墳時代中期後半～後期初頭 (第75図)

検出した遺構は竪穴建物跡6棟、掘立柱建物跡3棟、土坑1基であった。主に調査地北東側、



第73図 弥生時代前期前半～前期後半遺構分布図 (S=1/500)



第74図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構分布図 (S=1/500)

南側を中心に分布し、出土遺物は田辺編年（田辺 1966）のTK 208～TK 47 型式のものが多く見られた。本調査区で検出された竪穴建物跡は、これまでの太田下・須川遺跡の調査で確認された竪穴建物跡同様、大きさが約4～5 m四方の隅丸方形で、主柱穴が4基のものが多く検出された。さらにSH 09 内でSK 01 が検出され、遺物の出土状況から萩前・一本木遺跡のカマド遺構と同様の性質を持ち（高松市教委編 2017）、SK 01 もカマド遺構の可能性が考えられる。

本調査区の前古墳時代中期後半～後期初頭の遺構、時期不明遺構の主軸方位に焦点を当てると、大半の遺構が西側1°～25°の範囲に収まり、同時期の遺構であることが分かる（第77図1）。周辺では太田下・須川遺跡第1次調査（香川県教委編 1995）、太田下・須川遺跡第4次調査（高松市教委編 2018）で前古墳時代中期後半の遺構が確認されている。これらの遺構の主軸方位を見てみると、本調査区と同様遺構の大半が西側を示し、7.5°～37°の範囲に収まっていることから、同じ集落の可能性が高い。（第77図2）。

一方第77図2の遺構②は、出土遺物から他の遺構よりも古い時期のものと考えられ、遺構⑬は遺構⑤と切りあい関係にあり、他の遺構よりも新しい時期の遺構である。②や⑬のように主軸方位が東側を示す遺構は、西側を示す遺構とは異なる時期のものであることがわかる。本調査区において主軸方位が東側を示す遺構の時期は不明であったが、第1次調査のように主軸方位の違いによって同時期の遺構の中でも細かい時期決定ができる可能性が挙げられる。

さらに周辺の遺跡として空港跡地遺跡（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編 2002）、萩前・一本木遺跡（高松市教委編 2017）の同時期の遺構の主軸方位を確認した（第77図3・4）。太田下・須川遺跡のように明確な区別はなされなかったものの、西側を示す遺構が多かったことから、さらに細かい区画での確認が必要と考えられる。

いずれにせよ本調査区の前古墳時代中期後半～後期前半の遺構は、主軸方位において第1・4次調査で確認された居住域の一部であり、これまで確認された範囲から北側に広がっていくことが明らかになった。本調査区のさらに北東側、1次調査の南側にも一連の集落が広がる可能性が考えられるため、今後の調査に注目していきたい。

## 参考文献

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』，平安学園考古学クラブ

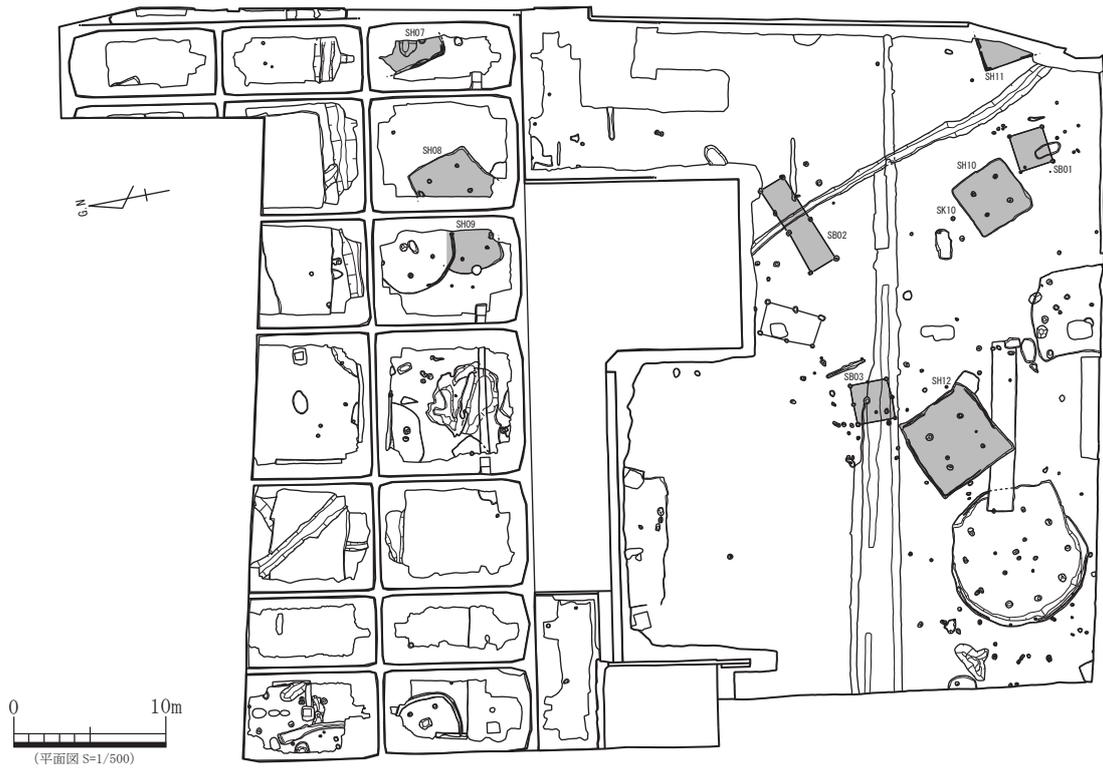
中村浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』，芙蓉書房出版

香川県教育委員会編 1995『太田下・須川遺跡』，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

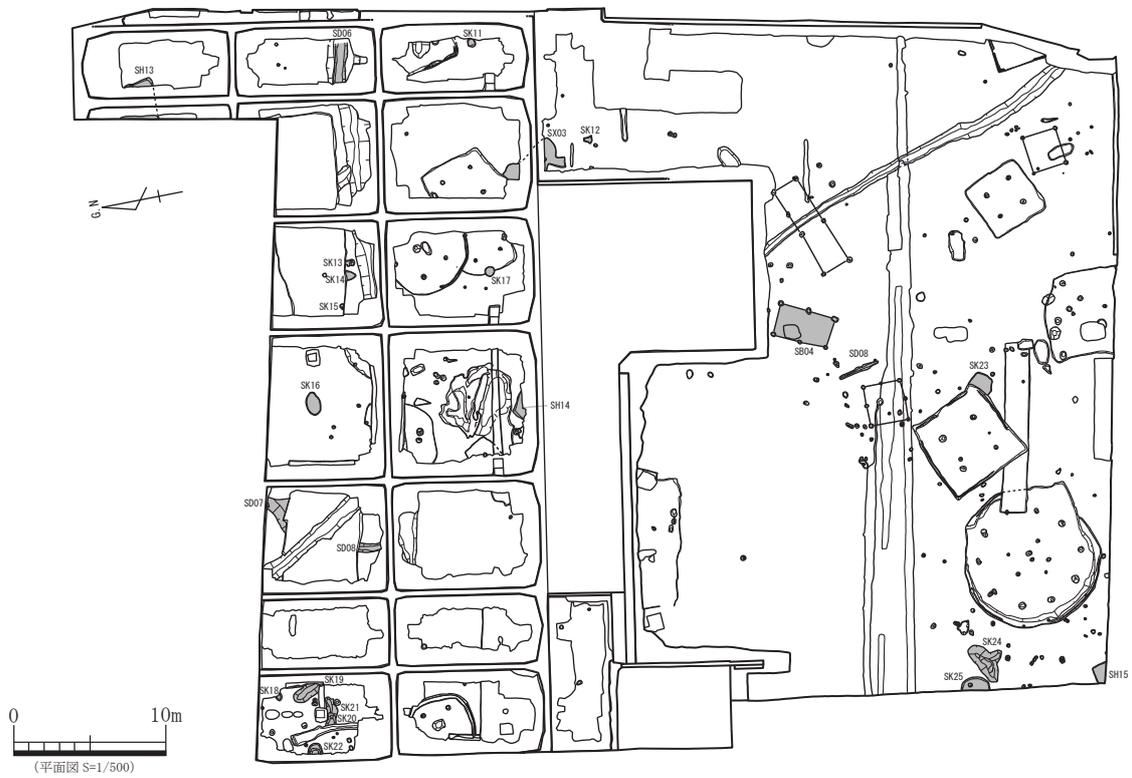
（財）香川県埋蔵文化財調査センター編 2002『空港跡地遺跡Ⅴ』，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
高松市教育委員会編 2014『太田下・須川遺跡』，高松市埋蔵文化財調査報告第151集

高松市教育委員会編 2017『萩前・一本木遺跡Ⅰ』，高松市埋蔵文化財調査報告第177集

高松市教育委員会編 2018『太田下・須川遺跡（第4次調査）』，高松市埋蔵文化財調査報告第196集

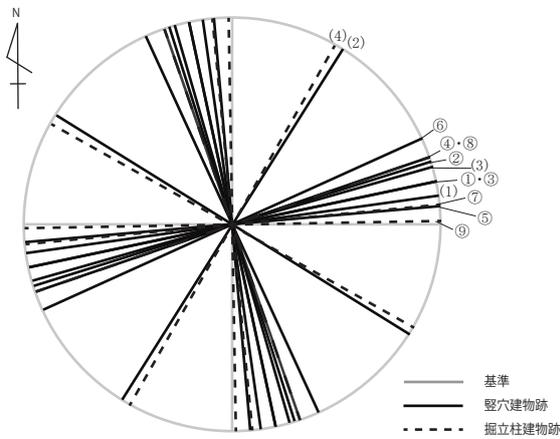


第 75 図 古墳時代中期後半～後期初頭遺構分布図 (S=1/500)



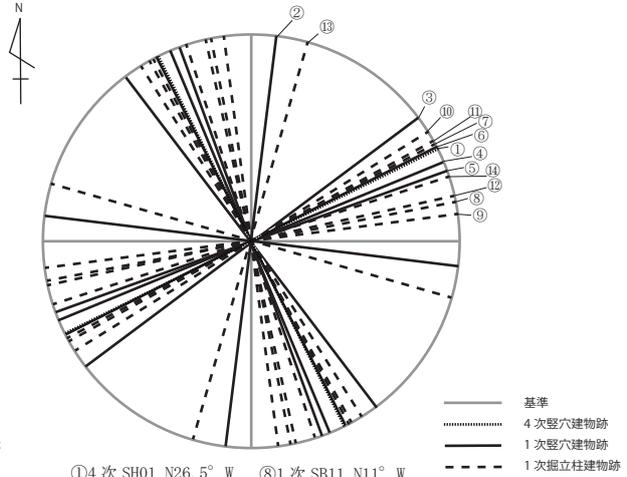
第 76 図 時期不明遺構分布図 (S=1/500)

1. 太田下・須川遺跡第5次調査



- |                |                     |
|----------------|---------------------|
| ①SH07 N12° W   | (1)SH13 N8° W       |
| ②SH08 N17.5° W | (2)SH14 W32° N      |
| ③SH09 N12° W   | (3)SH15 N16° W      |
| ④SH10 N19° W   | (4)SB04 N29.5° E    |
| ⑤SH11 N5° W    |                     |
| ⑥SH12 N24.5° W |                     |
| ⑦SB01 N5.5° W  |                     |
| ⑧SB02 N19° W   | ※(1)～(4)は時期不明遺構を示す。 |
| ⑨SB03 N1° W    |                     |

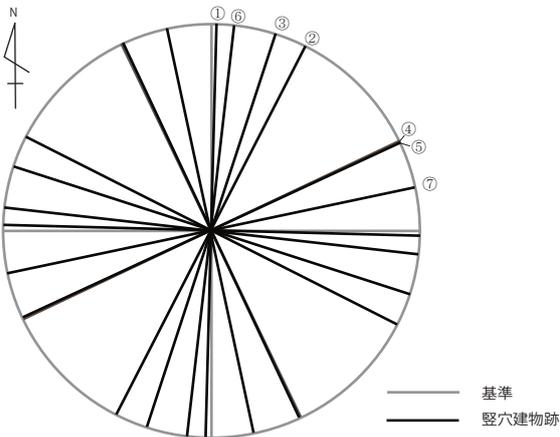
2. 太田下・須川遺跡第1・4次調査



- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| ④4次 SH01 N26.5° W | ⑧1次 SB11 N11° W    |
| ②1次 SH02 N7° E    | ⑨1次 SB12 N7.5° W   |
| ③1次 SH03 N37° W   | ⑩1次 SB13 N32° W    |
| ④1次 SH04 N22.5° W | ⑪1次 SB14 N29° W    |
| ⑤1次 SH05 N20° W   | ⑫1次 SB15 N77.5° E  |
| ⑥1次 SH06 N27° W   | ⑬1次 SB16.17 N16° E |
| ⑦1次 SB10 N62° E   | ⑭1次 SB18.19 N18° W |

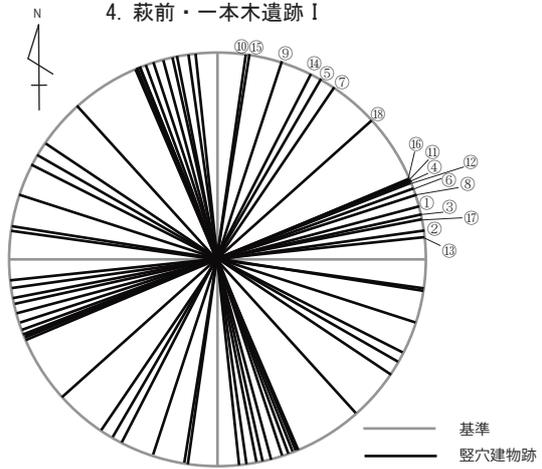
※太田下・須川遺跡第1次調査(香川県教委編1995)の遺構主軸方位については報告書掲載の数字を使用せず、今回新たに算出した数字を使用した。

3. 空港跡地遺跡V



- |                 |
|-----------------|
| ①SHa04 W1.5° N  |
| ②SHa05 N27° E   |
| ③SHa06 N18° E   |
| ④SHa07 N25.5° W |
| ⑤SHa08 N25° W   |
| ⑥SHa09 N6.5° E  |
| ⑦SHa10 E12° N   |

4. 萩前・一本木遺跡I



- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| ①14-SH19 N15° W        | ⑩14-SH25 N8° E          |
| ②27-SH03 N8° W         | ⑪8-SH01 N22.5° W        |
| ③6-SH07 N12.5° W       | ⑫8-SH02 N21.5° W        |
| ④3-SH55・21-SH10 N22° W | ⑬14-SH40 N84° E         |
| ⑤4-SH01 N30° E         | ⑭29-SH30・46-SH12 N27° E |
| ⑥6-SH02 N20° W         | ⑮29-SH20・46-SH35 N9° E  |
| ⑦41-SH02 N34° E        | ⑯8-SH04 N23° W          |
| ⑧6・23-SH06 N18° W      | ⑰28-SH04 N11° W         |
| ⑨14-SH04 N72° W        | ⑱5-SH45 N42° W          |

第77図 古墳時代中期後半～後期前半の遺構主軸方位

第5表 土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名 /層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考	
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
18	1	SD01	弥生土器	深鉢	口縁～ 体部	(32.6)	—	[10.4]	条痕・摩 滅	指オサ エ・摩滅	2.5Y6/3に ぶい黄	2.5Y5/3黄 褐	普	4mm以下の石 英・長石を含む	良	
18	2	SD01	弥生土器	深鉢	口縁部	—	—	[4.8]	摩滅	摩滅	2.5Y6/3に ぶい黄	2.5Y6/3に ぶい黄	普	5mm以下の石 英・長石・赤色 粒を含む	良	刻目突帯
18	3	SD01	弥生土器	深鉢	口縁部	—	—	[2.9]	摩滅	摩滅	2.5Y6/3に ぶい黄	2.5Y6/3に ぶい黄	普	3mm以下の石 英・長石・黒色 粒を含む	良	刻目突帯
18	4	SD01	弥生土器	深鉢	口縁部	—	—	[1.9]	ナデ・摩 滅	摩滅	2.5Y7/2灰 黄	2.5Y7/3浅 黄	普	2mm以下の石 英・長石・赤色 粒を含む	良	刻目突帯
18	5	SD01	弥生土器	深鉢	口縁部	—	—	[1.0]	ナデ・摩 滅	摩滅	2.5Y8/2灰 白	2.5Y7/2灰 黄	普	3mm以下の石 英・長石を含む	良	刻目突帯
18	6	SD01	弥生土器	深鉢	底部	—	(7.8)	[2.1]	ナデ・摩 滅	ナデ・摩 滅	10YR7/3に ぶい黄橙	10YR7/2に ぶい黄橙	普	2mm以下の石 英・長石・黒色 粒を含む	良	
20	7	SD02	弥生土器	壺	口縁部	—	—	[4.7]	横ナデ	ナデ・摩 滅	10YR8/3浅 黄橙	10YR8/3浅 黄橙	普	2mm以下の石 英・長石・赤色 粒を含む	良	
20	8	SD02	弥生土器	壺	肩～胴 部	—	—	[9.2]	摩滅	ナデ	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR6/2灰 黄褐	普	2mm以下の石 英・長石を含む	良	ヘラ描沈線4条
20	9	SD02	弥生土器	甕or壺	底部	—	(9.2)	[6.1]	ナデ	ナデ	10YR7/4に ぶい黄橙	10YR7/4に ぶい黄橙	普	3mm以下の石 英・長石を含む	良	外面:黒斑
20	10	SD02	弥生土器	甕or壺	底部	—	(9.0)	[3.8]	摩滅	摩滅	10YR8/3浅 黄橙	10YR6/2灰 黄褐	普	3mm以下の石 英・長石を含む	良	
22	11	SD04	弥生土器	甕or鉢	口縁部	(22.0)	—	[5.9]	ナデ	摩滅	10YR4/2灰 黄褐	10YR4/2灰 黄褐	普	2mm以下の石 英・長石を含む	良	口縁端部に刻 目 ヘラ描沈線4条
22	12	SD04	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[7.4]	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/2 灰褐	普	2mm以下の石 英・長石・赤色 粒・黒色粒を含 む	良	口縁端部に刻 目
22	13	SD04	弥生土器	甕	口縁部	(12.8)	—	[5.5]	摩滅	摩滅	10YR7/4に ぶい黄橙	10YR8/2灰 白	普	2mm以下の石 英・長石を含む	良	口縁端部に刻 目 内面:接合痕
23	14	SK03	弥生土器	高杯	口縁～ 体部	(21.0)	—	[6.4]	摩滅	摩滅	2.5Y8/3淡 黄	2.5Y7/3浅 黄	普	2mm以下の石 英・長石を含む	良	
24	15	SK04	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[1.5]	摩滅	摩滅	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y7/3浅 黄	普	3mm以下の石 英・長石を含む	良	口縁端部に刻 目
24	16	SK04	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[6.9]	摩滅	摩滅	2.5Y6/3に ぶい黄	2.5Y6/3に ぶい黄	普	4mm以下の石 英・長石を含む	良	口縁端部に刻 目 ヘラ描沈線4条
24	17	SK04	弥生土器	甕	底部	—	(6.2)	[4.9]	ナデ・摩 滅	摩滅	5YR5/4に ぶい赤褐	10YR5/2灰 黄褐	普	3mm以下の石 英・長石を含む	良	
25	18	SK05	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[1.7]	摩滅	摩滅	10YR8/3浅 黄橙	10YR8/3浅 黄橙	普	2mm以下の石 英・長石を含む	良	刻目突帯 波状の口縁
25	19	SK05	弥生土器	壺	口縁部	—	—	[6.1]	ナデ	摩滅	10YR7/3に ぶい黄橙	10YR7/3に ぶい黄橙	普	3mm以下の石 英・長石・赤色 粒・黒色粒を含 む	良	ヘラ描沈線8条
25	20	SK05	弥生土器	不明	胴部	—	—	[4.0]	ナデ	摩滅	10YR6/3に ぶい黄橙	10YR5/2灰 黄褐	普	2mm以下の石 英・長石を含む	良	ヘラ描沈線5条
25	21	SK05	弥生土器	甕	底部	—	(10.0)	[6.4]	摩滅	摩滅	10YR6/3に ぶい黄橙	10YR6/3に ぶい黄橙	普	5mm以下の石 英・長石を含む	良	
25	22	SK05	弥生土器	甕	底部	—	(6.4)	[2.0]	摩滅	摩滅	10YR7/3に ぶい黄橙	10YR7/3に ぶい黄橙	普	4mm以下の石 英・長石・赤色 粒を含む	良	
26	23	C工区包含 層	弥生土器	甕	口縁～ 体部	—	—	[9.5]	摩滅	摩滅	10YR6/3に ぶい黄橙	10YR6/4に ぶい黄橙	普	1～4mm以下の 石英・長石・雲 母・赤色粒を含 む	良	櫛描直線文
26	24	C工区包含 層	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[2.5]	摩滅	摩滅	2.5Y7/4浅 黄	2.5Y7/4浅 黄	普	3mm以下の石 英・長石を含む	良	口縁端部に刻 目
30	25	SH01-SK01	弥生土器	高杯	坏部	17.0	—	[6.4]	横ナデ・ 分割ヘラ ミガキ	横ナデ・ 分割ヘラ ミガキ	10YR5/4に ぶい黄褐	10YR5/4に ぶい黄褐	普	1mm以下の石 英・長石・角閃 石・雲母・赤色 粒を含む	良	香東川下流域 産土器
30	26	SH01-SK01	弥生土器	甕	口縁部	(13.6)	—	[4.8]	横ナデ	横ナデ・ 指オサエ	10YR5/4に ぶい黄褐	10YR5/4に ぶい黄褐	普	2mm以下の石 英・長石を含む	良	香東川下流域 産土器

第6表 土器観察表 (2)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名 /層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考	
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
30	27	SH01-SK01	弥生土器	甕	底部	—	(2.0)	[3.4]	摩滅	摩滅	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	普	2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
30	28	SH01-SK02	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[1.9]	摩滅	摩滅	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	普	2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
30	29	SH01-SK02	弥生土器	鉢	口縁部	—	—	[2.6]	摩滅	横ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	普	2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
30	30	SH01-SK02	弥生土器	壺	底部	—	6.5	[9.8]	ナデ	摩滅	2.5Y8/3淡黄	2.5Y6/2灰黄	普	3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	外面:黒斑
30	31	SH01貼床内	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[3.0]	摩滅	摩滅	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普	1mm以下の石英・長石・赤色粒・白色粒を含む	良	香東川下流域産土器
31	32	SH02-SP01	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[1.8]	摩滅	ナデ・摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	普	1mm以下の石英・長石を含む	良	
31	33	SH02-SP01	弥生土器	甕	底部	—	(5.0)	[4.6]	ハケ目・摩滅	摩滅	7.5YR6/4にぶい橙	10YR6/2灰黄褐	普	1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	
34	34	SH04-SK01	弥生土器	高杯	脚部	—	12.5	[17.1]	ナデ	ケズリ・ナデ・絞り目	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普	3mm以下の石英・長石を含む	良	ヘラ描直線文 外面:黒斑 香東川下流域産土器
34	35	SH04-SP02	弥生土器	高杯	口縁部	(32.0)	—	[4.0]	横ナデ・摩滅	横ナデ・ヘラミガキ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普	3mm以下の石英・長石・黒雲母を含む	良	香東川下流域産土器
34	36	SH04床面直上	弥生土器	高杯	口縁～ 坏部	(25.4)	—	[5.4]	横ナデ・ヘラミガキ	横ナデ・ヘラミガキ	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	普	4mm以下の石英・長石を含む	良	口縁部:凹線 香東川下流域産土器
34	37	SH04埋土	弥生土器	製塩土器	脚部	—	3.3	[1.8]	摩滅	摩滅	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	普	1～2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
34	38	SH04埋土	弥生土器	甕or壺	底部	—	(6.0)	[2.4]	摩滅	摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	普	6mm以下の石英・長石を含む	良	外面:黒斑
36	39	SH05貼床内	弥生土器	高杯	坏部	(22.6)	—	[5.8]	摩滅	横ナデ・摩滅	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普	3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	香東川下流域産土器
36	40	SH05貼床内	弥生土器	大型鉢	口縁部	—	—	[9.4]	摩滅	横ナデ・ハケ目・摩滅	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	普	3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	口縁部:黒斑 香東川下流域産土器
36	41	SH05貼床内	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[2.0]	摩滅	摩滅	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	普	1mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒・黒色粒を含む	良	香東川下流域産土器
36	42	SH05貼床内	弥生土器	壺	口縁～ 頸部	—	—	[5.7]	摩滅	摩滅	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	普	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	ヘラ描沈線7条
36	43	SH05-SK03	弥生土器	甕	底部	—	(4.2)	[3.5]	ナデ・ミガキ	ハケ目・ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	普	2mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒・黒色粒を含む	良	外面:黒斑 香東川下流域産土器
39	44	SH06貼床内	弥生土器	甕	口縁部	(13.6)	—	[7.0]	摩滅	摩滅	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普	3mm以下の石英・長石を含む	良	香東川下流域産土器
39	45	SH06貼床内	弥生土器	甕	口縁部	(16.4)	—	[2.6]	摩滅	摩滅	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普	1mm以下の石英・長石・小石を含む	良	香東川下流域産土器
39	46	SH06貼床内	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[2.1]	摩滅	摩滅	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	普	2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	香東川下流域産土器
39	47	SH06貼床内	弥生土器	高杯	口縁部	(19.6)	—	[4.7]	横ナデ・摩滅	摩滅	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	普	1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	香東川下流域産土器
39	48	SH06貼床内	弥生土器	高杯	口縁部	—	—	[3.2]	摩滅	横ナデ・摩滅	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	普	4mm以下の石英・長石・1mm以下の赤色粒を含む	良	香東川下流域産土器

第7表 土器観察表 (3)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名 /層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
39	49	SH06貼床内	弥生土器	高杯	脚部	—	—	[5.6]	摩滅	摩滅	10YR5/4に ぶい黄褐	10YR5/3に ぶい黄褐	普	良	香東川下流域 産土器
39	50	SH06貼床内	弥生土器	鉢	口縁～ 体部	(20.6)	—	[4.8]	摩滅	摩滅	10YR5/4に ぶい黄褐	10YR5/4に ぶい黄褐	普	良	香東川下流域 産土器
39	51	SH06貼床内	弥生土器	鉢	口縁～ 体部	—	—	[7.8]	摩滅	摩滅	10YR5/4に ぶい黄褐	10YR5/4に ぶい黄褐	普	良	外面:黒斑 香東川下流域 産土器
39	52	SH06貼床内	弥生土器	甕	底部	—	(3.0)	[3.0]	摩滅	摩滅	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR4/4に ぶい赤褐	普	良	外面:黒斑
39	53	SH06貼床内	弥生土器	甕	底部	—	(5.4)	[1.9]	摩滅	摩滅	5YR6/6橙	5YR6/6橙	普	良	
39	54	SH06貼床内	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[1.7]	摩滅	摩滅	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR7/2に ぶい黄橙	普	良	
39	55	SH06貼床内	弥生土器	不明	胴部	—	—	[2.8]	摩滅	摩滅	10YR8/2灰 白	10YR8/2灰 白	普	良	ヘラ描き沈線6 条
39	56	SH06貼床内	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[6.6]	摩滅	摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4に ぶい黄橙	普	良	外面:黒斑
39	57	SH06貼床内	弥生土器	高杯	脚部	—	—	[6.5]	摩滅	絞り目	2.5Y7/2灰 黄	2.5Y7/2灰 黄	普	良	
39	58	SH06-SP11	弥生土器	製塩土 器	脚部	—	(3.5)	[0.8]	摩滅	摩滅	2.5YR5/4 にぶい赤 褐	2.5YR5/4 にぶい赤 褐	普	良	
39	59	SH06-SP14	弥生土器	大型鉢	口縁部	—	—	[4.2]	横ナデ	横ナデ	10YR6/4に ぶい黄橙	10YR6/3に ぶい黄橙	普	良	香東川下流域 産土器
39	60	SH06-SP17	弥生土器	製塩土 器	脚部	—	4.0	[3.4]	指オサ エ・摩滅	摩滅	2.5Y6/3に ぶい黄	2.5Y4/1黄 灰	普	良	
39	61	SH06-SP17	弥生土器	製塩土 器	脚部	—	3.3	[2.6]	摩滅	摩滅	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	普	良	
40	62	SD05	弥生土器	甕	口縁部	(20.4)	—	[3.2]	横ナデ	横ナデ・ 摩滅	10YR6/3に ぶい黄橙	10YR6/3に ぶい黄橙	普	良	外面:黒斑
40	63	SD05	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[2.9]	摩滅	横ナデ	10YR5/3に ぶい黄褐	10YR5/3に ぶい黄褐	普	良	
40	64	SD05	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[2.4]	横ナデ	横ナデ	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y8/4淡 黄	普	良	
42	65	SX01	弥生土器	高杯	坏部	(15.9)	—	[6.2]	摩滅	摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	普	良	
42	66	SX01	弥生土器	小型鉢	口縁～ 胴部	—	—	[3.4]	摩滅	ナデ	10YR6/2灰 黄褐	10YR5/2灰 黄褐	普	良	
43	67	SK06	土師器	甕	口縁部	—	—	[2.7]	摩滅	摩滅	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y7/3浅 黄	普	良	
44	68	SK07	弥生土器	高杯	口縁部	—	—	[2.8]	摩滅	横ナデ・ 摩滅	2.5Y6/3に ぶい黄	2.5Y6/3に ぶい黄	普	良	外面・内面:黒斑
44	69	SK08	弥生土器	高杯	脚部	—	—	[2.0]	ナデ・摩 滅	ナデ・摩 滅	10YR6/4に ぶい黄橙	10YR6/4に ぶい黄橙	普	良	香東川下流域 産土器
45	70	C工区包含 層	弥生土器	高杯	口縁部	—	—	[3.5]	摩滅	摩滅	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/3に ぶい黄褐	普	良	香東川下流域 産土器
45	71	A1-3工区包 含層	弥生土器	高杯	脚部	—	—	[2.0]	摩滅	摩滅	10YR4/3に ぶい黄褐	10YR4/4褐	普	良	香東川下流域 産土器

第8表 土器観察表 (4)

挿図 番号	遺物 番号	遺構名 /層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
45	72	A1-3工区包含層	弥生土器	製塩土器	脚部	—	(4.1)	[3.7]	ナデ・指 オサエ	指オサ エ・絞り 目	10YR6/3に ぶい黄橙	10YR6/6明 黄褐	普 2mm以下の石 英・長石、1mm 以下の赤色粒 を含む	良	
48	73	SH07-SP01	須恵器	大甕	胴部	—	—	[4.2]	叩き	ナデ	5Y5/1灰	5Y6/1灰	精良 1mm以下の石 英・長石を含む	良好	
50	74	SH08貼床内	弥生土器	高杯	脚部	—	—	[1.9]	ナデ・摩 滅	摩滅	10YR5/4に ぶい黄褐	10YR4/2灰 黄褐	普 1mm以下の石 英・長石・角閃 石を含む	良	穿孔1ヶ所 香東川下流域 産土器
52	75	SH09-SK01	須恵器	杯蓋	完形	13.0	—	5.8	回転ナ デ・回転 ヘラ削り	回転ナ デ・回転 ヘラ削り	N6/灰	N6/灰	精良 1mm以下の石 英・長石・黒色 粒を含む	良好	
52	76	SH09-SK01	須恵器	杯身	口縁～ 坏部	(10.6)	—	[4.55]	回転ナ デ・回転 ヘラ削り	回転ナ デ・回転 ヘラ削り	N6/灰	N6/灰	精良 1mm以下の石 英・長石を含む	良好	
52	77	SH09貼床内	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[1.8]	横ナデ	横ナデ	10YR5/3に ぶい黄褐	10YR5/3に ぶい黄褐	普 1～2mm以下の 石英・長石・雲 母・赤色粒を含 む	良	香東川下流域 産土器
53	78	SH10貼床内	土師器	高杯	坏部	(15.0)	—	[6.0]	ナデ・摩 滅	ナデ・摩 滅	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y7/3浅 黄	普 1mm以下の石 英・長石・赤色 粒・黒色粒を含 む	良	
53	79	SH10貼床内	土師器	高杯	坏部	—	—	[2.1]	摩滅	摩滅	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y7/3浅 黄	普 1mm以下の石 英・長石・赤色 粒・黒色粒を含 む	良	内・外面:黒斑
53	80	SH10貼床内	弥生土器	甕	口縁部	—	—	[2.4]	摩滅	摩滅	10YR6/3に ぶい黄橙	10YR6/3に ぶい黄橙	普 3mm以下の石 英・長石を含む	良	
53	81	SH10-SP01	弥生土器	壺	口縁部	—	—	[2.4]	ナデ・摩 滅	ナデ・摩 滅	2.5Y5/3黄 褐	2.5Y5/3黄 褐	普 4mm以下の石 英・長石・角閃 石を含む	良	香東川下流域 産土器
54	82	SH11貼床内	須恵器	コップ 型土器	口縁～ 体部	(11.2)	(6.6)	7.2	回転ナ デ・ナデ	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	精良 1mm以下の石 英・長石を含む	良好	胴部中央に櫛 描波状文
54	83	SH11貼床内	須恵器	杯蓋	口縁～ 坏部	(12.8)	—	[3.4]	回転ナ デ・回転 ヘラケズリ	回転ナデ	N6/灰	2.5Y6/1黄 灰	精良 1mm以下の石 英・長石・黒色 粒を含む	良好	
56	84	SH12貼床内	土師器	高杯	坏～脚 部	14.0	13.4	坏[5.3] 脚[8.1]	ナデ・摩 滅	ナデ・摩 滅・指ナ デ	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y7/3浅 黄	普 3mm以下の石 英・長石・赤色 粒を含む	良	円孔3カ所
56	85	SH12貼床内	土師器	高杯	脚部	—	—	[5.7]	摩滅	摩滅	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y7/3浅 黄	普 1mm以下の石 英・長石・赤色 粒・黒色粒を含 む	良	
56	86	SH12貼床内	土師器	高杯	脚部	—	—	(6.1)	摩滅	摩滅	10YR8/2灰 白	10YR8/2灰 白	普 2mm以下の石 英・長石・赤色 粒を含む	良	
56	87	SH12貼床内	土師器	甕	口縁部	(24.0)	—	[4.2]	摩滅	摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3に ぶい黄橙	普 3mm以下の石 英・長石・赤色 粒を含む	良	
56	88	SH12-SP02	土師器	高杯	脚部	—	—	[6.8]	摩滅	絞り目・ 摩滅	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	普 1mm以下の石 英・長石・赤色 粒・黒色粒を含 む	良	
58	89	SB02-SP03	須恵器	甕	口縁～ 頸部	(10.3)	—	[4.9]	回転ナ デ・波状 文	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	精良 0.5mm以下の石 英・長石・赤色 粒・黒色粒を含 む	良好	櫛描波状文
60	90	SK10	土師器	甕	口縁～ 胴部	(24.0)	—	[11.8]	摩滅	摩滅	2.5Y5/3黄 褐	2.5Y5/3黄 褐	普 1～5mm以下の 石英・長石・黒 色粒を含む	良	
61	91	D1-3工区包含層	須恵器	杯蓋	口縁部	—	—	[2.9]	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y5/1黄 灰	2.5Y6/1黄 灰	精良 1mm以内の砂 粒を含む	良好	
61	92	A1-3工区包含層	須恵器	杯蓋	口縁部	—	—	[2.7]	回転ナデ	回転ナデ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	精良 2mm以下の石 英・長石・黒色 粒を含む	良好	
61	93	D2工区包含層	須恵器	杯蓋	口縁～ 胴部	—	—	[3.6]	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	精良 1mm以下の石 英・長石・黒色 粒を含む	良好	
61	94	A1-3工区包含層	須恵器	杯身	口縁～ 体部	(11.6)	13.8	[4.6]	回転ナ デ・回転 ヘラケズリ	回転ナ デ・ナデ	N6/灰	N6/灰	精良 1mm以下の砂 粒を含む	良好	
61	95	A1-3工区包含層	須恵器	甕	口縁部	—	—	[4.7]	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	精良 1mm以下の石 英・長石を含む	良好	

第9表 土器観察表 (5)

挿図番号	遺物番号	遺構名/層位	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
61	96	D2工区包含層	須恵器	甕	胴部	—	—	[9.0]	回転ナデ	回転ナデ・絞り目	N6/灰	N6/灰	精良 1mm以下の石英・長石を含む	良好	内・外面:自然釉付着 櫛描波状文・刻み目
61	97	D2工区包含層	土師器	鉢	口縁部	(7.5)	—	[2.9]	摩滅	摩滅	5YR6/4にぶい橙	5YR7/3にぶい橙	普 2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
61	98	D2工区包含層	土師器	移動式カマド	上部	—	—	[4.2]	摩滅	摩滅	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	普 2mm以下の石英・長石・赤色粒・白色粒を含む	良	外面:煤付着
67	99	SD06	弥生土器	壺	口縁部	(32.8)	—	[7.4]	摩滅	摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR5/2灰黄褐	普 3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	内面に突帯貼付
69	100	SK17	弥生土器	高杯	脚部	—	—	[1.5]	横ナデ・摩滅	横ナデ・摩滅	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	普 1mm以下の石英・長石を含む	良	
72	101	B4工区包含層	須恵器	杯	口縁部	—	—	[2.7]	回転ナデのち摩滅	回転ナデ	7.5Y7/1灰白	N7/灰白	精良 2mm以下の石英・長石を含む	良好	
72	102	A1-3工区包含層	須恵器	杯	底部	—	—	[1.1]	ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	精良 2mm以下の石英・長石・黒色粒を含む	良好	
72	103	D2工区包含層	青磁	碗	口縁部	(15.0)	—	[3.0]	ナデ・施釉	ナデ・施釉	釉調:透明	胎土:5Y8/1灰白	細		外面に鎬蓮弁文
72	104	D2工区包含層	弥生土器	足釜	脚部	—	—	[7.8]	摩滅	摩滅	10YR6/4にぶい黄橙	10YR4/4褐	普 3mm以下の石英・長石を含む	良	

第10表 木製品観察表

挿図番号	報告書番号	遺構名/層位	器種	法量(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
52	W1	SH09-SP02	柱材	[19.4]	[10.2]	[9.6]	樹種同定・放射性炭素年代測定 (No. 16)
52	W2	SH09-SP03	柱材	[16.0]	[10.2]	[9.5]	樹種同定・放射性炭素年代測定 (No. 15)

第11表 石製品観察表

挿図番号	報告書番号	遺構名/層位	種類	機種	石材	法量(cm)				備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	
18	S1	SD01	石器	打製石斧	サヌカイト	[6.8]	[6.5]	2.0	109.3	
18	S2	SD01	石器	石錐	サヌカイト	[2.9]	[3.15]	0.7	5.3	
25	S3	SK05	石器	磨製石包丁	安山岩か	6.1	[10.2]	0.8	72.9	
34	S4	SH04床面直上	石器	砥石	泥岩か	[5.2]	[1.5]	0.9	8.6	
39	S5	SH06貼床内	石器	打製石鏃	サヌカイト	[3.9]	[1.9]	0.4	2.8	
45	S6	A1-4工区包含層	石器	打製石包丁	結晶片岩	[3.8]	[6.3]	0.7	27.9	
45	S7	D2工区包含層	石器	打製石斧	サヌカイト	[5.1]	[7.1]	1.3	45.6	
45	S8	C工区包含層	石器	石槍	サヌカイト	12.1	3.25	1.3	53.7	
45	S9	D2工区包含層	石器	叩き石	サヌカイト	7.6	7.85	2.5	208.8	
45	S10	D2工区包含層	石器	石匙	サヌカイト	4.1	5.1	0.9	14.9	
45	S11	D2工区包含層	石器	打製石鏃	サヌカイト	2.35	1.83	0.5	2.0	
45	S12	C工区包含層	石器	石核	サヌカイト	[5.5]	[4.7]	[1.1]	37.3	
50	S13	SH08貼床内	石器	打製石斧or石核	サヌカイト	7.9	4.5	1.6	71.2	

# 写真図版



SH 09- S K 01 遺物出土状況①

写真図版 2 (調査区全景)



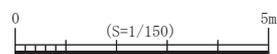
0 (S=1/400) 10m

発掘調査区全景オルソ撮影 (S=1/400)



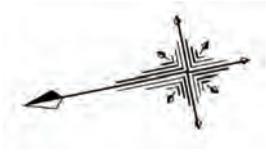
A1 工区オルソ撮影 (S=1/150)

写真図版 4 (A2工区全景)



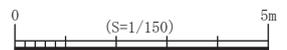
A2 工区オルソ撮影 (S=1/150)

写真図版 5 (B工区全景)



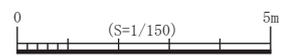
B工区オルソ撮影 (S=1/200)

写真図版 6 (C工区全景)



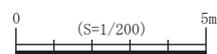
C工区オルソ撮影 (S=1/150)

写真図版 7 (D1工区全景)



D1 工区オルソ撮影 (S=1/150)

写真図版 8 (D2工区全景)



D2 工区オルソ撮影 (S=1/200)



基本層序 壁面① (北から)



基本層序 壁面② (北から)



基本層序 壁面④ (東から)



基本層序 壁面③ (東から)



基本層序 壁面⑤ (東から)



基本層序 壁面⑥ (北から)



旧河道断割断面 (南西から)



S D 01 完掘状況 (北西から)



S D 01 断面 (南東から)



S D 01 遺物出土状況



S D 02 断面 (西から)



S K 01 断面一部 (南西から)



S K 02 半裁状況 (南西から)



S K 04 断面 (南西から)



S K 05 半裁状況 (南西から)



S K 05 遺物出土状況①



S K 05 遺物出土状況②



SH 01 遺構検出状況 (南西から)



SH 02 南側遺構検出状況 (北西から)



SH 01- SK 01 遺物出土状況



SH 01- SK 02 遺物出土状況



SH 04 完掘状況 (北から)



SH 04- SK 01 遺物検出状況①



SH 04- SK 01 遺物検出状況②



SH 04- SK 01 遺物検出状況③



SH 05 西側完掘状況 (南から)



SH 05 南側断面 (北から)



SH 05-SK 01 断面 (北西から)



SH 06 遺構検出状況 (西から)



SH 06 南側断面 (南から)



SD 05 南側断面 (南東から)



SD 05 北側断面 (南東から)



S X 01・02 切り合い断面 (北西から)



S X 01 遺物出土状況①



S X 01 遺物出土状況②



S K 09 半裁状況 (南西から)



S H 07 遺構検出状況 (北西から)



SH 08 遺構検出状況 (北西から)



SH 09 遺構検出状況 (北西から)



SH 09- SK 01 遺物出土状況②



SH 09- SP 02 柱材出土状況



SH 09- SP 03 柱材出土状況



SH 10 遺構検出状況 (北から)



SH 10 完掘状況 (北から)



SH 11 遺構検出状況 (北西から)



SH 12 断面 (北東から)



SH 12 遺構検出状況 (東から)



SH 12- SP 01 断面 (南西から)



SH 12 遺物出土状況



SB 01- SP 03 断面



SB 01- SP 04 断面



SB 02- SP 01 断面



SB 02- SP 02 断面



SB 02- SP 03 断面



SB 02- SP 04 断面



SB 03- SP 01 断面



SB 03- SP 03 断面



SB 03- SP 05 断面



SB 03- SP 06 断面



SB 04- SP 01 断面



SB 04- SP 03 断面



SK 13 断面 (東から)



SK 24 断面一部 (南西から)



SD 07 断面 (南西から)



SD 01 出土遺物①



SD 01 出土遺物②





14

S K 03 出土遺物



S3

S K 05 出土遺物



16

19

18

15



20



17



22



21

S K 04・05 出土遺物



34

36

35

38

37

S4

S H 04 出土遺物



SH 01 出土遺物

写真図版 27 (弥生時代後期前半～後期後半の遺物)





SH 06 出土遺物



S H 09 出土遺物①



S H 09 出土遺物②



S H 09 出土遺物③



S H 08 ~ 10、S K 10、包含層出土遺物



S H 11 出土遺物



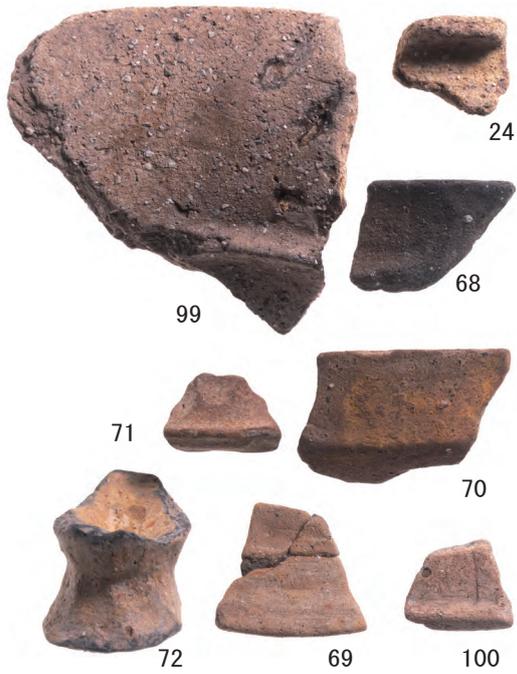
須恵器集合



SH 12 出土遺物



SD 05、SX 01、SK 06 出土遺物



SD 06、SK 07・08・17、包含層出土遺物



包含層出土遺物



石器集合



石槍 表



石槍 裏

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	おおたしも・すがわいせき (だいがじちょうさ)							
書名	太田下・須川遺跡 (第5次調査)							
副書名	新駅駅前広場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第222集							
編著者名	梶原 慎司・有岡 京香							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2021年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
おおたしも・すがわいせき 太田下・須川遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 おおたしもまち 太田下町	37201	10598	34° 31' 02"	134° 04' 83"	2019.07.26 ～ 2020.01.31	2,650 m <sup>2</sup>	新駅駅前 広場整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
太田下・須川遺跡	集落跡	弥生時代以前		流路				
		弥生時代前期		溝・土坑		弥生土器		
		弥生時代後期～ 古墳時代前期		竪穴建物跡・ 溝・土坑・ 不明遺構		弥生土器		
		古墳時代中期後半～ 後期初頭		竪穴建物跡・ 掘立柱建物 跡・土坑		須恵器 土師器		
		古代以降		竪穴建物跡・ 掘立柱建物 跡・溝・土坑・ 不明遺構		弥生土器 須恵器 陶磁器		
要約	<p>弥生時代以前の流路、弥生時代の竪穴建物跡・溝・土坑を確認した。周辺の流路や溝からの遺物出土状況を鑑みると、後期後半まで集落が継続している可能性が高い。</p> <p>また古墳時代中期後半～後期初頭の竪穴建物跡・掘立柱建物跡を多数検出し、第1・4次調査で確認された居住域の一部であることが明らかとなった。この居住域はさらに北東、南側に広がっていると考えられる。</p>							

新駅前広場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 太田下・須川遺跡（第5次調査）

令和3年3月31日

編集 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目8番15号  
発行 高松市教育委員会  
印刷 (有) 中央ファイリング